

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

昭和三十五年五月二十日印刷 第一巻第六号
昭和三十五年六月一日発行 (毎月一回一日発行)

風俗奇譚

嗜虐陶醉特集

風俗奇譚

昭和三十五年五月二十日印刷 第一巻第六号
昭和三十五年六月一日発行 (毎月一回一日発行)



嗜虐陶醉特集

特集・フェチシズム(淫物症)
マゾヒストの往復書簡



6

定価130円



(上) 喜多川歌麿筆の色艶画(部分)、(下) 鈴木春信筆の“吾嬬土産”より



喜多川歌麿の大錦圓帖の部分図

(多色口絵) 痛ましき祭壇..... (折込み)

ア	樹間のニンフ.....	(二二)	密室の呪縛.....	(二〇)
ビ	足づり裸女.....	(二四)	庭園の囚魚.....	(二三)
ラ	障子の前の残虐.....	(二六)	憂愁の美女.....	(二四)
グ	狂熱の園.....	(二八)	読者の緊縛写真.....	(二六)

喜多川歌麿の艶画より..... (表紙二)
 鈴木春信の「吾婦土産」より..... (表紙三)
 虐げられる女と虐げる女..... (目次裏)

特集 フェチシズム (淫物症)

フェチシズムの実態.....	大達欣治 (三二)
毛に関するフェチシズム.....	染井恵一郎 (三九)
排泄物に発情する.....	植村久三 (四二)
フェチシズムの源泉は嗅覚.....	湯浅重二 (六七)
下着フェチシズム 女の下着に欲情する男.....	高島隆 (四四)
片輪男にしか性欲を感じない女.....	和田友作 (四九)
黒い通り魔・女の乳房刺し腎切り事件史.....	新川勇二 (五四)



(写真口絵) 変態名画館..... (三七)

浣腸に魅入られた女.....	鶴藤恵 (七六)
変態王・燕山君.....	小松五郎 (八七)
八十七個の洗濯バサミ.....	星野かほる (八二)

マゾヒストの手紙から..... 谷貫太 (八八)

狐が女に化け男と契った話.....	若月泰明 (九四)
花嫁は略奪すべし.....	庄司善吉 (九〇)
明治性的珍聞史 (5).....	(九九)
変態見世物総まくり.....	入谷大介 (二六)
刑罰はどのように変態的か.....	久保寺正巳 (二六)

マゾ妻・二代目「矢作ヨネ」..... 浜村利男 (二三)

十八の乙女を散らした変態性欲.....	竹崎孝 (三九)
「男」が立たない場合の悩み解決法.....	医学博士 松井宏 (二三)
銭湯ノゾキ話.....	日比野寛治 (三九)

アブチックレスボスの日..... 真崎伸一 (四一)

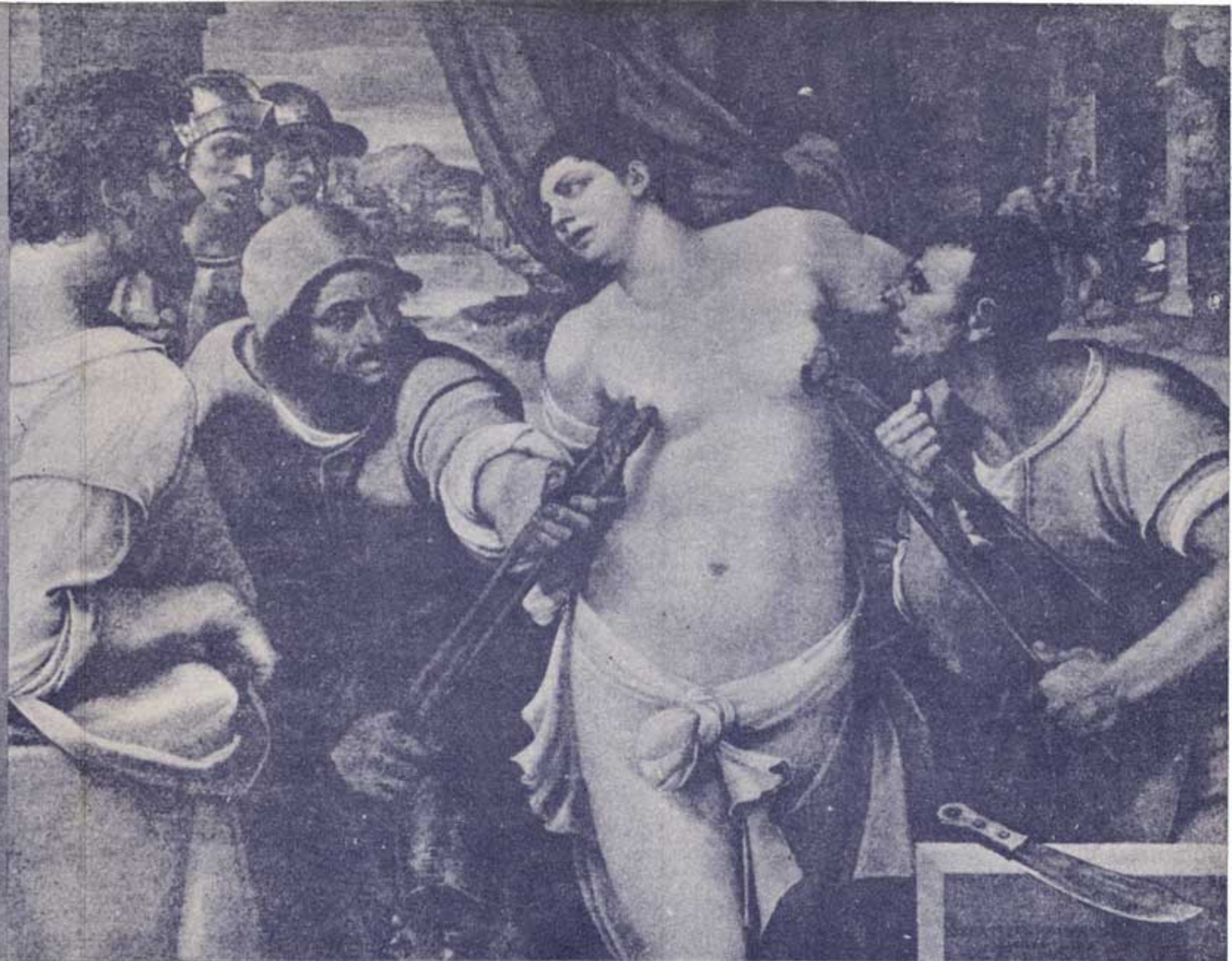


マックス・フローニン の “ヨロンボの踊り子”

いけにえの祭壇

白と黒は葬式の色。人生でいちばん厳粛な祭典の色。そして女の肌がさえええと光る色。喜びと悲しみと愛と憎がからみあって透明になる色。



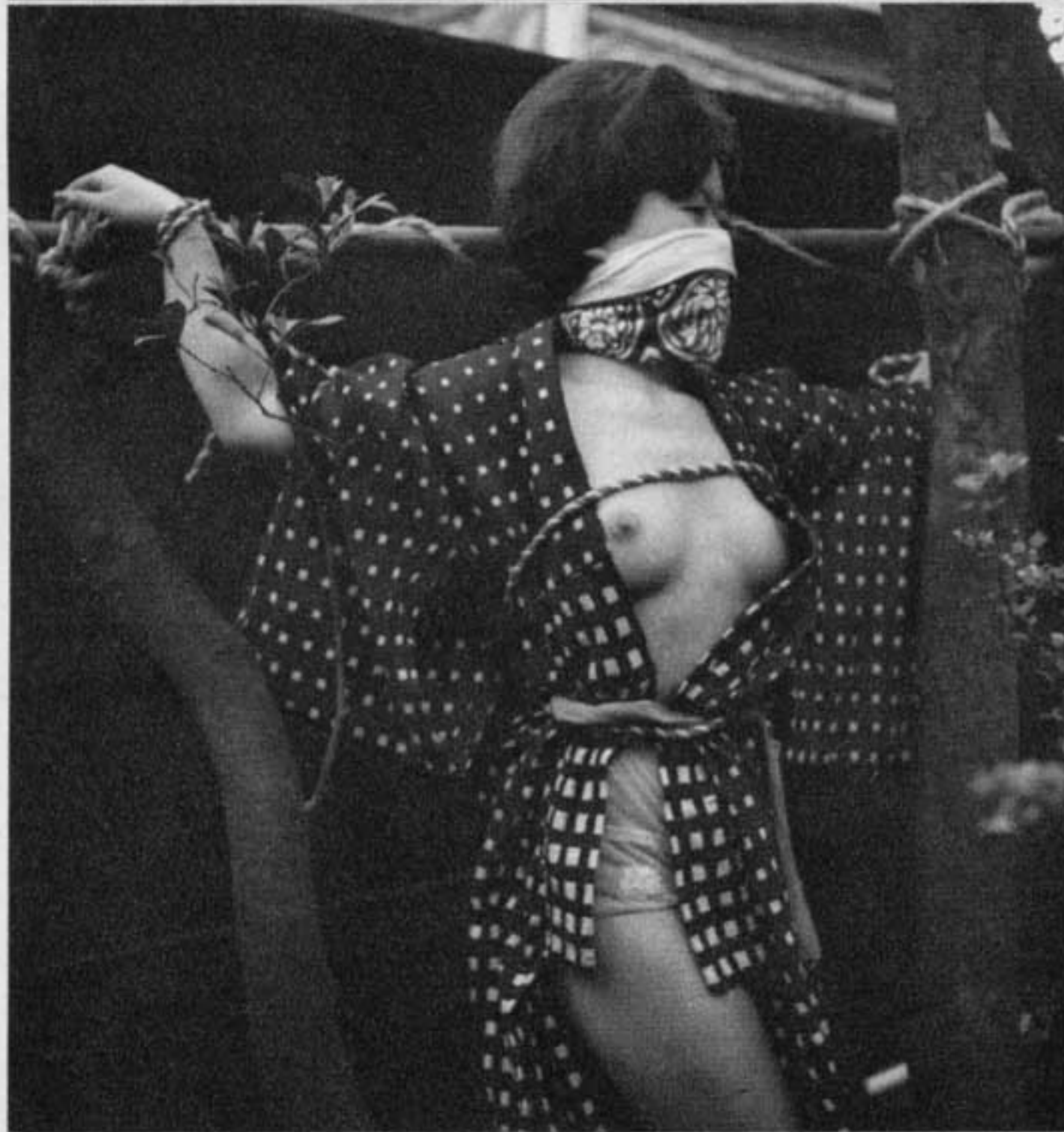


上はフーレス筆の「剥げられる女」、下はヘーゲマン筆の「戦しきアマゾン女王」



樹間のニンフ

両手両足を木の枝と幹にくくりつけられたハリツケの姿勢。その肌に木もれ日がちらつく。



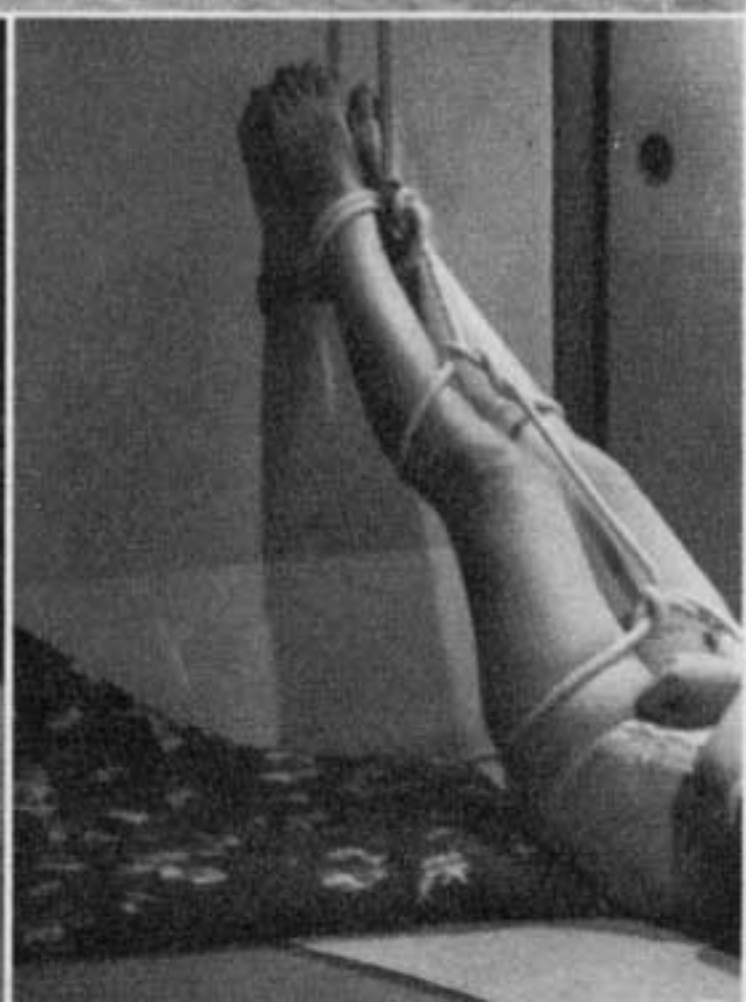
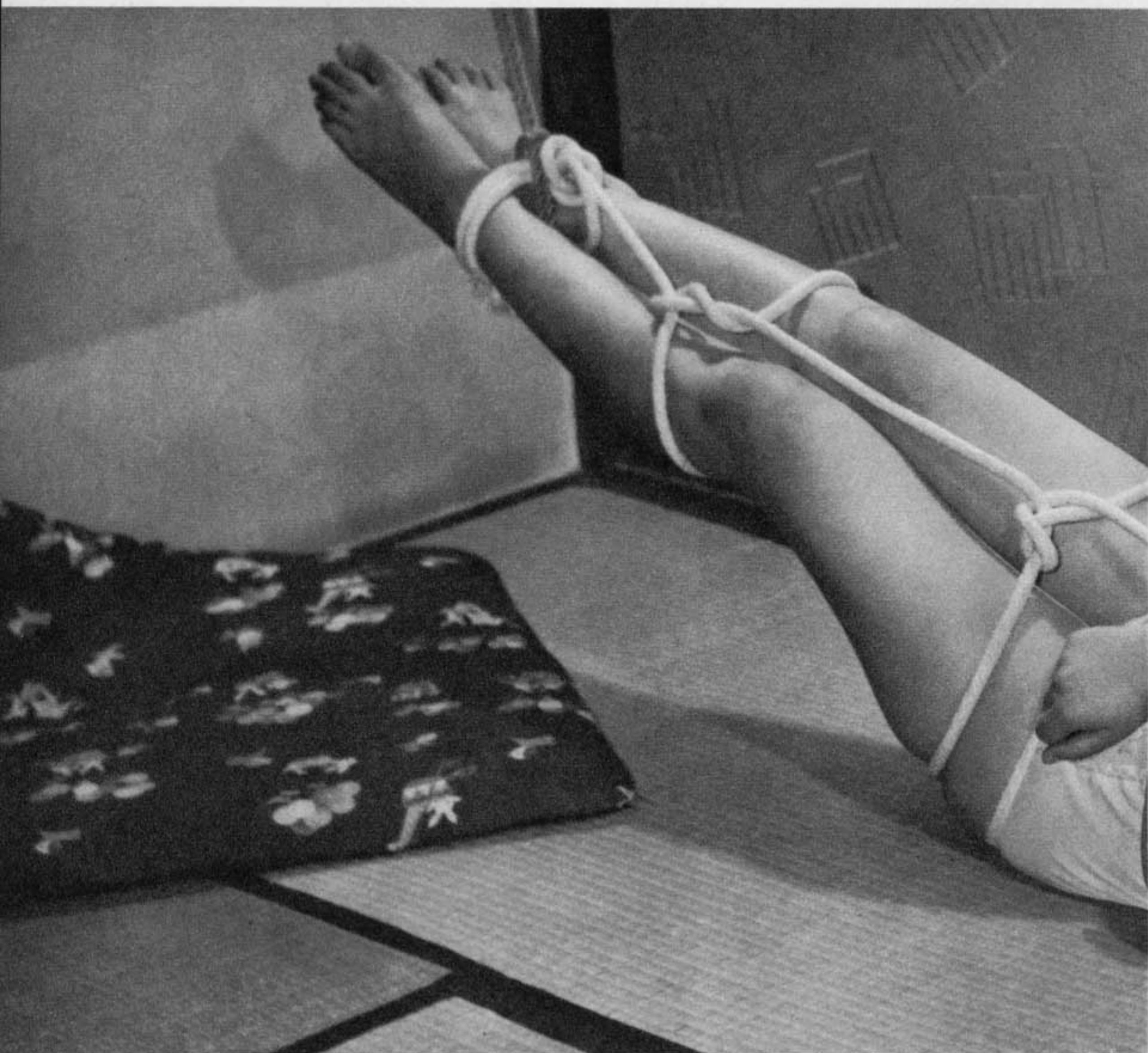
人気のない奥庭には静寂がただよっている。
立ち木と綱が女体を責め、異様な雰囲気をつ
くり出す。チラチラと白い肌に木もれ日がち
らつくと、女体は目に見えない炎をたてる。





がんじがらめにされて投げ出された裸女
は、足首をつられて、釣り上げられた魚
のように身動きもできない。ま昼の悦虐。

女 裸 づ り 足





障子の前の残虐

ヒモが女体にくいこむとき、妖しい法悦の花
園の扉がひらく。残虐であって残虐でない、
この妖美の世界の不可思議さよ。女はひとと
きの陶醉に、すべてを賭けてもいいと思う。





狂熱の閨

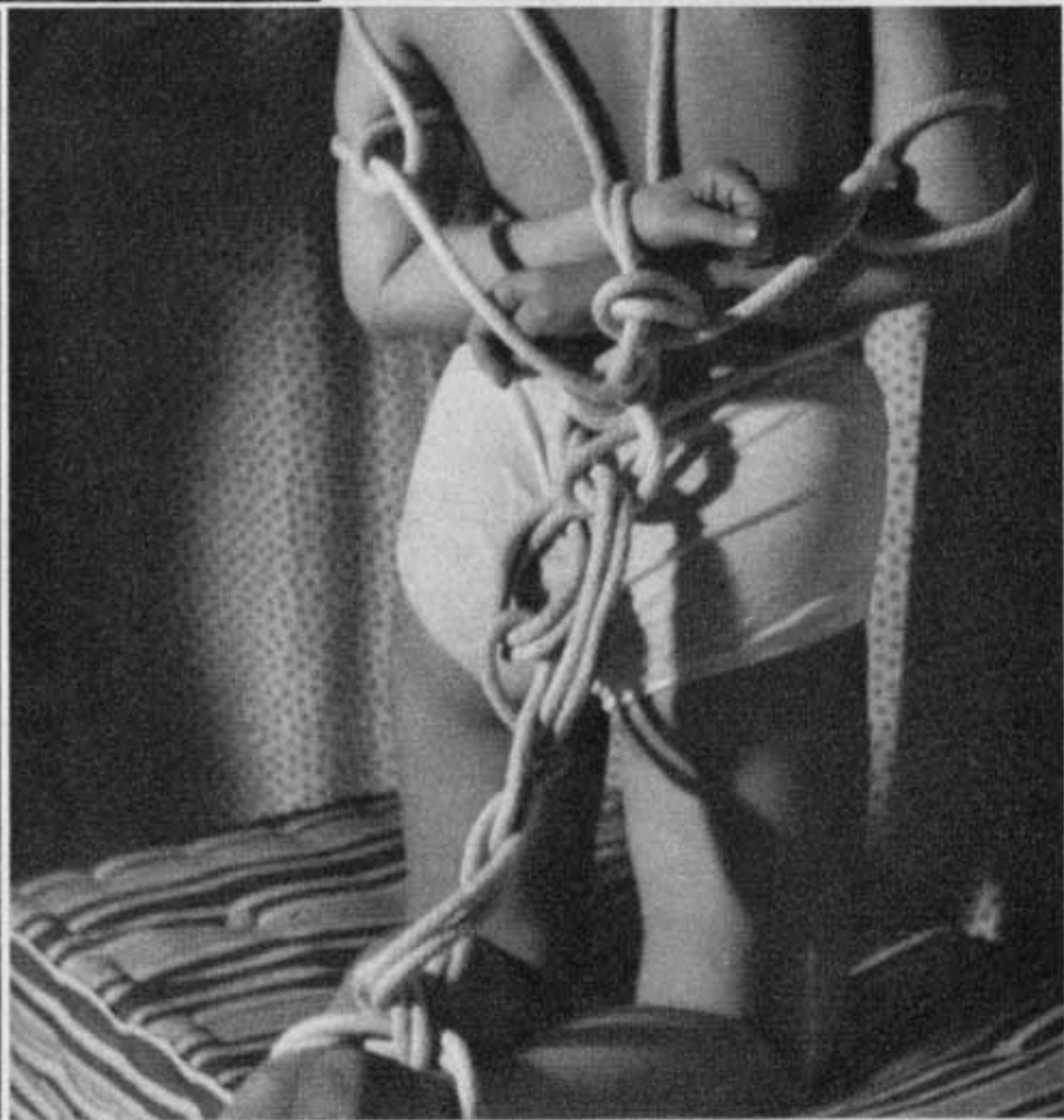
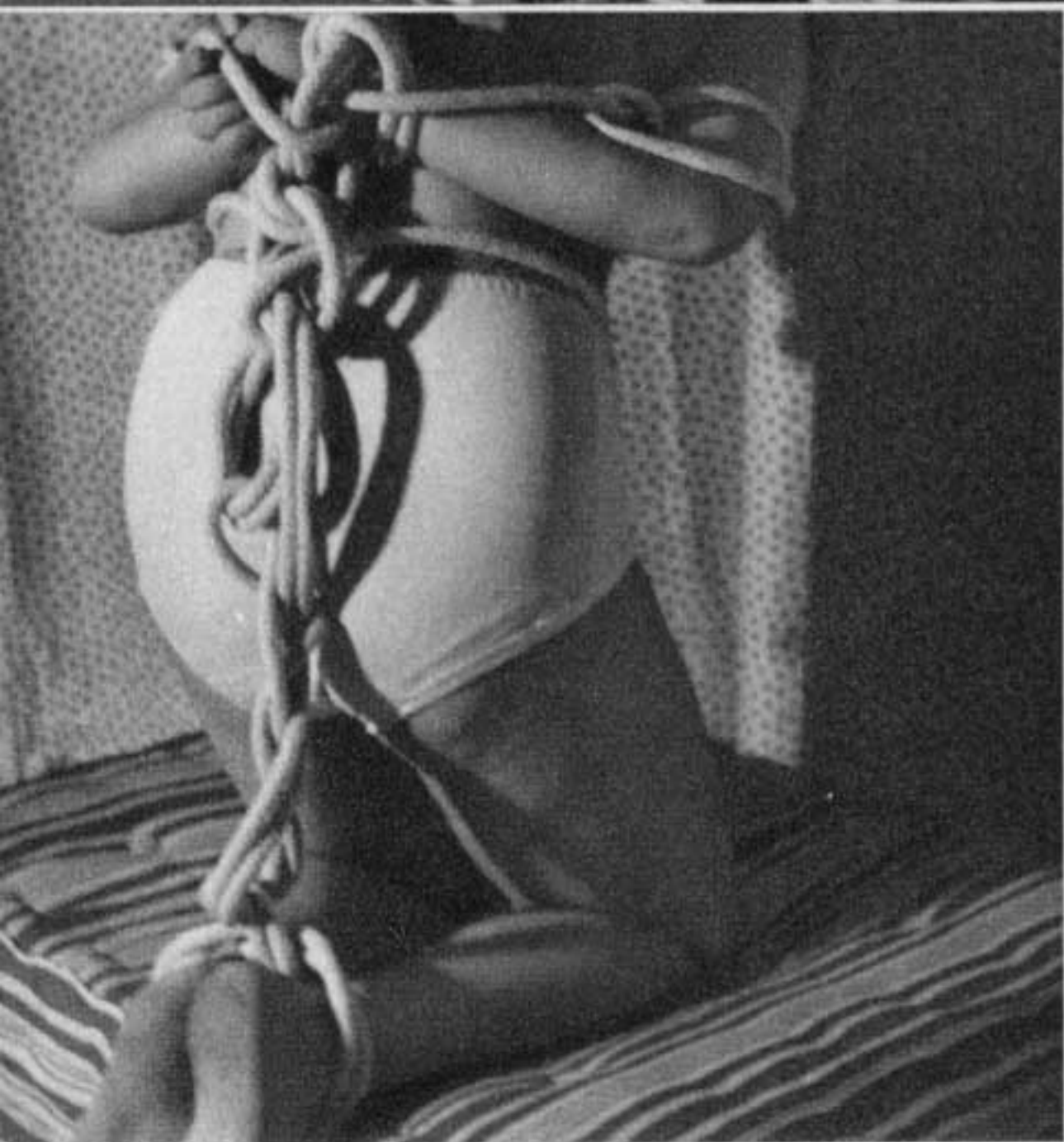
あたしは捕われの小鳥。縛られて、投げ出されて、さて、どんなお仕置きを受けるのかしら。どんなことをされても逃げることもできないあたしは、そこに女の幸福を、見つけ出したい。女の生き甲斐を、さぐり当てたい。





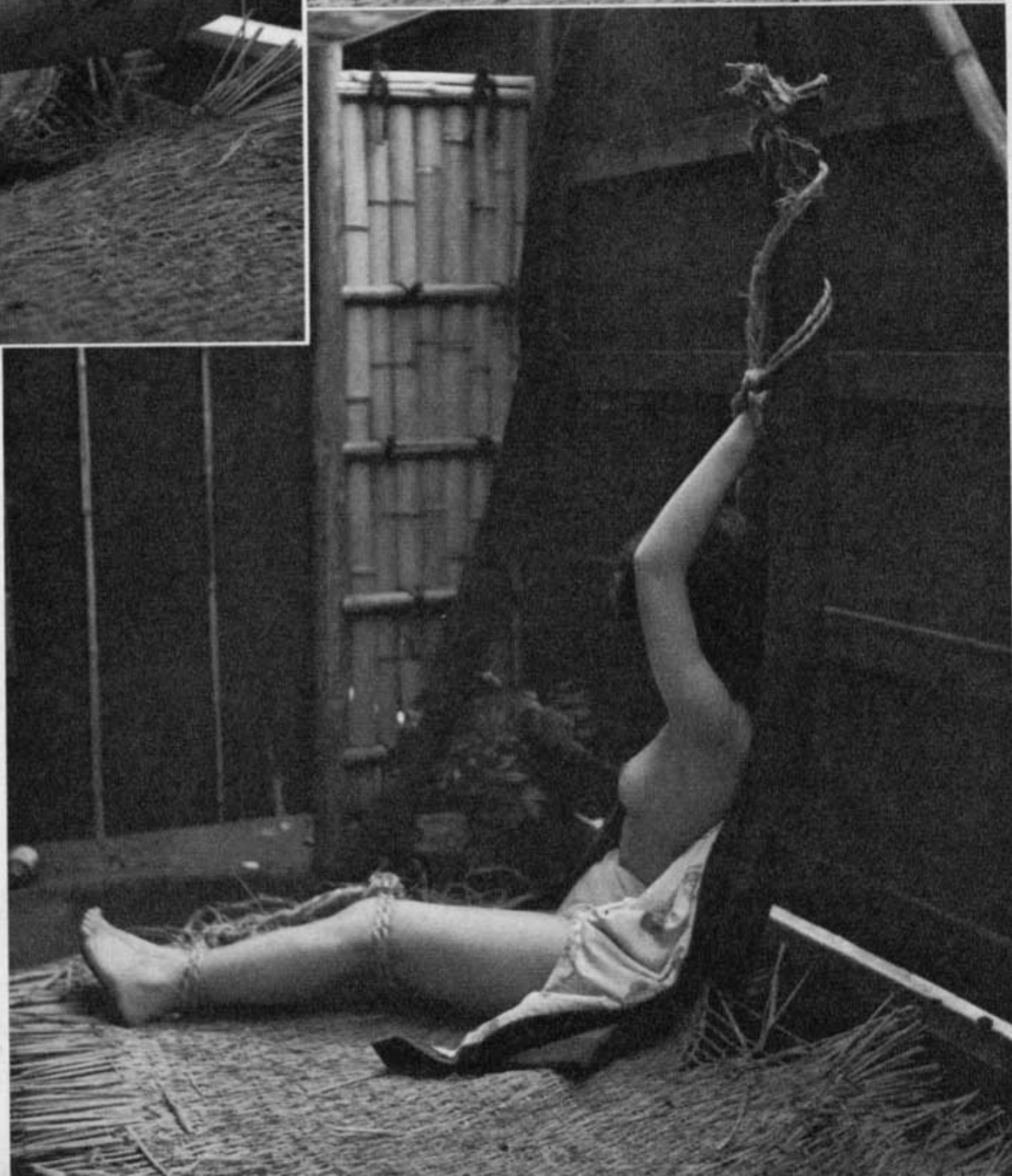
密室の呪縛

女体がいましめられるとき、肌は輝き、からだ全体が燃え上がる。さらにムチが加えられ、火で焼かれると、恍惚忘我の境地に遊び、甘美麗麗の桃源境に身を置くとか。呪縛のヒミツよ！



庭園の囚魚



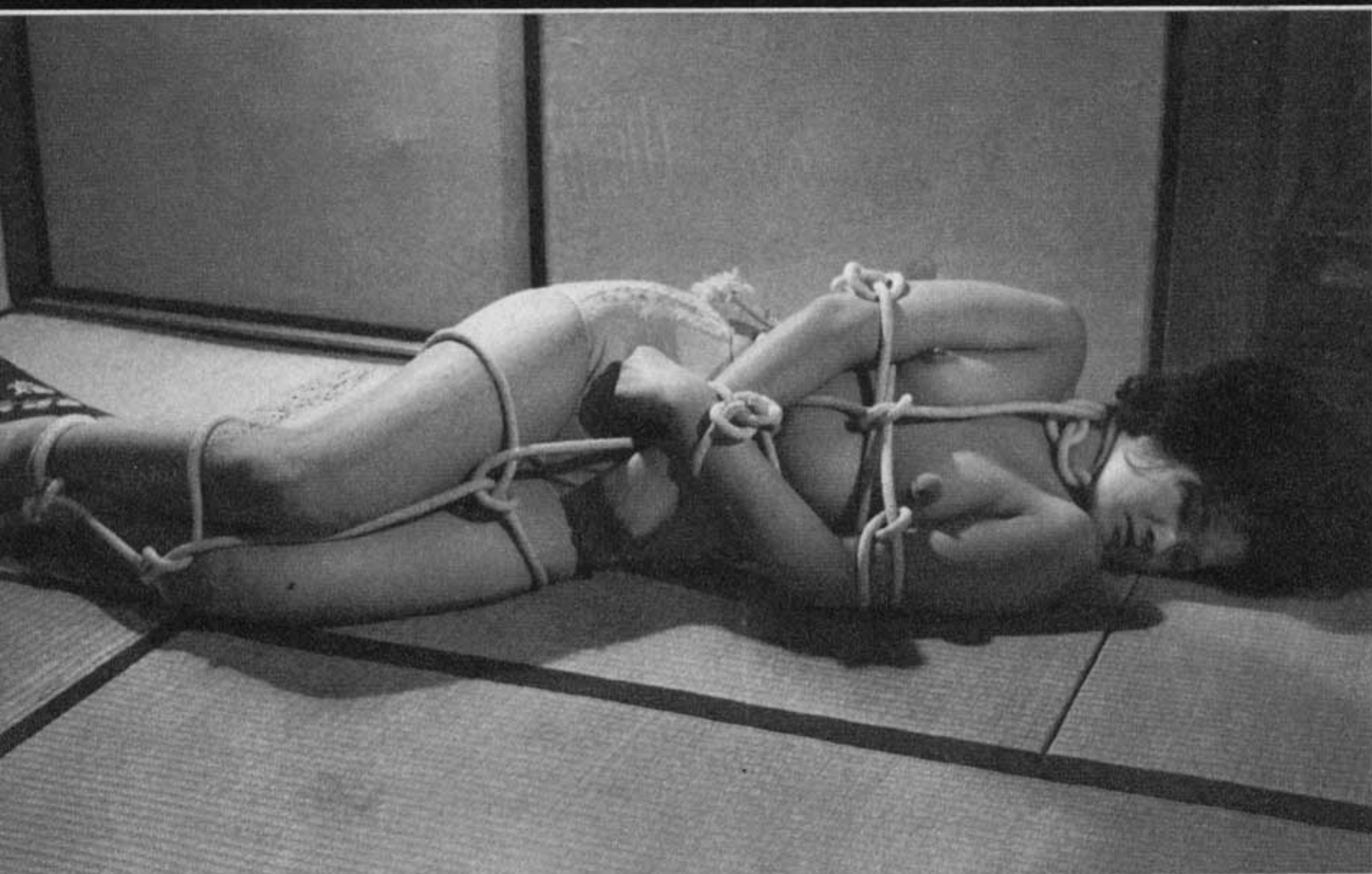
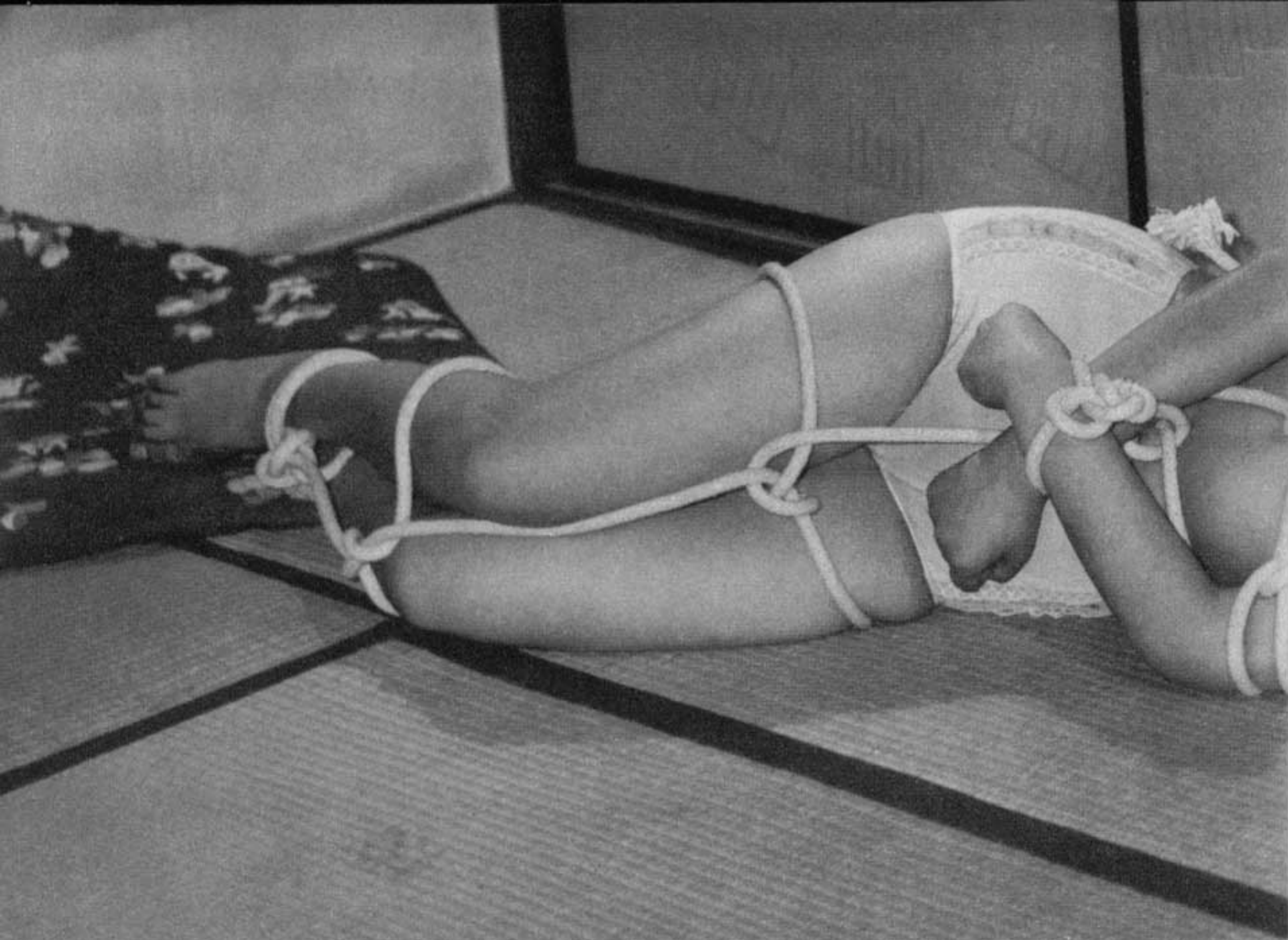


一本の立ち木が、女にとってはハリツケの柱のように残酷である。白い肌をキリキリとないあげ、ザラザラと肌をこする。庭の隅のこの一角は、彼女にとっては、捕えられたオリであり、牢獄であるのだ。

憂愁の美女

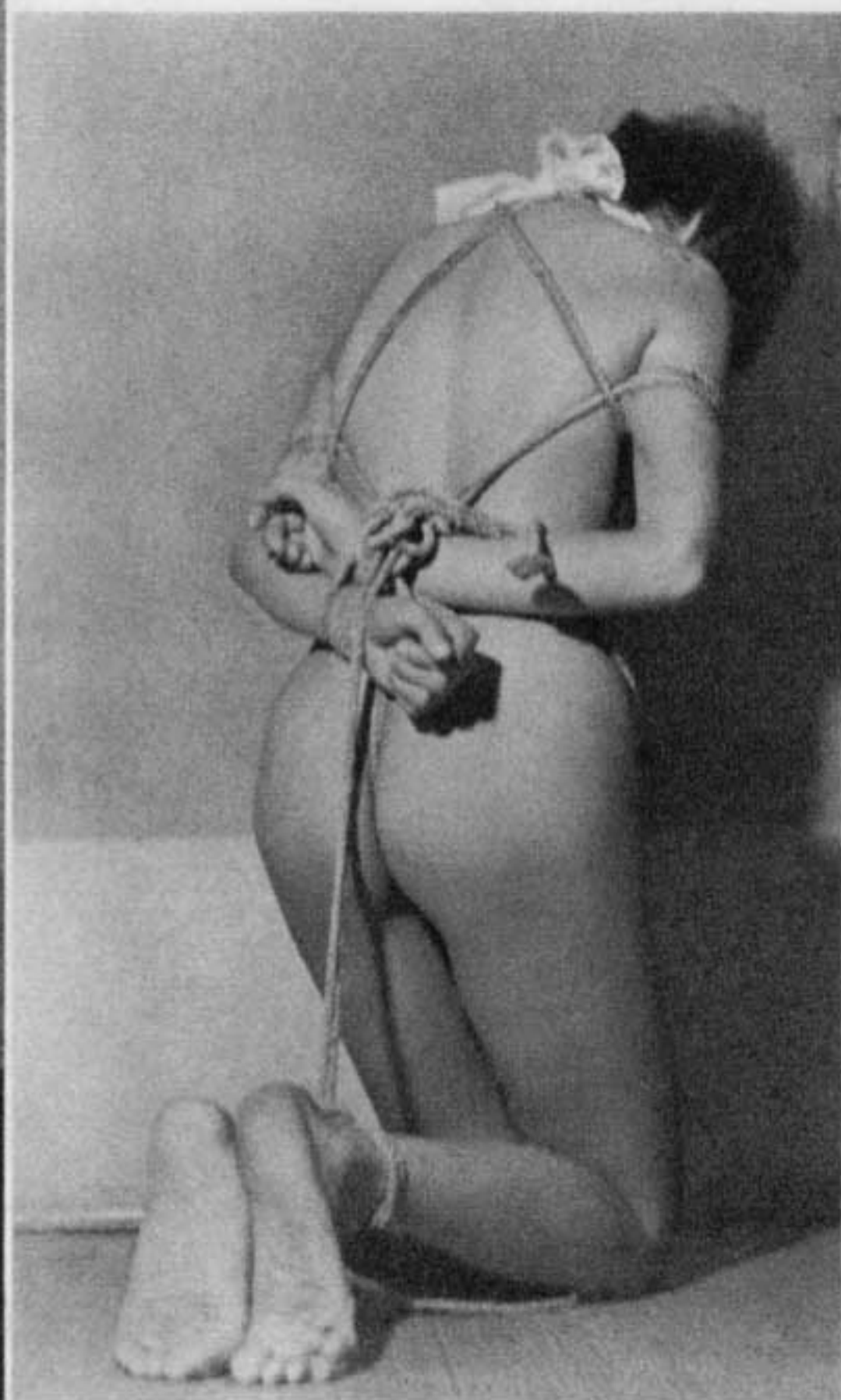
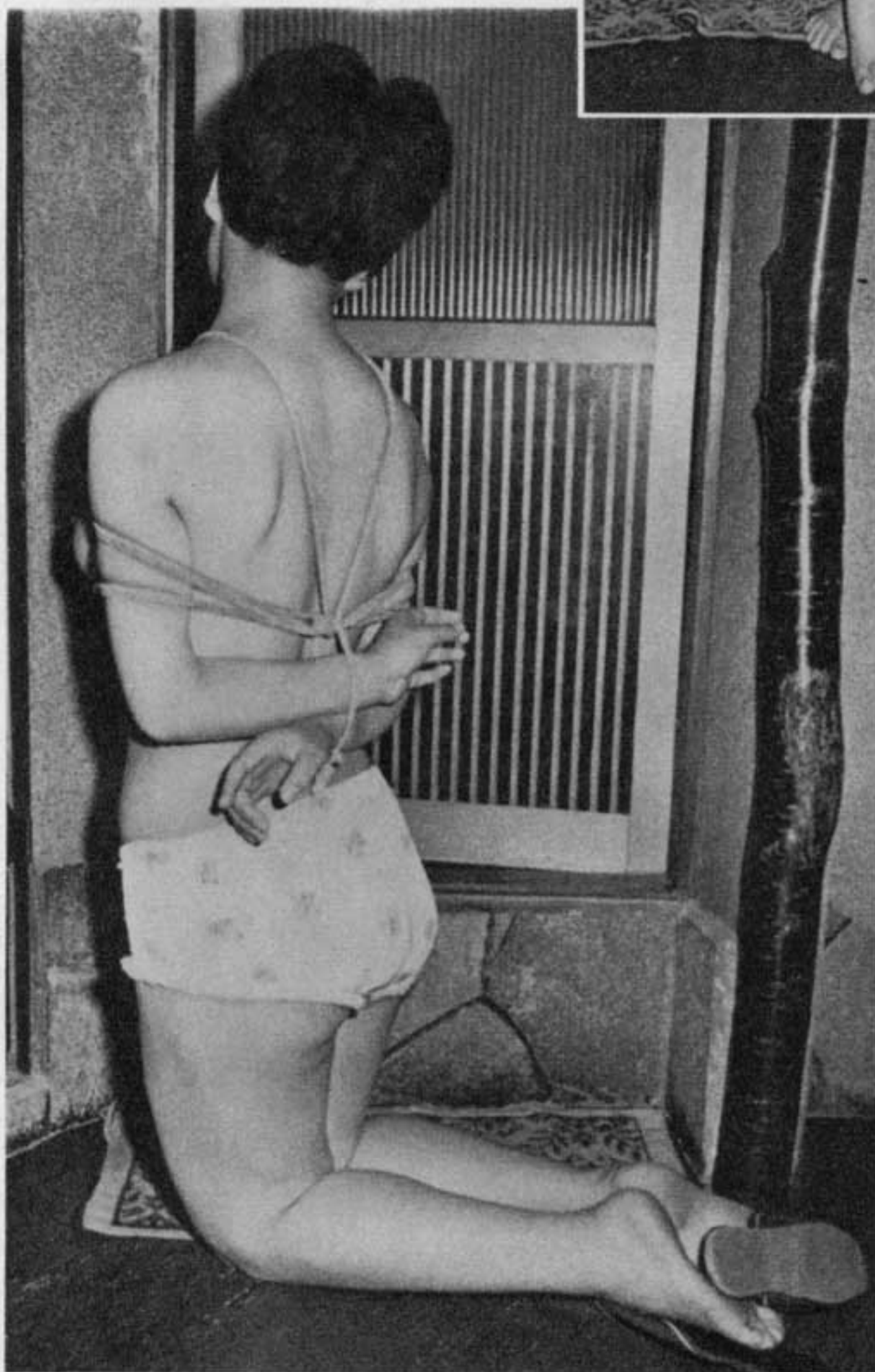
ころがされた畳は冷たく、縛られた縄は肌をかむ。憂いは部屋に満ち、全身をつつむ。女の生まれの悲しさ、はかなさ、そして嬉しさ。男にとって無上の生き物、女よ。





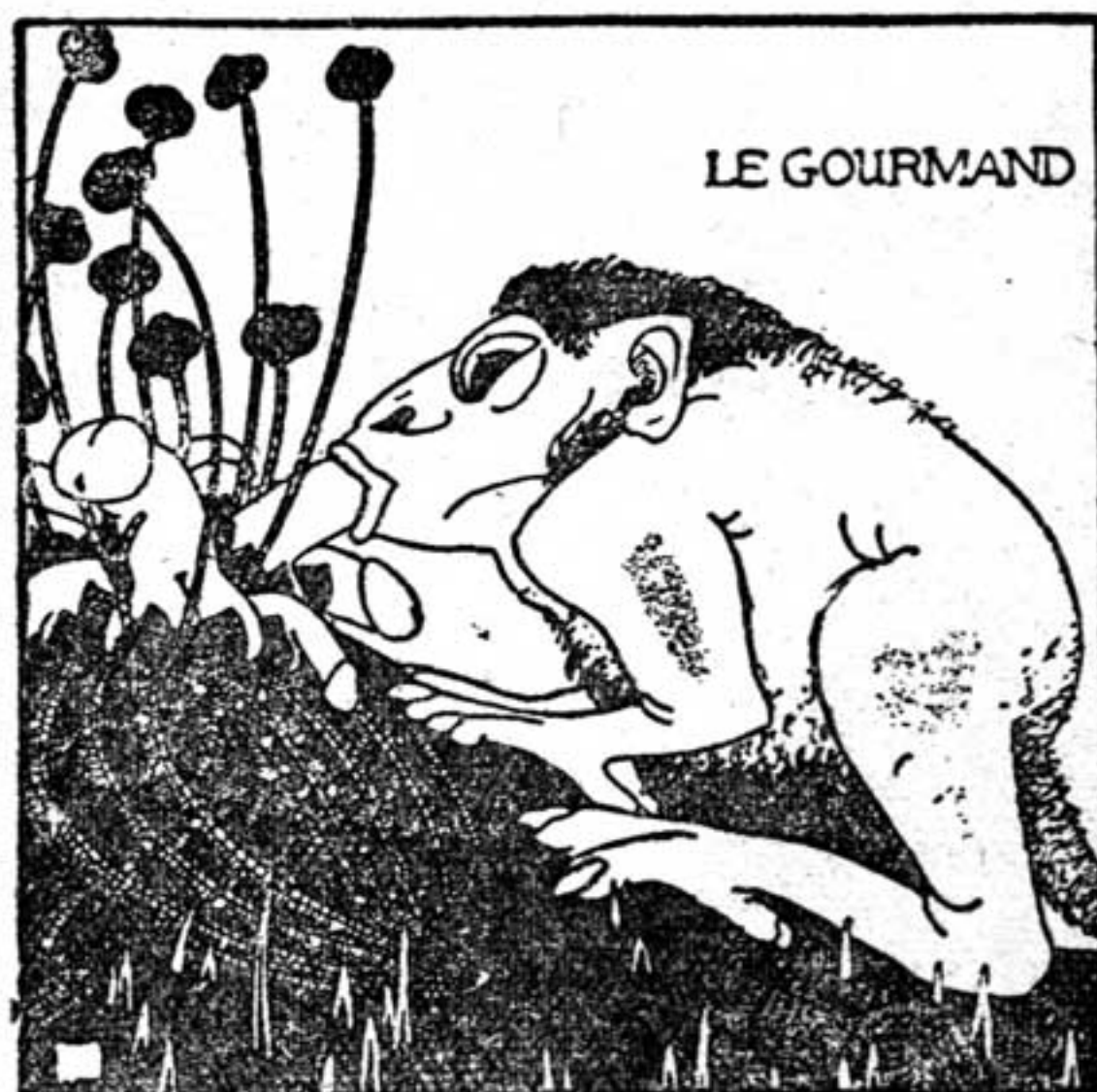
読者のとつた緊縛写真

このページは、本誌の愛読者、大阪にお住まいの長田実さんのとつたものです。まだダメなんですと、ご自分ではご謙遜なさっているが、どうして、なかなかの出来ばえです。



風俗奇譚

＜男女性風俗の粒より話題の研究＞



カツトの図版は“暴食漢”

特集 フェチシズム(淫物症)

女そのものに興味がなく、女体の一部や、女の持ち物に、異常な情欲をかきたてる男たちがいる。あるいはまた、女の尿にひたつて歡喜にむせび、女の尻に顔をふさがれて陶醉する人たちもいる。淫物症といい、崇狂症というのだが、その心理の底にひそむものを説明してみよう――

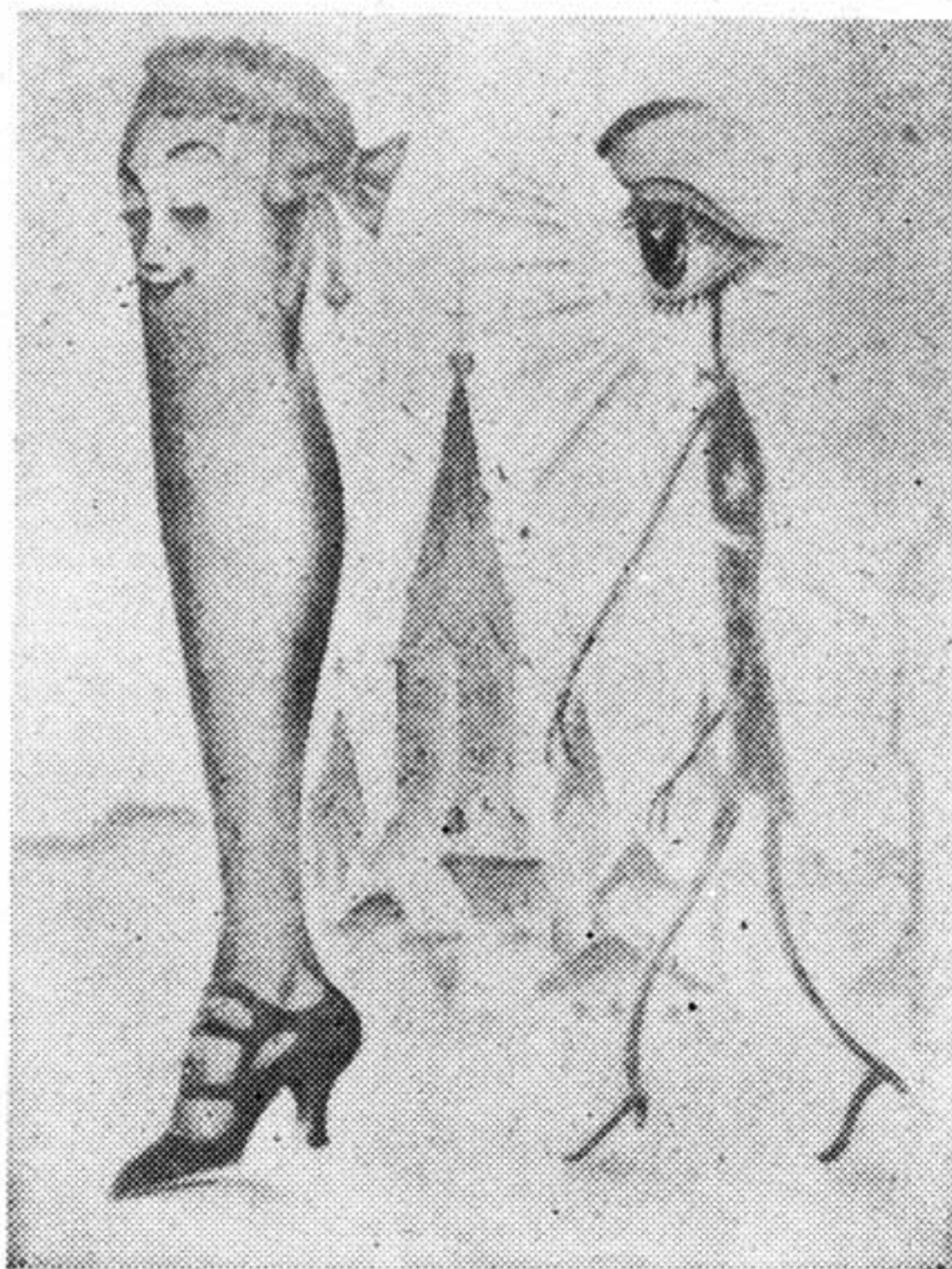
フェチシズムの実態

大 達 欣 治

性的シンボリズムということ

セクシュアル・シンボリズムということばがある。ふつうは、相手の異性を、全体として愛するのであるが、それを全体として見な

いで、その、ある部分だけを好む場合にいわれることばである。この場合、その部分というのは、対象のこともあれば、行為のこともあるのだが、もともと全体の部分にすぎないのでありながら、それが、サイコ・セクシュアル精神的に、あたかも中心のような役割りをもってくるわけである。



ひろい意味では、いつさいの性的倒錯は、性的シンボリズムといえないことはない。なぜなら、ふつうには大して値うちのない、あるいは全然とるにたりない対象や行為が、愛のシンボルとなるからである。

いま、これを、欲望を起こす対象によって、三つにわけて考えてみよう。

第一は、からだの部分である。その正常な面としては、手とか足とか、乳房、臀部、毛髪、分泌物や排泄物であり、異常な面としては、ビッコやヤブニラミや痘瘡のあと、あるいはまた、幼児、老人、死体、動物などに欲望をそそられるものである。そして、それぞれ幼児愛、老人愛、屍愛、動物愛とよばれている。

第二は、物である。着る物の一部分、ないしアクセサリー、たとえば、手袋、靴、靴下、靴下どめ、前かけ、ハンケチ、下着などに對して欲情するものである。あるいは、性的対象となる自己愛的ないろいろなものがある。たとえば彫像をけなす（ピグマリオン）などが、これである。

第三は、行為や態度である。これの積極的なものとしては、相手を叩いたり、残酷な真似をしたり、人前で露出したりする場合がある。消極的なものとしては、叩かれて喜んだり、ひどい仕打ちをされてかえって快感を感じたりするのがある。ある特殊な声に異常な性感をおぼえるのも、これに属する。

それからもう一つ、ノゾキもこれに属する。つまり、高いところへのぼったり、ブランコをみたがる。あるいは小用したり、大便秘したりするのをみたがるのも、これであるし、動物の交尾に特別な好奇心をもつのも、同様である。

性欲充足の性的な代用対象

これらのセクシュアル・シンボリズムのなかで、もつとも典型的なものにフェチシズム（淫物症）がある。このフェチシズムということばは、一八九一年、ビネーによってはじめて使われたものである。これは、性的対象の代用として役立つものとか状態に対して、欲望が満足されるものを意味している。

つまり、フェチシズムとは、異性の身体の一部、または異性の持っている物品に愛着を感じ、これを収集することによって性的な慰安を得るものである。

その目的物は、人によって異なっている。異性の身体の一部としては、毛髪、胸、首すじ、手、足、臀部などに愛着するのである。

また、異性の持っているものというものは、主として異性の肌につく衣類が多いようである。たとえば、異性の肌着、手袋、シュミーズ、ブラジャー、パンティーをはじめ、下駄、くし、帯、ハンケチなどがある。しかも、こうした物品は、仕立ておろしの新しいものより異性がさんざん使い古したもののほうがいいというのである。

だいたい、異性の身体は、ふつうの精神状態のものでも、接触すれば一種の性感を受けるものである。もっと角度を変えれば、愛しあっている同士は、みんなフェチシストだといえないことはない。愛すればこそ、相手の身体の一部とか、持ち物に対しても愛情を抱くのがふつうである。

ただ、これが、そのものだけが関心の的になって、全体としての相手が、むしろアクセサリになった場合も、これは異常としなければならぬ。この場合をフェチシズムというのである。

彼らは、満員の乗り物とか、映画館などの興行場など、人の雑踏しているのを利用して、婦女子の身体各部に触れるのである。しかも、それだけでなく、手をにぎり、臀部を撫で、乳房にふれるなどの猥せつ行為をするようになる。

あるいはまた、それが欲しいために窃盗をはたいたり、女の髪を切るということにまで及ぶわけである。

その場合、彼にとって、それらのものは女性のシンボルであり、とくに性器の立派な代用をつとめているのである。だから、それを入手し独占したために気違いのように燃える。そして、手に入れると、それを対象として自慰にふけるのがふつうである。同じ種類

のものが手にはいると、古いものを捨てて新しいものに夢中になるのも、一般的な傾向とみていいだろう。

毛髪フェチシズム

フェチシズムは、時に、いろいろな変態性欲と結びつくことがある。毛髪フェチシズムにサディズム的な傾向が加わると頭髪切りとなり、臀部フェチシズムにアルゴラグニー（残忍性色欲異常症）が加わると女性の臀部に傷をつけ苦痛を与えることに快感を感じるようになる。

この二つは、同じような表われ方をするとはいえ、前者は、切り取った頭髪を肌身離さず所持し、常に愛撫して楽しむのに反して、後者は、異性の身体の一部や物品に愛着を感じるだけでなく、相手に苦痛を与えることに興味を持つものである。

毛髪フェチシズムの例として、クラフト・エービングは、次のような例を挙げている。

一八八九年八月二十七日の夜、パリで、群衆のなかのひとりの若い女性の髪を切って逮捕された男がいた。彼の家を検査したところ、六十五個の女の髪が発見された。彼は、四十歳で、独身者であったのであるが、彼は、ひとりしていると耐らなくなり、町へ出ては女の髪切りをしていたのである。切った髪を持ち帰って彼は、全身にこすりつけたり、性器をそれに押し当てたりしていたということである。彼の場合、ウィンドーなどに飾ってある毛髪には全然刺激されず、若い女性の髪を見ると興奮し、ハサミを手にとるとエレクトし、そして切断の瞬間に射精するのであったという。

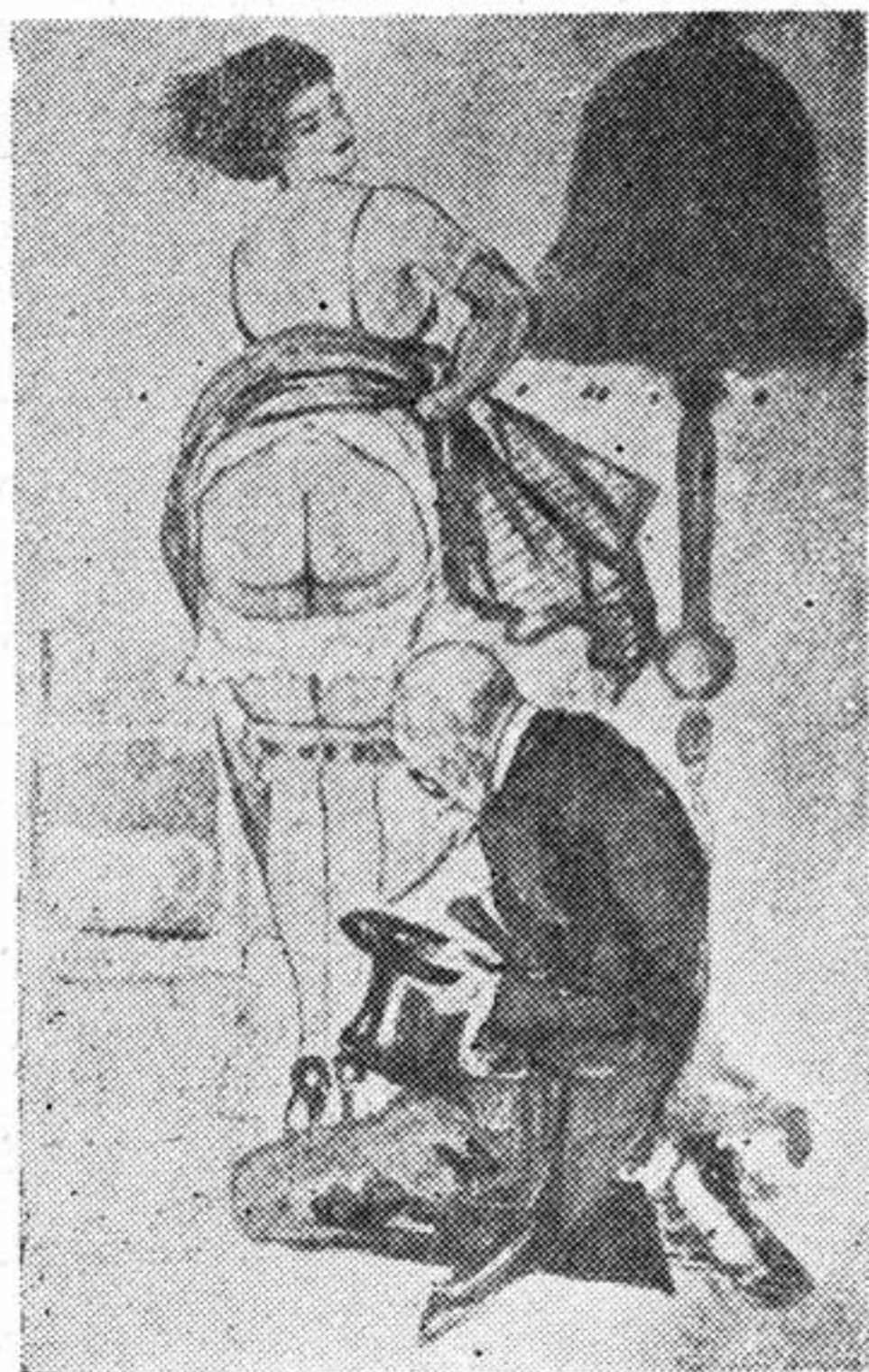
頭髮のほかに、陰毛を収集してセロファンの袋に包んで、その女の名前や年齢を記入して保存している人の例があるが、これは陰毛フェチシズムである。

足と靴のフェチシズム

フェチシズムが、心理学的にこみいった場合、いろいろな形で現われるものである。

たとえば、足フェチシズムというのがある。元来、足は、身体の中でも魅力に富んでいる。スタンリー・ハルが、若い男女について調べたところによると、異性の魅力は、目が第一で、次いで髪、からだつき(身長やスマートさ)、そして第四位が足であったという。

子供は、ことに足に気をとられるという。いや、子供だけでなく、



かつての中国やシベリアの二、三の地方でもそうであったという。また、古代ローマや、中世のスペインでも同じであった。

そうみると、足フェチシズムは、むしろ一般化していたと思えるし、それがまた正常なものであったのだろう。

しかし、現代の文化民族では、それほど足の魅力にひきつけられることは少ない。確かに脚線美などと言って、女性の美しい足にエロティックな情感を高ぶらせる人種は多いが、多くは、足そのものに女性を代用させるわけではなく、あくまでも、セクシュアルなものとして感ずるだけのことである。

それに、このごろでは、誰でも、靴や靴下をつけて、あまり素足を見せないために、靴フェチシズムを見ることが多くなっている。

レイフ・ド・ラ・ブレトンヌは靴フェチシストの小説家のことを報告している。その小説家は、決して病的にひどいというほどではなかったが、靴をはいている女性そのものには少しも魅力を感じず、ただ女性のはいた靴だけに情欲を燃やしたというのである。

今でも、子供によくみられることであるが、いわゆる仮性先祖がえりとか、発音障害にもとづく性欲の再現という形で、われわれのあいだにフェチシズムが見られると考えられないだろうか。

この場合の欲望の再現は、継続することのできるものである。これは異常に神経質で、ふつうは、早熟の傾向をもった身体と関係があるのだが、長ずるにしたがい速かに影を消す性質のものである。

そしてこれは、どこではじまったかわからないことが多い。というのは、原因となったできごとが忘れられているのである。そしてフェチシズムのなかには、非常にゆっくりそうなるものもある。やはり、ガルニエールがいつているように、先天性の要素が決定的だ

と考えないわけにはいかないだろう。

ふつうの人だったら、異性の身体の一部、または物品などのアクセサリー的なものに、それほど執着しない。だが、ある種の人々にとっては、その対象がすべてであり、彼にとってはかけがえのないものである。この、シンボル一つがすべてであり、生命である。ということになれば、それはフェチシズムであり、完全に倒錯ということになる。

クラフト・エービングは、靴フェチシズムを、マゾヒズムの潜伏型とみた。このさい、足や靴は、マゾヒストが、愛する対象の前で感ずる屈従ないし卑下のシンボルだというのである。

だが、この二つのあいだには関係はあるが、同質のものでなく、お互いに同格の地位にあるとみたほうが正しいようだ。

というのは、マゾヒストにとっては、自分を卑下させるような欲求が崇拜のシンボルであり、一方、靴フェチシストからみれば、相手の足とか靴とが一番濃縮されたシンボルであり、それ以上に美しく、はなやかで、そして女性的なものは、ほかにはないのである。つまり、マゾヒストにとっては、靴は単に彼の欲求を満たすための道具にすぎないので、本当の性的シンボルは、屈従による興奮なのである。

臀フェチシズム

露出された大きな臀を見るだけで性的満足を得る場合とか、臀部にただキッスするだけで満足する場合などは、明らかに、臀フェチシズムである。

クラフト・エービングが、その著『性の精神病理学』の中であげている、ある医師のケースがある。

この医師は、女の臀に対してフェティシスト的な興味をもち、子供の時分（七歳であった）からすでに、自分の見ているところで小便をする母親の臀を見て、それに熱中していたという。彼はこういつている。

「女の乳房は、私にとって、興奮させるようなものを何一つもっていないかったが、よく張った、まるい臀をした女が、着物を着ていても、かがんでいたり、スカートをうしろで掻き集めていたりして、臀の形がはつきり出ているのを見ると、私の血は湧き立った。路上でも、私の意を迎えるような女に出会うと、我慢ができなくなって、いちいちそれを目送し、目で、そのまる味にさわってみた」

またサドラーが報告した例では、フランスのある高級士官だが、この士官は、日を決めておいて、あるシロウト下宿に幾人かの太った女を集め、黒いカーテンのかけに彼女らを迎えて臀フェチシズムに耽っていたというのである。このカーテンには、円形の穴があけてあって、その穴を通して女たちは、このフェチシストの士官に、彼女らの臀にキッスをさせたのである。

こういった例は、たくさんある。サド侯の『ジュスチーネ』のなかでは、放蕩者のヴェルヌーイの前で、臀を露出させた少女少年、女たちおよび婆さんたちの一大レビューが行なわれる。ブルターニュのある地方では、木の眼鏡の大きな装置があり、観覧者が、この装置の中へ頭を突っ込むと、女が、お客の前にその臀をむき出すという方法で行なわれている。イギリスでは、美人の臀を見るだけのこの奇妙な道楽は、一種の売淫、つまり「臀女」というのを生み出

している。

また、大きな臀をした女たちに着物をまくり上げさせて写真をと
り、肛門コレクションをつくったフランスの大学教授さえある。
この臀フェチシズムは、往々にして、鞭打愛好症に連がっている。
つまり、むっちりとした丸い臀は、打たれる、あるいは打つこと
によって性的興奮を覚え、欲望を充足させる人々がいるのである。

コレクトマニア

フェチシズムの特定なものに嘔尿症（ウロラグニア）と、
せつにようしやう 舐糞しふん



症（プロラグニア）とがある。前者は、尿とか、小用している有
様を見て性的に興奮するものであり、後者は、糞とか、脱糞の状態
を見て興奮するものであるが、これは、わりあいにな少ない。どちら
も、排泄物を対象とするか、あるいは排泄行為を対象とするもので
ある。

これは確かに、性行為を思わせるものがある。つまり、溜まった
消化の残りカスが、圧迫感と緊張感を与え、それを追い出すと筋肉
がゆるむからである。

そして、フェチシズムを含むシンボリズムは、おもに男性に見ら
れて、女性には少ない。クラフト・エービングなどは、性的なフェ
チシズムは、女性にはないとさえいつているが、実際には、たまに
ではあるが、ごくはつきりしたものが見られる。兵隊服が女性を魅
惑することは、よく知られている事実であるが、正常なシンボリス
ムは、女性にも、たくさんある。

ただし、異常な———ということとは病的なということであるが——
フェチシズムは、女性にも見られるが、まれであることには間違い
ない。

だが、収集犯——コレクトマニアという形でのフェチシズムなら、
女性にもよく見られる。ビロードとか絹とかに触れて興奮するのは
織物フェチシズムで、これで自慰にふけるようになると、ふつうの
性的刺激には冷たくなるものが多い。

せっかく手に入れたものでも、慣れると、いつのまにか興味を失
ってしまふものである。そこで新しいものを手に入れる。ものによ
っては盗んでまで手に入れようとする。そうしないと、頂上感に達
することができない。

比較的上流のクラスの人で、金が欲しいために望むのではないというものがいるのは、これを証明している。コレクトマニアと一口にいつても、そのなかには、性的な意味でフェチシズムが多いのである。

フェチシストの実例

最後に一つ、フェチシズムから、強制猥せつ行為を行なった事件の例を挙げておこう。

被疑者は、二十四歳の青年で、家は農業を営み、両親のほか兄一人、弟妹二人の家族である。小学校卒業後、奉公に出ているうちに徴用を受けたが、適齢時に海軍に入隊し、終戦時に上等水兵で帰還した。

はじめて性的経験をもったのは二十三歳で、その後は、月二回ぐらい遊郭に登楼していたが、美しい女性を見ると、性的に興奮するので、都電、国電、地下鉄などの混雑を利用して、数回にわたって婦女子に猥せつ行為をしていた。

彼は、昭和二十二年五月十七日に上京したのであるが、その日の午前十一時三十分ごろ、銀座四丁目の電車停留所で、上野行きの電車に乗り込もうとしたさい、すぐ前にいた女学生がステップに足を掛けたとき、その大腿部が見えたので情欲を催し、群衆に押されて倒れたような格好をして、その女学生の足をつかんだ。しかし、その女学生は、すぐ身をひるがえして車内にはいつてしまったので、彼もつづいて乗り込んだ。

すると、混雑した車内の窓ぎわに、二十一、二歳の女性が立っているのを見て、これに近づき、密着して、自分の陰部を出し、その

女性のスカートをまくって押し込めた。その女性は、気がついて、運転台のほうへ逃げて行ってしまった。

彼は、物足りない感じで、車内を物色するうち、こんどは、中央に二十歳ぐらいの女性がいるのを見て、さっそく、混雑を押しわけて近より、身体を密着させて、女のスカートの下から手を差し入れた。ところが、これに気がついた女は、次の停留所で下車してしまった。

そこで、さらに、後部の右側付近にいた二十歳ぐらいの女に近づき、その背後から密着して、まず右手で女の乳房を強く押ししていたが、彼女があいた座席に腰を下ろすと、その膝を何回となく撫でまわした。

女が嫌がって手をポケットに入れてしまったので、今度は彼女の股のあいだに自分の右膝を割り込ませて秘部に接触しようとしたので、彼女はこれを避けて両足を組んでしまった。すると彼は、これを無理にとこうと努め、何回も自分の膝を利用して、女の上の足を離そうと試みていたが、そのうち、電車の動揺で、女の上の足がすべり落ちてしまった。

彼はやにわに右手を、彼女のスカートの下から右大腿部付近まで押し入れて秘所と接触しようとした。それまで、人中で声をたてるのを恥じていた彼女も、そこまでされると、たまらなくなって、男をとがめた。

すると、最初から、その男の挙動を不審に思い、スリではないかと疑っていた人も何人かいたので、それらの人々が手伝って、この男は現行犯として、その場で、ただちに、逮捕されてしまったのであった。

毛に関するフェチシズム

染 井 恵 一 郎

恥毛に憑かれた男

シモオヌ お前の毛の林の中に
大きな不思議がある

お前は乾草の匂いをする

お前は獣が寝たあとの石の匂いをする

お前はなめし皮の匂いをする

お前はふるいたての小麦の匂いをする

お前は麝香じやこうの匂いをする

お前は胡桃くるみの匂いをする

お前はよく熟れて摘みとられた果物の
匂いをする

お前は花を一ぱいつけた時の柳と菩提ぼだい

樹の匂いをする

お前は蜂蜜の匂いをする

お前は牧場のなかをさまよう牛の匂い
がする

お前は土と河の匂いをする

お前はいろごとの匂いをする

お前は火の匂いをする

シモオヌ お前の毛の林の中に
大きな不思議がある

グルーモンの有名な詩「毛」であるが、
これは、明らかに恥毛を賛美したものであ
り、恥毛に対するフェチシズムである。

恥毛は、男女ともに秘所を覆っているの
で、一般に隠蔽されている。したがって、
フェチシズムの傾向のないものにとっても
多かれ少なかれ興味をひくものである。

だが、それが高まると、異常な興味をも
つようになり、ひいては狂熱的なフェチシ
ズムとなり、コレクトマニアとなる。

このコレクトマニアは、意外に多く、し
じゅう花柳界に出入りする人は、通人の資
格として、これを集めるそうである。

デパートや銭湯、ダンスホール、美容院
などで、女客の落としていった恥毛を、こ
っそり集めて喜んでいる男もある。

ある銭湯の三助は、流し場の湯水の流れ
る口に金網をおき、それにひっかかる恥毛
を長いあいだかかって集めて、座布団の綿
のかわりにしたというが、これはどうやら
「伝説」のようである。

コレクトマニアは、これを一本一本手帳
にはりつけたりセロファンに包んだりして
それを収集した日時や姓名、あるいは情事
などを書きつけて、思い出とするという。

かつて、外国航路の汽船のボーイは、船
室に設けられてある浴槽を洗うさい、その
底に必ず数本は落ちていた恥毛を集め、一

一手帳にはりつけ、その客の氏名を書きこんでおいたという。その中には、かつての皇族のお姫さまのものもあったというのが自慢のタネであった。

これらのコレクトマニアは、恥毛収集をおマジナイの一種というが、その心理の底には、女の髪を切りとるフェチシストと同じように、サディスティックな喜びがあるのを否定できない。

また、恥毛を抜いたり、剃ったりするところが、刑罪とされる場合がある。

むかし、イギリスでは、姦通した女性は法廷で恥毛を除去したというが、これは、明らかにサディスティックなフェチシズムといえよう。

また、戦前の話であるが、高知師範学校の某教授は、自分の家の女中の寝相が悪いといって、それを戒めるために下腹部にスミを塗った。それでもなお直らないので、カミソリで恥毛を剃りおとした。この教師は傷害罪として訴えられ、当時の金で二十円の罰金をとられたという。

カツラをかぶせて抱擁

女の髪切り事件は、このごろ少なくなっ

たとはいえ、ときどき新聞紙上を賑わす。これはもちろん、髪フェチシズムに、サディスティックな性向が加わった結果の犯罪である。

一八八九年にパリで逮捕された髪切り男の話は有名であるが、わが国でも、古い記録にいくつか残っている。

慶長年間に、駿府城内で、四、五日のあいだに十数人の女の鬘が切られたという記録があるし、元禄初年や明和四、五、六年と相ついで、江戸で多くの女が髪を切られたということだし、文化七年にも同じような記録が残っている。

むかしは、黒髪は女の命といわれたほどで、長いだけでなく、香油のにおいが、男の心をかきたてたので、現在よりも、髪フェチシズムは多かったようである。

現在でも、こんな話がある。

ある女の話であるが、結婚初夜も、その次の夜も、彼女の夫となった人は、ただ新妻に接吻し、あまり豊かでもない髪の毛をかき乱しかき乱しただけで満足し、ぐっすり眠ってしまった。

そして三日目の夜、夫は、長い髪の毛のカツラを買ってきて、それを新妻の頭にの

せた。すると夫は、たちまち目を輝かせて興奮を示し、はじめて新妻の肉体を熱狂的に抱擁した。そして翌朝、いたって機嫌よく目ざめ、まずカツラを惚れ惚れと眺めて楽しんだ。

新妻は、カツラをかぶっているうつつうしさに、そのカツラを脱いだところ、夫はすっかり元気がなくなり、新妻のからだに触れようとしなくなった。

そこで彼女は、はじめて、夫の心をノゾいた。つまり、夫の愛情がカツラに関係があるとわかったわけである。そこで、それから努めてカツラをつけ、夫の意を迎えるようにした。

しかもこの夫は、毛髪が多ければ多いほど喜び、その色には全然無頓着であったという。

これは髪の毛に対するフェチシズムで、淫好癖であり、これが高まって病的な領域にまではいってきているわけである。彼らにとつては、女の髪は肉感的な印象を与えるものであり、閨房へ誘い入れる興奮を招くものである。

つまりは、女の肉体ではなく、髪の毛が淫情の対象なのだ。

彼の恋人は毛髪だった

モーパッサンの短編に「毛髪」というのがある。この主人公は、ふと骨董屋こつとうやから買ってきた女の髪に対して、異常な性愛を抱くのであるが、その一節を、ここに抜粋してみよう。

——私は家に戻ると、骨董屋から買ってきた、あの不思議な掘り出し物を、一刻も早く見たくてたまらなかった。私はさっそくそれを手にとっていじくっていると、手



や足に長い長い戦慄をおぼえた。そして四、五日というものは、決して頭からこの髪の毛のことが消え去らなかった。

家へ帰ると、私は、すぐそれを眺め、手にとった。心から愛している恋人の家の戸をあけるときのような喜びに満ちて、私は戸棚のカギをあけるのだった。

なぜなら、私は全身に湧きあがって消すことのできない肉欲の要求をもっていたからである。

そしてその情欲は、この生命なき一つかみの髪の毛の流れの中に私の指を沈ませ、ふるえおののかせるのであった。

それをもてあそび、可愛がってから、そつと、ふたたび、もとの戸棚にしまいこんだ。扉をとじたとき私は、まるで、生きている恋しい少女がとらわれて、この狭い戸

棚の中にとじこめられているような気がして来た。

私はふたたびそれを取り出した。ひやりとしてすべっこい、チリチリとして、うっとりさせるその快美な感触は、いったい何にたとえたらいいのであろうか、しまいは、なんとも言えないゆううつな気持ちになつてくるのだった。それでもなお、手ににぎり、肌を押しつける——身も心もぐったりさせる新しい情欲は、つよい力で私をせめ立てるのだった。

私は、こんなふうにして、一、二カ月を夢のようにすごしてしまった。——

まことにみごとな描写である。たしかにある種の男たちにとっては、女の肉体よりも、髪の毛のほうがより魅力的であり、愛すべきものである。彼らは、髪なくして女性を考へることはできないのである。

それにしても、この髪毛フェチシズムは、男性にだけ見られることで、男の髪を切りとる女もなければ、男の恥毛を集めて喜ぶ女性も聞かない。毛に関するフェチシズムは、どうも女性のあいだには見られないという点、おもしろい。

排泄物に発情する

植村久三

共同便所をノゾく紳士

臀フェチズム——つまり、女の臀に対する異常心理は、決して少なくない。そればかりか、臀を賛美するあまり、そこから出る排泄物は、元来、不潔、不浄、猥せつなものとしていられるにもかかわらず、清潔であり、高貴であり、またと得がたい宝石であるとしている人々がいる。あの不快な、鼻をつく臭気さえ、彼らにとっては、またとなく素晴らしい香気となり、そのにおいをかぐだけで、天上に遊ぶ心地がするのである。

最近でこそ、街頭の共同便所は、大部分がコンクリート建築になったので、そういうことはなくなったが、板張りであったころはどんなに堅牢にしてあっても、便所ノ

ゾキという異常性欲者のほびこるのを防ぐことができなかった。しかもこの種の変質者には、青少年ばかりでなく、レッキとした壮年紳士までいるのだ。

終戦直後のことであるが、立派な地位にある少壮実業家が、この便所ノゾキの現行犯で捕まった。

彼は、家庭には、貞淑で教養ある妻があり、三人の子供まであったのであるが、用便をしていると、むらむらと、用便中の女性が見たくなるのだという。そうになると、ヤもタテもたまらず、仕事をほうり出して、便所の中に身を隠したり、仕切りの板張りの下のほうにナイフで穴をあけたりするのだった。

彼の場合、臭気をかいだり、臀を見たりするのもちろん楽しかったが、最大の目

的は、やはり女性の排泄行為を見ることであつたといわれる。

彼はヒマにまかせて、都内の共同便所を歩きまわり、十数カ所で、もっぱらノゾキを楽しんでいたという。

どういふ動機で、彼が、そんな病癖におちこんだのか？

彼は、子供のころは、いつも、若い女中といっしょに入浴するのが習慣であつた。そのとき、彼女の臀をべたべた叩いて、キヤッキヤツと言わせるのがおもしろく、入浴のたびに、それをくり返していたという。だから、いつのまにか、それが潜在的に女の臀に対して異常な興味を持つようになったものであろう。そして、それが糞便ロゲコラゲニアラゲニアに転化したものと考えられる。

このように、小さいころに、見たり、覚えたりしたことが、一生を支配するのは、よくある例である。

ある尿狂ウロラゲニアの青年の告白もまた、前例と同じように、子供のときに見た印象が、強すぎたために、この病癖におちたものであつた。

彼は、婦人便所に近づき、尿の流出が自分の口にうまくはいるのを、なによりも満

足としていた。

彼の場合は、小学生のころのある日の印象から由来していたのである。

その日は暑い日だったので、彼は川でただひとり、ゆうゆうと、水泳を楽しんでいた。そして、ちょうど二メートルばかりの崖の下まで来たときに、崖上からジャーと小便をしたものがある。見ると、それは近所の百姓の娘で、彼女は評判のひどい近眼だった。彼女は、まさか下の流れで泳いでいるものがあるとは気がつかずに、あたりはばかり放尿をしていたわけである。

突然、頭から、なまあたたかい尿を浴びせられてびっくりした彼は、ひょいと上を見上げてさらに、胆っ玉がひっくり返るような衝撃を受けた。父と兄だけで、女っ気のない家庭に育った彼にとっては、女の肉体をまさまざと目にするのは、生まれてはじめての光景だったからである。

そのとき、顔にそそがれた尿のにおいと、口の中にはいった味は、そののち、彼の一生を支配するほど重要な意味をもっていたのである。

マゾヒストのなかには、女の臀に敷かれ、押しつぶされて責められるとき、また

となく喜ぶものがある。彼らは、一樣に、女のドレイとなり、女に胸の上にまたがれたり、顔に臀をのせられたり、用便のたびにそばに侍らせられたり、ときには、顔に尿をかけられたりすることを、胸をドキドキさせながら、想像して喜んでいっているわけである。

男の尿臭に興奮

ところが、尿をかけられて楽しむのは、なにも男ばかりとは限らず、女にもある。

学校の成績も優秀な、ある十一歳の少女は、自分より年下の少年を誘惑し、自分は地面に仰向けに寝て、

「あたしの顔におシッコをかけて」

と要求し、自分の顔をさんざんぬらし、陶酔境にひたっていたという。

また、宴会たけなわになると、酔漢たちを前にして、大きな皿の上にシャーと放尿してみせる芸者がよくいるが、これはどっちかというところ、ウロラグニアというよりも露出症の一種であろう。

尿に対する異常心理は、尿そのものに対して働くこともある。

ある学者の報告によると、十九歳の、あ

る人妻は、男の尿と女の尿の臭気をよくかぎ分けた。公衆便所の前などを通ると、中から、プンとなまなましい男の尿臭がしてきたりすると、たちまち興奮して歩けないほどになってしまうというのである。

彼女は、この衝動にうちかつために、堪えずそのにおいをかいでいることがいと考えて、常に、男の尿のはいったピンを携帯して、ちょっとしたスキにも、それを鼻先におしあててかいでいた。

こうすることによって、刺激を慢性化し、衝動が突然に爆発する危険をさけようとしたのである。

彼女は、男の肉体にはなんの興味もなく、それよりも、心ゆくまで男の尿臭をかいで耽溺したほうがいいと、語っていたという。

以上のように、女は、尿に関しては、自分が男にそれをかけたり、男からかけられたりして喜ぶ異常心理と、そのにおいをかいで異常感覚を満足させる場合とがある。

だが、男が女の尿に対して異常に嗜好を示す数に比べれば、お話にならないくらい少ないことは確かである。

△下着フェチシズム▽

女の下着に欲情する男

高 島 隆



あたしも盗まれたわ

「あらっ！ 奥さんも。私も、つい恥ずかしくて黙っていたけど、娘のと私のと、二枚盗まれたのよ」

「へえっ、やっぱりね。あんなの盗んでいて、何にするんでしょう、一円にもなりやしまいだね」

「ほんと、私のなんか、そりゃひどいのよ。あんまり汚れているんで、いっそゾウキンにでもしようかと思っていたくらいなんだから」

「うちのもそうなの。よりによってねえ。もう少しましなの盗んでいけばいいのに」
「でも変じゃない、汚れたのばっかり持っていくなんて」

「そーいやあそーね。確かに変だわ」

東京都文京区丸山町のある銭湯の女湯で、数人の女たちが、顔つき合わせて声高に、こんな話をしていた。これだけ聞いただけではよく話の内容がわからないが、それらの女たちのいっていることは、毎晩のように、町内のどこかで女の下着が盗まれていくことについてであった。つまり、男のももひきなどと一緒に干して置いても、それには手をつけず、狙われるのは、女のパンツとかシュミーズだけで、しかも、メンスなどで赤いシミのついているものや、汚れのひどいものほど盗まれ方が早いというのだ。

このパンツ泥の話は、銭湯ばかりでなく、女たちは寄るとさわると、
「ゆうべ、とうとううちでもやられたわ。まさかと思っていたのに」

「すると今夜あたり、私の家かな。うかつに外に干しておかないことだね」

「そうよ、用心することね。私んとこんなか、干したばかりの濡れたのを、さっと持ってっちゃったのよ。きつと、狙っているのよ、いけすかないったら、ありやしない」

と、ささやき合っていた。

こんなわけで、その騒ぎが次第に大きくなっていくにつれ、当然、所轄の富坂署丸山派出所の巡査の耳にも入ってきた。その結果、犯罪手口から、

「よくある手だ。ホシ（犯人）は変質者に違いない」

と犯人を割り出し、さっそく深夜の張り込みと聞き込みを始めた。

まず聞き込みだが、それによると、文京区丸山二、川上糸子さん（二一）も、その例外ではなく、一ト月ばかり前に、買ってきて四、五回はいたばかりのズロース四枚を裏の物干し場から二晩のうちに何者かに盗まれてしまったことが判った。糸子さんは、盗まれたものがパンツだけに、あまりひと聞きのいいものではないところから黙っていたが、ちょうど、銭湯でパンツ泥の話にはなが咲いているさい居合わせて、はじめで自分もその被害者の一人であることがわかったといっていた。

こうして、つぎつぎと思い当たる被害者は、実に三十数人にも及び、これには、聞き込みに当たった巡査を、少なからず驚かせた。

一方、張り込みも毎晩慎重に行なわれ

た。ある晩などは、犯人の出現を待ってアパートの裏手にそっと息を殺してひそんでみると、すっと音もなく一人の男が姿を現わし、あたりをキョロキョロうかがっている。てっきりパンツ泥に違いないと思っ、て、なおもじっとみつめていると、これまた一人の若い女が抜き足差し足でアパートから出てきて、

「お待ちになった」

と小声でつぶやき、あとは二人で、見るに忍びぬとんだ濡れ場を展開する始末。

こんなのはまだ、ねむ気さましにまたいい。一番始末の悪いのは、せっかく張り込んでいるのに、いい気なもので、すっかり酔っぱらって道路でクダをまき、いっこうに立ち去ろうとしない連中のいることだった。

パンティー布団を作りたい

こんなトバッチリを受けながら無情な張り込みが続けられて二、三日したある日、ふと耳よりな情報が入ってきた。

「オレは女のパンツをほぐして布団をつくらうと思うんだが、百枚もあれば間に合うだろうか。それに、シュミーズはカーテン

にして、残りは、枕カバーでもつくるつもりだ」

と仲間に自慢して話している男が、近くにいうのだ。この聞き込みに俄然緊張して、その糸をたぐっていくと、同区丸山町四〇、光陽建設内の土工吉川辰男（二一）がポツカリ浮かび上がってきた。

そこで、あらゆる証拠を集めた末、その寝込みを襲って逮捕、本署に連行して厳重に取り調べたところ、吉川はパンツ泥の逐一を自供した。

それにつけても吉川は、逮捕のさい、白河夜舟の高いびきでぐっすり寝込んでいたが、寝巻きの代わりにシュミーズをまとい、その下にびっちり女もののパンツを三枚もはいていた。しかもそれを得々としているばかりか、布団の下はいうに及ばず、押入れのなかには女もののパンツとシュミーズの山。それに、どれもこれも、パンティ、ズロースは、ゴワゴワとひどくよごされ、異様な臭気を放ち、それが、なんのために使用されたか、一目瞭然といったところだった。

これには、さすがの巡査も思わず、「いやあ、こりや凄い」

と溜め息を洩らしたほどだ。だが、これに反して当の吉川はヘイチャラなもので、

「お巡りさん、どうもすみません。悪く思わないでください。つい、女のパンツをみると、悪いとは知っていても急にムズムズしてきて、じっとしていられなくなってしまふんです。これは、オレの悪い病気には違いないが、それよりもっと悪いのは、こんな気持ちを起こさせるパンツを、これみよがしにぶらさげておくことだ。罪はそこにある。オレを縛るんなら、平気な顔で人目につくところにパンツを干しておく女も縛ってください」

といていた。この吉川の言葉もたしかに一理ある。

無神経に下着を干す女たちが多いことは一歩外に出てみたら、だれにもわかる。それがこうした犯罪を誘発するのだ。これに思ったとき、いまま少し心を配って貰いたいものである。まして、いまは七色のパンティとか、黒、ピンク色のシュミーズといった非常にセクシーなものが多い。

軒並みに干す女の下着

吉川は、下着をみると、無性に盗みたく

なった。そして、これにくるまって寝ることが無上の歓びだといっていた。

こうすることによって、下着から発散する臭いをかぎ、それを身につけていた女を想像して彷彿と頭のなかにえがき出し、それがやがて自分の相手になるのだ。そうすると、下着であるところのシュミーズ、パンティ、ズロースを鼻に当て、または口にはおぼるなどして、最後に感極まって、それに戯れて自慰をする。押入れのなかや布団の下から発見されたパリパリになって汚れたズロースやパンティなどは、その残骸であった。

吉川が、盗んできた下着のなかでも、とくに目を輝かせてよろこんだのは、シミがついたズロースとかパンティで、これを盗んだときは、ほとんど寝もやらず一晩中それと戯れていた。それからまた、汚れたものも、このうえなくよろこんでいた。

また、これはちよっと手に入らなかったが、洗濯場などにうっかり置きっ放しになっている、まだ水につけない汚れたままのシュミーズとか、ズロース、パンティはそれこそ宝物のように大切にしていた。

そうしたものは、折りにつけ、取り出し

ては、女の移り香をそっとかぎ、たまらなく身もだえした。

こんな吉川だったから、いつなんどきでも女の下着を身につけており、人知れずひとり快感に浸っていた。その意味で、寝るときはむろん布団いっぱい女の下着を敷きつめ、そのうえ、ご丁寧にシュミーズまで着込んで横になるといった念の入れ方で、その変態のほどを如実にしのばせていた。これらをみてもわかるように、吉川の変質者としての行動は、決して昨日今日のものではなく、早くも少年時代に、赤いパンツをはいた娘さんにいたずらをして捕まっている。

だから、一朝一夕の出来心でないことは明らかだし、事実これについて吉川自身、「女の下着をみるとたまらなくなる」

とはっきりいい切っているところからみても、よほど女の下着にとりつかれているかがわかる。

多くの変質者は、女の下着をみると、トタンに盗みたくなる。一般人にとっては、なんの関心も持っていないのに、これを変質者がみた場合は、また違った感情を起こさせる。それに、この近くは、家が建てこん

でいるので、こうした下着の波があちらにもこちらにもぎっしり建て込んだなかに無数にあるのだから、たまらない。そんなわけで、吉川が次から次へと、飛び石づたいにぶら下がっている女の下着を盗むには、全く格好のところだったといえる。

汚れた下着に欣喜雀躍

吉川は、物干し場にぶら下がっている女の下着を盗んだときの気持ちを、こう語っていた。

「いつの場合もそうですが、あのときほど私は興奮し、感激するときはありません。なんといいたらいいでしょうか。そうですね、まあ、さしずめ。久しく別れていた恋人にでも会った気持ちでしょうか」

事実、吉川は、それを裏付けするかのようには、こう語っているうちにも、目を異様にキラめかせて、そのときの手ぶりさえして見せるのだった。

したがって、あれほどの下着を盗んでいるにもかかわらず、だれ一人、その姿を発見したものはなかったのだ。

吉川が女の下着を盗むに当たっては、まず、夜になるのを待って、ぶらりと町に出

かけ、それらしい獲物をみつけてアタリをつける。それから、これを盗むにはどうしたら一番無難で、手っ取り早いかを、周囲の状況、その目的物のあり場所などを念頭に入れて考える。たいていの場合、どこの物干し場も外にある関係もあって、一つや二つの欠陥があり、さあ盗ってくださいといわんばかりだ。これが、吉川にとってはまたとない好都合。これさえ打診しておけば、あとは忍び込むのと逃走経路だけ。この二つに吉川は特別念を入れて調べた。こうしたわけだから、万が一にも狂いがなかったわけだが、ただ一度だけこんなことがあったという。

「その日は、いまにも雨が降りそうな夜でした。こんなときこそ盗むのに一番好都合な晩なんです。なぜかこの日は、妙に気おくれしてならないんです。しかし私は、それまでに一度もしくじったことがないので、じゅうぶん自信もあり、自分に勇気づけて物干し場にたどりつき、夜目にもはっきり映る真っ白なナイロンのパンティーに手をかけました。ちょうどそのときです。下の道路のほうから、風に混って靴音が聞こえてきました。最初は、私も耳のせいか

なと思ったのですが、次第に足音は近づいてくるではありませんか。このときはすでに私はパンティーをつかみとり、ポケットのなかにしまい込んでおりました。

それはいいとして、問題は靴音です。私はじっと聞き耳を立てて、物干し場に腹ばいになって下の道路を見おろしておりましたところが、それがお巡りさんで、そのうえ思いなしか、私の下で立ち停まって、上のほうをみるじゃありませんか。私は、てっきりみつかったな、と思いました。だが、

これは私の間違いでした。次の瞬間、お巡りさんは、何もなかったように歩きだしたのです。私は、ほっとしました。このときばかりは、ほんとにびっくりしました」

このように苦心して手に入れたときの気持ちはまた格別のものがあつたらしい。それこそゾクゾクするほどの感慨がこみあげてきたという。そして、これを、帰って、改めて電燈の下で広げてみたときは、「人にはわからない、いうにいわれないよろこびがこみあげてきました」

といていた。

そうしたらうちでも、メンスとおぼしきシミがあったり、汚れのひどいものほど、吉

川の心を異常に高ぶらせた。それをみたときの目はギラギラと異様に輝き、いつまでもあきることなく、うっとりときみつめたまま、じっと身動き一つしなかった。

その間、吉川の心の高ぶりはうっせきして、ついには最高潮に達する。こうなると吉川は、それまでとは打って変わり、やたらに、狂気にも似て、その手にした下着を顔に当てると深く息を吸い込んで、身もたえするのだった。

そうして最後に、おきまりの下着と取っ組んで瞬時の戯れをするのが、いつものならわしだった。

これに次いで吉川を興奮させたのは、セクシーな色つきのナイロン・パンティーだった。だが、これはめったに手に入らなかった。それだけに、よけい、これが手に入ったときの吉川はうれしかった。

また吉川は、パンティーやズロース、シミーズなどを盗むだけあって、丸山町一帯の地理に全くくわしかった。しかし、それにも増してくわしかったのは、きれいな人妻とか、飲み屋の女中、それに、ちょっとイカす娘のいる家とか店だった。そしてそんなところは必ずマークして、常に目を

離さなかった。そのため、そんなところでこれはと思う女の下着が物干し場にぶらさがっていろいろなものなら、吉川の目はランランと輝き、猫がネズミを狙うときのようにそのチャンス到来をいまや遅しと待ち構えていた。これについて吉川は、
「まるで女とのランデブーを待つといった気持ちです」

といていたが、恐らくそれは、ほんとのことだったろう。それからこれを手にしたときのことをこうもいていた。

「日ごろみている女だけに、なんというか実感が伴い、手にしたときの気持ちは、言葉では到底いい現わせないものがありました」

とにかく、吉川は、変質者としての典型的人物で、そのために狙われた下着の所有者こそいい災難だった。それも、悪いとでも思っているのならまだしも、罪の一トかけらも持っていないとあっては、全く救われない。

そうはいっても、吉川としてみたら、これで当然なのかも知れない。吉川はそれを手に入れることだけに、きゅうきゅうとしていたのだから。

片輪の男にしか性欲を感じない女

和田友作

昨年秋のことである。大阪市住吉区東帝塚山町、松崎喜三郎(37)の妻、松崎葦子(28)に対する離婚訴訟があった。

そのとき調停にあたった山崎委員は「意見の相違」で離婚するという喜三郎の言い分を聞いてみた。それによると、

「葦子は、いまだかつて、わたしの要求を一度も拒否したことはありませんでしたが、彼女のほうから、それを要求したことは、一度もありませんでした。それに、妻は、そのこと、まるで、興味も、よろこびも感じませんのです」

というのである。山崎委員は、

「お互いに、身体の上での欠陥というものはないのですか」

というと、

「それは、医者にもよく見てもらった上のこ

とです」

という。

「失礼ですが、あなたの技術上の未熟さを考えてみられたのでしょうか」

「いや、お互いに十分知っています」

と喜三郎は、自信ありげに答え、そして、

「実は、離婚を決意したのは、妻に不貞の事実があるものですから」

と付け加えた。

喜三郎が、葦子と結婚したのは、四年前のことである。彼は初婚であったが、葦子は二度目であった。

葦子は、Y高女を卒業すると、間もなく、

S商大の講師太田三郎(29)と結婚したが、

二年後、どういう理由でか、離婚した。喜三

郎は、葦子の家、大阪市東区道修町薬種問屋

株式会社松崎商店の丁稚上がりで、当時は、

その番頭だった。いわば、彼は、主家の出戻りのいとはんを押しつけられたのである。

葦子には兄があったが、喜三郎は、分家養子の形で、葦子の姓を名のった。それとともに、会社では、支配人の地位についていた。帝塚山の家も、財産も、だから、すべて葦子名義で、社長つまり葦子の父によって与えられたものである。

「葦子と別れることは、わてにとつては、丁稚奉公以来、積み上げてきた地位も財産も棒にふることになりますのんや。それでも、がまんできんことで」

喜三郎はいつてから、

「そやけど、正当な理由あって別れるときは財産半分もらえるの、ほんまでっしゃるな」

と、どうやら、それが最大の肝心事のような口ぶりであった。

喜三郎はそういつてから、さらに、「高山というのは——今度の葦子の相手でんが、生まれは岡山やいうてますけど、素性は知れまへん。もと、Sサーカスにいたのを、葦子が連れてきて、家におくようになりましてのや。それが、こともあろうに、一寸法師でんのや。阿呆らしゅうて、わての話、信じてもらえん思うんどすけど」

喜三郎の申し立てでは、葦子が、こともあろうに、下男の高山清六(42)と快楽にふけっているというのであった。

異常なセックス

山崎委員が、松崎邸をおとずれたのは、葦子の不貞の相手が一寸法師という異常さに、半信半疑だったからであった。本来なら、相手方の葦子を家裁に呼び出して話をきくのがスジであったが、それでは、喜三郎の訴えの核心がつかめないと直感したのである。

松崎邸は、なだらかな山の斜面にいらんだお屋敷町のなかほどにあって、それほど広くはないが、かなり奥深い明るい感じの家であった。案内を乞うた山崎委員は、いきなり、庭のほうから、あらわれた人影にどきッとした。喜三郎のいう高山であることが、ひと目

でわかったからであった。

背丈は一メートルを少し越す程度の子供だが、その顔は人並みに四十男の深いしわがきざまれて、大きかった。肩から胸、胴などはふつうの大人よりは頑丈にできているようだが、手足が、ほとんどいいほど、子供よりも小さいのである。

それに、目玉がギョロギョロとしてぶきみであるし、鼻柱はつぶれたようにまがってしまつて、そのうえ、唇がぶ厚く、ぬらぬらと光って、まったく、ぞっとするような男だった。

山崎委員は、喜三郎のいうことが信じられなかった。人なみの女なら、とても、こんな男と、だき合うのはおろか、肌にくれるのさえも、堪えられまい。そのうえに葦子は、山崎委員が、これまで、女同士で口をききあった女の中では、もっとも美しい人であった。どちらかといえば、清楚な京風の顔立ちの中に、明るい近代味が加わって、船場育ちのいとは、んらしい人である。しかし、葦子は、山崎委員の訪問の理由をきくと、喜三郎の申し立てを否定しなかった。

「うちは、いつか、決定的な瞬間がくるやろ思うてました。そんなことでもおこらんと、

うちのようなもん、こんな地獄からぬけられしまへん」

そうして、葦子は、まったく、あきらめきつたような態度で、自分の過去について、こう話した。

「うち、清六を愛しているんやない。むしろ嫌悪してまんや。そやけど、あの片輪のからだみると、うちの身体の中に、なにかが燃えて来るのです」

葦子の話によると、彼女がそうして関係した男は、清六だけではなく、数人いて、しかもその全部が、ふつうの女なら、見るだけでもゾッとするような片輪ばかりだという。イザリ、メッカチ、鼻かけ、出ッ歯、セムシ、とにかく、ふつうの男から、はみ出た者たちに、彼女は、そんな天性の美貌と、しなやかな肢体を与えた。

前の夫であった太田三郎の家を出されたのも、彼女が、西の宮のスラム街で、いろいろな男と愛欲にふけていたのが、わかってしまったからだ。

「いっそ、死んでしまいたい！」と、そんな欲情にかられたときは、いつでも思う。だが、浅ましい生命への執着にとりつかれて、それまでできないのだと、葦子は告白した。そして



利

彼女が、病氣と呼ぶ以外にない、そういう異常なセックスにとりつかれたのは、少女時代のできごとが原因しているようであった。

片輪地獄

それというのは、――

昭和二十五年十月の彼岸の日であった。そのころ葦子は、まだY高女に通学していた。Y高女は、大阪でも、美しい少女の集まっているので、有名な女子高校である。その中でも彼女は、そのころはやはりはじめたミス何々という呼び名を冠せられていた。

つまり「ミスY高女第一号」であった。

秋晴れのあたたかい日和の午後四時すぎ、テニス部に席をおいていた彼女は、練習着のまま、コート肩にかけて、学校に近い天王寺区下寺町の路地を歩いていた。そのころ、そのあたりは、まだ戦災を受けたままの寺がたくさんあった。荒れはてた墓地在、こわれた土塀の奥にならび、そこに小屋を作って、多くの乞食が住んでいた。しかし、白昼でもあり、通りなれた道で、彼女は別に危惧をいだいてはいなかった。

白いコートを肩に羽織ってはいるものの、ユニホームの上着は、袖を短く、胸を大きく

あけている。それに、ショート・パンツである。よくのびた四肢が、むき出しになっている姿は、みる人によって、ひどく、欲情をそそるものだ。そんな足もとに、ふいに、はいつくばるような人影が飛び出したとき彼女は思わず、キャッと叫んだ。

「へ、へ、へ……」

と低くおし出すように笑ったのは、その付近に巢食う乞食のひとりであった。

片足を膝小僧のところで切断して、その傷口の肉がひつつれていた。両手をたえずこきざみにふるわせながら、唇の横からよだれがだらだらたれていた。

「いややわ！」

と、葦子は、きたないものでもふんづけたように、思わず叫んだ。

「へ、へ、へッ、いとはん、なにがいやでんねん、わてらから人間だっせ」

「そやけど、ふいにとび出しはるんだもん」

「そら、いとはんにたのみごと、あったさかいな」

「なんやの？　うち、お金もってへん」

「欲しいのはゼニやおまへん。いとはんのそのきれいなからだだんねん」

「いやなこと、いわんといて……」

と葦子は、地面をはうクモのような姿をよけて走り出そうとした。しかし、その片足に男がだきついていていた。

あッ！　と葦子が前にたおれた。

「おうい！　はよ、こい！」

と男がさげんだ。

すると、塀の影にひそんでいたらしい人影が、とび出した。そのひとりは、背中に大きなコブが出来ているセムシだった。もう一人は、片目で鼻の先が完全に欠けていた。

三人の片輪は、葦子の手足にだきつくつと、ずるずると彼女を塀の内側にひきずりこんでしまった。しかし、三人とも異様な力をもっていた。たちまち彼女は、奥深い墓石の中につれて行かれてしまった。

「助けてッ！」

と彼女は、泣き叫んだ。

「何しさらすのん、かんにんして！」

彼女は何度もおきあがろうとしては、押えつけられた。そのうちに、彼女は、コートもユニホームも、ひきさかれてしまった。そればかりか、ショート・パンツもぬがされ、その下のものもずり下げられた。背中にも、おしりにも、冷たい石だたみが感じられた。

ビッコとセムシが、彼女の手足を、最初に

おさえる役目をした。そして、彼女の口にはひきちぎられた衣服が、おしこまれてしまった。

「ううッ！」

うめきながら彼女は、自分の身体におしかぶさって来た顔をまじまじと見た。

だらりと白いウミのようなもので、どろんとした目のまわりに、目玉だけが異様に光ってとび出していた。鼻がなくて、ただ二つの鼻穴だけが、ぶ厚い唇の上についていた。男は、そんな顔をいっそう気味わるくゆがめて、だらりと舌を出すと、彼女の美しいマブタをなめた。

「くッ！」

と葦子は、顔をそむけるようにしたが、そのまま、あまりのおそろしさのために、意識を失っていた。しかし、それは、長い間ではなかった。立っていても、地面をなめるように見えるセムシは、そのために、しょっちゅう首を横にかたむけていた。彼は、三人のうちで一番力持ちであった。

すでに鼻かけの片目の男を受け入れてしまったといっても、なおもさからう葦子を自由にあつかうのだった。ほかの二人を、彼女のからだから離れさせ、彼女の足首を持って、

それを頭のほうに逆におさえつけた。葦子の背中では、そのために、石にすりつけられて、皮膚が破けて、血にそまってしまった。

その点、ビッコが一番力がなかった。しかし、彼は出ッ歯の間から、たえずだらだらと流れるよだれで、しつこく、涙でぬれた葦子の顔を、いっそうベタベタさせた。

その間の時間は、二時間に満たなかったであろう。

なぜなら、彼女が、ユニホームとショーツ・パンツ、それに、コートだけを身につけて、まるで心身を喪失した人のように、ひとり路地を離れたときは、まだ、あたりは明かるかった。

だが、そのわずかな時間が、その後の彼女を支配したのであった。

恐怖の快美

太田三郎との結婚後、彼女は、彼との夫婦のいとなみに、なぜか空虚なものつきまとうのに気がついた。それが、何かをハッキリ意識したのは、ある日、玄関に物乞いが立つてからであった。

その男は、片手を中風のようにぶるぶるふるわせていた。そして、ぬれほそった唇から

は、何やら、ぶうぶうと音を出していた。いう言葉もはっきりとは聞きとれなかった。

「うちには、あげられるもの、なにもないわ」といいながら、不意に葦子は、恐怖と同時に、いい知れぬうずきのようなものが、胸の中にこみあげてくるのを感じた。

かあッ と、全身の血が逆流する感じであった。立っていられないような、気はずかしさでもあった。

「あんた、あがんはれ」

と、いって、彼女は、物乞いの腕をとって、いた。どうしてもおさえきれない気持ちのかぶりに、おちいってしまったのである。

それからというものの葦子は、道を歩いていても、醜悪な片輪の姿をみると、恐怖と同時に奇妙な魅惑にとりつかれていった。

太田三郎と別れても、だから彼女は、なんの悲しみも覚えなかった。それは、喜三郎と結婚しても、なんのよるこびも感じられないのと同じことなのであった。彼女が、女としての満足を感ずるのは、三の宮のカサブ街やサーカスなどで、または四天王寺の乞食の巢で、けだものじみた人間をみいだしたときだけであった。

高山清六もその一人で、四天王寺の彼岸会

に小屋掛けしたSサーカスでみつけ出したのであった。

葦子は、毎日、サーカスに通い、まるで、芝居のスターに入れあげる女のように、清六に熱をあげた。

その結果、一年ほど前、清六がSサーカスをやめて彼女を訪ねてくると、そのまま居候においたのである。

彼女が清六を相手にするのは、まったくお芝居じみていた。彼女は、いつも、一寸法師に彼女を追わせ、部屋の中を、かけまわってのがれ、そのあげく、とらえられる形になっていた。

「ゆるして！ こわい！」

と悲鳴をあげながら、しかし、すべてを支配しているのは彼女であった。

山崎委員は、いっさいの話をきき終ったとき、何か、彼女の全身までが、どろどろに汚れけがされたような、どうにも不潔な気分から抜けられなかった。それと同時に、美貌の葦子の悲しみがわかる気がした。それは、ふつうの常識では理解されないものであったが、女としての山崎委員の本能が、かぎあて、なにかでもあったのだ。

△凶悪なるフェチシスト▽

黒い通り魔女の乳房刺し臀切り事件史

新川 勇 二

すれ違いざま、鋭い刃物で頬を切ったり、臀を切ったり、あるいはキリで乳房を突き刺したりする「通り魔」——それは、危険な変質者なのだが、彼らは、いつ、どこで、どんな犯行を、重ねているのだろうか？

女と見れば切りたくなる変態少年

終戦後、二十一年から二十二、三、四年にかけては、だれもが食うことだけで精いっぱいギリギリの生活をしていたのと、進駐軍のどぎつい性犯罪が随所に頻発していたので、女のオーバーやスカート、あるいはカラダを切るなどといった、いわゆる「女切り事件」はあまり目立たなかった。それが俄然、世間にクローズ・アップしてきたのは、二十五年に入ってからである。これは、だれの心にも、また生活の上にも、少なからず余裕がでてきたからだろう。

二十五年三月十一日朝、若い女とみれば切りつけたくなるという変態少年が、東京野方署から送検された。調べによると、この少年は、

中野区野方のうどん加工職三島芳夫（一六）で、同年二月四日午後五時ごろ、同区上高田一ノ一五先路上で、女子大生相原邦江さん（一八）に自転車で追いつがって内腿にナイフで切りつけ、全治二週間の傷を負わせたうえ、同月十八日午前十時ごろ、同区大和町五一四一先道路で、洋裁学院生徒加藤祥子さん（一六）の左腿に全治二週間の傷を負わせたが、三島は、このほか、同様手段で三件の犯行を自供した。

また同年四月十六日には、神奈川県平塚市で、十六人目の女の髪切り事件が発生している。同日の夜九時四十五分ごろ、同市浜岳、某電気会社の女工藤本みささん（一八）が、市内の元工業学校大通りを、姉のくにさん（二〇）と通行中、突然、背後から襲われ、数回にわたって髪の毛を切り取られ、頭部二カ所に長さ十センチと六センチ、いずれも骨膜に達する重傷を負わされた。



同市での同様髪切り事件は、二十三年二月二十六日来、頻発をみていたもので、平塚署では犯人検挙に躍起となり、懸賞金までかけて追っていたが、犯人はきまって、雨の夜か、雨模様の夜に限って出没するため、捜査は至難をきわめていた。

これより先同年三月三十日にも夜九時半ごろ、同市馬入、大有化学工場前道路を、同工場社宅の木村アヤ子さん(二二)、笹尾みつ子さん(一六)の二人が通行中、いきなりうしろから三十歳前後、カーキ色ズボンに地下足袋をはいた五尺三寸ぐらい、ヤセ型の男にアヤ子さんが襲いかかられ、その髪の毛一ト握りを切りとられ、さらに切ろうとするので抵抗したところ、その右手おや指に負傷させるといった事件も起きている。

同年四月二十二日には、あの有名な変質者、河野賢次郎(一八)による「アベック殺し事件」が起こっているし、五月十九日午前一時ごろ、川崎市海塚一二、阿部病院看護婦宿舎に黒ズボン、白ワイシャツの男が侵入、就寝中の看護婦杉村まち子さん(一八)の下腹部に刃物で全治二週間の傷を負わせ、裁縫ばさみ一丁を奪って逃走。さらに同日午前四時ごろ、同町一一五一、田中五三吉さん(四二)方に同様風体の男が押し入り、同家に泊まっていた、同市宮前町の喫茶ガール高坂千代子さん(二六)を叩き起こし、

「オレと寝ろ」

と脅迫、断わると、千代子さんの全身数カ所に切りつけ、全治一カ月の傷を負わせて逃走。次いで、同日四時四十分ごろ、同市東小田町飲食店飯田浅吉さん方に、覆面の男が侵入、同家の女中萩原春江さん(二〇)をゆり起こして、

「金か、身体か」とカミソリで脅し、春江さんが「金は奥にあります」と立ち上がろうとすると、いきなり、左頸部ほか三カ所に全治三週間の傷を負わせて逃走した。

これが、同市の婦女子を恐怖のどん底に叩き込ませた寝室の女切り事件のあらましであるが、この犯人、同市東渡田一ノ三四四床屋・中沢啓(三一)は、このほか、同月十九日午前零時四十分ごろ、同市小杉御藤町二ノ二六、大貫八郎さん方に侵入、就寝中の女中森重ハル子さん(一五)の蚊帳のなかにもぐり込み、ハル子さんの足を持ち上げたところ、ハル子さんがびっくりして目を覚まし、

「こわい、こわい」

と声をあげたので、ハル子さんの腰に切りつけて逃走。その足で一時間後に、同家から一里ばかり離れた、同市上平間三二四、加藤由雄さん方に押し入り、室内を物色しているのを妹の寿恵子さん(二二)に発見され、騒ぎ立てられたので、カミソリで寿恵子さんの局部に二週間の傷を負わせ、現金千五百円と腕時計一個を奪って逃走している。

なお中沢は、放火常習の異常性格者で、昭和十年に、放火で少年刑務所に四年、その後、放火窃盗で四年、二年と再服役、二十四年八月出所してきたばかりだった。

さらに同年五月二十二日午後六時四十分ごろ、東京池袋発成増グラウンド・ハイツ行きの東武鉄道特定バスが、乗客約十名を乗せて、東京

板橋区上板橋三ノ六三六先に差しかかったさい、乗客の一人、白ワイシャツ、カーキ色ズボンの若い男に、車掌の埼玉県北比企郡松山町、関根敏子さん(二二)が、

「切符を切らせてください」

というと、突然、刃渡り六寸のヤナギ刃で、敏子さんの後頭部二カ所と、そのそばに乗り合わせていた、東京都練馬区旭町一、グラウンド・ハイツ内、使用人・渡辺みつさん(二三)に切りつけた。

この騒ぎに、運転手の山下次男さん(二五)が急停車、あわてて逃げようとする男を追って、駆けつけた板橋署上板橋派出所の千足文男巡査らとともに取り押えた。

調べによると、この男は、同区練馬南町四ノ六〇、無職・諏訪貞一(二二)で、グラウンド・ハイツの警備員を解雇され、就職口がないところから、ムシャクシャしていた矢先の発作によるものとわかった。

同年八月十二日夜十一時半ごろ、タバコ娘の一人、西宮市高木、卯野葉留美さん(二〇)が、阪急西の宮北口に下車、帰宅の途中、暗がりを通りかかったさい、手拭いで覆面した男がやにわに飛びかかってきて、キリで右肩を突き刺し、組み伏せて暴行しようとしたが、勝気な葉留美さんが必死で抵抗したため、男はそのまま逃走した。葉留美さんは、帰宅するまで肩にささったキリを知らなかったが、全治一週間の傷だった。

二十三人の女の臀を切る

二十六年五月二十二日夜十時四十五分ごろ、東京都大田区女塚一ノ一八蒲田市場内で、同区御園町二ノ一、女学生・飯沼美佐子さん(一

八)は、二十歳ぐらい、五尺二、三寸、ネズミ色の背広、下駄ばきの男に、カミソリで右でん部を切られ、長さ三センチ、深さ二ミリの傷を負わされた。

同年十月十六日、横浜市警神奈川署では同年春から、同市神奈川区内で数十名の被害者を出していた婦女子のでん部切り犯人、同市鶴見区生麦町一二二八、電気商・柳原和年(二四)を、傷害容疑で検挙、生々しい血ノリのついたキリ五本とカミソリ五本を押収した。

柳原の自供によると、主として夜の十時ごろ、用便中の婦女子をねらって便所のはき出し口から、竹の柄のついた凶器でいきなり切りつけ、悲鳴を聞いて喜んでいたといわれ、同年九月二十二日夜、同区大口通り五一会社員の妻村木よし子さん(四〇)のでん部に切りつけたほか、九歳から五十五歳までの婦女子十三名を切ったといっていた。

しかし、届け出中には某高官夫人ほか中流以上の婦人二十三名があり、いずれもでん部を切られて全治二、三週間の傷を負っており、他の十名の犯行も柳原の仕業とみられていた。柳原は、二十五年の九月に、同市鶴見区生麦町で娘のでん部を切り、保釈中のものだった。

同年十月四日夜十時十分ごろ、東京都板橋区の東上線常盤台駅付近のカソリック教会から帰宅しようとした、同区志村前野町一〇六二、益子房子さん方同居人、労務者・坂本教さん(四七)の二女美智子さんが同駅から練馬横町にぬける路上にさしかかると、前方からコーモリ傘をさし、黒っぽい洋服を着た二十五、六歳の男がやってきて、すれちがいざま、無言で美智子さんの左頬に鋭い刃物で切りつけ、一目散に逃げ去った。傷は長さ十二センチ、深さ五ミリぐらいで、約一カ月の重傷。現場は、住宅街の薄暗い場所で、同年九月十日夜にも、現場から約五百メートル離れた、同区板橋町五ノ五五八七、会社事務員

成田礼子さん(二〇)が、自宅付近で、若い男に、カミソリのようなもので左腕を切りつけられるといった事件があった。このほか二十五年夏以来、同区と隣接の豊島区内に、六件の同様な女の頬切り事件が発生していた。

二十七年二月二十八日には、さきに川崎市内に発生をみた中沢の女切り事件と同様のケースが高崎市に起った。同日午前一時ごろ、同市柳川町、沼野外科病院に、覆面の小男が侵入、看護婦の石川とし子さん(一六)に発見され、いきなりナイフでとし子さんの右背部に切りつけ、全治十日間の傷を負わせて逃げ、同二時ごろ、同市北通町の村田医院、続いて同町の高草木眼科医院、同三時ごろ弓町の天田ドレスメーカー、同四時ごろ通町の井上病院の病室、同じく羅漢町、そば屋藤村ふく子さん方などへ、いずれも同じような男が押し入ったが騒がれて逃走、さらに同時刻、同市旭町、鉄工業田中友次郎さん方を襲い、自転車一台と、店先にあった現金五百円を盗んで逃げ去った。

海賊気取りで女を刺す

二十八年八月二十五日午後五時四十分ごろ、東京都品川区大井立会町五〇〇、大井映画館内で、売店の高島トシ子さん(五二)が、二階の洗面所に入ると、入口寄りの女便所から、白の半そでシャツ、黒ズボン、下駄ばきの小柄な男が飛び出して逃走した。高島さんが怪んで便所のドアを開けたところ、洋装の若い女が血に染まって死んでいるので、あわてて支配人の木下新一郎氏(三一)に知らせ、直ちに大井署に届け出た。被害者は、観客の一人、横浜駐留軍勤務・角田貞男さん(二八)の証言で、角田さんが連れてきた横浜市中区黄金町一ノ二

三、蒔田寿司の住み込み女中岡本庸子さん（二二）とわかった。

調べによると、庸子さんは、鋭利な刃物でノド、左手など数カ所をメッタ切りにされ、横向きになって倒れており、そのそばにハンドバッグ、赤いサンダルが散らばっていた。

ちょうど高島さんが、庸子さんの死体を発見し、大騒ぎとなった同時刻、一階入口の切符係関川輝子さん（一九）が、二階から駆けおりにくる黒ズボン、半そでシャツの男を目撃、館員らに知らせたので、さっそく大井町方面へ追っていったが、姿を見失ってしまった。

角田さんと庸子さんは、同年春ごろから結婚話が持ち上がったが、二十日、お盆で庸子さんが茨城県筑波郡作岡村下作谷の実家に出かけるときも角田さんが上野駅に送るといって迎えにいき、二十三日一旦店に戻って、また角田さんと出かけ、同日から現場近くの同町五八一旅館「おおい」に二人で投宿、二十五日午後一時過ぎ、連れ立って旅館を出、大井映画館に入ったといわれ、映写中に庸子さんは席を立てて便所にいったという。

大井署に設けられた捜査本部では、犯人らしい男を追って大井森下町付近で、その姿を見失ったという同館の映写技師二人の話から、付近一帯の不良、ポン中毒者をシラミつぶしに洗っていった結果、ついに同町三九八五、無職岩上きよさん（四三）の二男、元工員光男（一九）を犯人として検挙した。

岩上が犯行に使った凶器は、もと錦糸町の魚屋に勤めていたころ、付近の映画館で見た「海賊船」の主役が持っていた、粋なジャックナイフを真似て、当時、付近の金物屋で買ったもので、日ごろ同人は海賊気取りで、このナイフをはだ身離さず持っていたとのことである。

同年十月十二日には、千葉で新妻が、また十四日には川崎で未亡人

が、刺殺されるという事件があった。

十二日午前五時ごろ、千葉県千葉郡津田沼町、京成大久保駅付近の畑のなかに女の死体があるのを、同町の農業・小川庄蔵さん（七九）が発見、千葉地区署に届け出た。

調べによると、女は同町大久保、鈴木宗右衛門さんの長女、元東京白百合高等女学校教師の美枝子さんで、一ト月前の二十二日、東京大学医学部薬学科研究生藤沢圭吾さん（三一）と結婚したばかりの、近所でも評判の美人で、十一日朝、結婚のお返し用品の買い物に、東京三越デパートにでかけ、その帰宅途中、午後七時ごろ、京成大久保駅からあとをつけてきた痴漢に襲われたものらしく、胸部、下腹部などの六カ所を鋭利な刃物で刺され、暴行されていた。

一方、川崎のほうは、十四日午前六時十分ごろ、同市鹿島田八九六日立製作所川崎工場東側塀外の陸稲畑のなかに、同市小倉八八清和寮内、工員加藤福次郎さんの姉節子さん（三八）が、右頸動脈と右胸部など三カ所を刺され、暴行のうえ殺されているのを、牛乳配達人が発見、中原署に届け出た。

調べによると、節子さんは、十年前、夫と離婚、以来、水商売に入り、芸者などをしていたが、刺殺された当時は、福次郎さん方に寄住、大森一ノ六四七七、鮎八に勤めが決まり、十三日午後三時ごろ初出勤し、その帰途、痴漢に襲われたものとわかった。

この両事件は、いずれも、うしろから尾行しているほか、被害者がどちらも「美人」という点で、どこかこの犯罪に共通な異常性を強くにおわせていた。

同月二十九日夜九時ごろ、東京都杉並区堀ノ内二ノ四五九柏学院に黒オーバーにスキー帽をかぶった二十五歳ぐらいの男が侵入し、廊下

でばったり出会った同学院の炊事婦田山節子さん（四一）に、短刀のようなものをつきつけて脅迫、いきなり田山さんの髪をつかんで引き倒しさま髪の毛を切り落とし、何も盗らずに逃げ去った。

三十分間に女三人を切る

二十九年一月二十日夜、埼玉県大宮市内で、わずか三十分間に、三件の女切り事件が起こった。

同夜六時半ごろ、同市浅間町二丁目地内で、帰宅途中の、同市内天沼二ノ三〇〇九、会社員田村禧枝さん（二二）は、すれ違った工員風の若い男に、ナイフのようなもので左頬を切られ、さらにそれから十五分後、同現場から約一丁離れた浅間神社付近で、同市浅間町二丁目、内堀悦子さん（二〇）も、同様右頬を、また十分後には、同町二丁目、大宮信用金庫事務員矢部恵子さん（二一）が右マブタ上を横にひと撫でに切られた。犯人は十二、三歳、茶のオーバーを着た小肥りの男だったという。

二月九日夜、若い女ばかりをねらって胸、腕、頸部などを鋭利な刃物で切りつける痴漢が、わずか一時間たらずの間に、東京渋谷、高輪両署管内に出没、二件の乳房切り事件が発生した。

同夜七時四十分ごろ、渋谷区向山町、会社員・



糸永省吾さんの妻道子さん（二二）が、勤めから帰宅の途中、尾行してきた二十五、六歳、黒ジャンパーの男に、新築中の空家に連れ込まれ、

「ハダカになれ」

と、ジャックナイフのようなもので脅かされた。拒んだところ、男は道子さんの右乳房上と右腕を刺し、二週間の傷を負わせて逃走した。

また、同八時午ごろ、港区芝白金三光町、公務員矢沢徳次さんの長女、高校一年生和子さん（一五）を襲って、右乳房を刺し、一週間の傷を負わせて逃げた。

渋谷署では、この届け出により、十日夜、渋谷区鷺谷一四、前科二犯、無職高橋一郎（二六）を、強盗、傷害容疑で検挙、取り調べたところ、前記の乳房切りの二件を自供した。高橋は、血をみると異常に興奮するといった性格異常者であった。

迷宮に入っ た練馬の洋裁生殺し

同年三月一日朝六時ごろ、東京練馬区小竹町二六七六郡司操さん宅前三さ路で、同区南町一ノ三四六、保土谷化学社員菊地芳雄さん（四四）の妹、文化服装学院本科一年生秀江さん（一九）が、小刀ひさえのようなもので、心臓部を前からひと突きに刺し殺されていたのだ。秀江さんは、前夜五時半ごろ、日曜のこととて、家族と連れ立って遊びにきていた次兄の同区小竹町二ノ二二都営住宅内、薬剤師俊雄さんの妻和子さん（三一）と、同長男寛ちゃん（五つ）、次男徹ちゃん（一つ）の三人を送りにいったまま帰らないので、芳雄さん方では心配して、同夜七時ごろから、付近を探し回る一方、練馬署に捜索願を出していた

矢先、母親のくにさん（六二）が発見したのだった。

現場は、自宅から約二十メートル離れた住宅街の暗がり、秀江さんが、いつも俊雄さん宅に行くとき通る道でなく、あまりに自宅に近かったのも、かえって発見がおくれたといっていたが、発見から死体を動かしたことも、また顔にタオルをかぶせてあること、致命傷の心臓をひと突きにされているわりに出血が少ないことなどから、顔見知りの、一人ないし二人の痴漢の犯行ではないかとみられた。

殺された秀江さんは、前年、豊島区の高校を卒業後、新宿の文化服装学院に入学、その四日、専科に進むことになっていた。性格は、末っ子で甘やかされて育ったため、わがままなところがあつたが、素行は真面目で、夜遊びするようなことはなく、明るい近代娘として近所の評判もよかった。

それから一週間を経た同月八日夜、またまた若い女の傷害事件が目白署管内に発生した。同日夜七時五分ごろ、豊島区高松町二ノ二三先暗がり、同町二ノ二六、都生活改善学校生徒坪井幸子さん（二二）が、学校からの帰宅途中、前方から無燈火で自転車に乗ってきた二十七、八歳ぐらいの面長、灰色のジャンパーの男に、やにわに長さ十五センチ上刃鋸状、下刃鋭利ヤスリひさえのようなもので、着ているオーバーの上から右乳房のうえをひと突きされ、凶器をつき立てたまま逃走した。幸子さんは、近くの清水病院に転がり込んだが、幅一センチ、深さ二センチ、全治三週間の傷を受けていた。

届け出により同署では、二月七日夜、同区高松町三ノ九、大津和子さんが、同町一の富士神社近くの暗がり、同様な相の無燈火で自転車に乗ってきた男にナイフのようなもので、左乳房を刺され、全治二週間の傷を負ったほか、板橋練馬、目白、池袋を中心に自転車で約十分

以内の距離に、前後六カ月にわたって数十件の同様事件が起きており、しかも各事件の現場が、板橋の川越街道に連なっている点から、板橋付近に土地カンのある痴漢の仕業でないかとにらみ、懸命の捜査を行なったが、犯人はいまだに捕まっていない。

後ろからツケて来てゲサリ

東京練馬の洋裁生殺し事件がまだ解決をみない同年四月二日、こんどは品川区内の小住宅街で、宵の口だというのに、若い人妻と娘が、通り魔のような男に、つぎつぎと襲われ、重傷を負うといった事件がもち上がった。

同日夜八時半ごろ、品川区平塚町二ノ六一五先で、同区西大崎二ノ七五、松栄工業会社事務員梅本たみさん（三一）大田区久ヶ原町九四、正正さんの妻）が帰宅をいそいでいると、うしろからつけてきた男が、ものもいわず、いきなりキリのようなもので、梅本さんの背中二カ所を突き刺し、ばったり倒れるのを見届けて逃げだした。

それから十分もたたないうち、こんどは現場から約四百メートルはなれた同町一ノ五二三、明電舎戸越寮内工員渡辺八重子さん（一八）が、近所で買い物をして寮に入ろうとしたとき、やはり、うしろからつけてきた若い男に、背中二カ所と左腕をさされて倒れた。

いずれも、近所の人があみつけ、付近の栗原病院に収容したが、二人とも傷は肺に達した重傷だった。

両現場とも同区内の繁華街、戸越銀座の裏手の小住宅街で、幅一間ぐらいの路地が交差しており、犯行時間には、まだ会社帰りの人で人通りが多く、付近の人も、この大胆な犯行にすっかりおびえていた。

凶器は、渡辺さんの左腕につき刺さったままになっていたセンマイ通しで、時間や手口などの関係から、犯人は、付近の地理にくわしい痴漢による同一犯人の仕業と思われる、また、目撃者の証言などから、十八、九歳、五尺三、四、寸黒いつめえりの学生服にズック靴ばきで、無帽だったといわれる。

同月十九日には、犯人坂巻修一（二一）の「鏡子ちゃん殺し事件」が起こっているし、五月四日朝八時二十分ごろ、水戸市水戸一高三年生、同市志満津百貨店社長島津恒雄氏の長女敏子さん（一七）が、同校の図書館で朝の予習を終わり、友だち五、六名と図書館を出たところ、いきなり二十五、六歳の男に安全カミソリで切りつけられたが、体をかわしたため、右腕に長さ三センチ、深さ一ミリの傷を負っただけでした。男は、職員が取り押え、水戸署につき出した。

調べによると、男は同市新町五、檜山泰明（二九）で、四月十八日夜九時ごろ、同市鷹匠町の山下時子さん（二六）が便所に入るのをみて、下腹部を、くみ取り口から鋭利な刃物で切りつけ、三週間の傷を負わせたほか、同様四件の婦女傷害事件を自供した。

さらに同日朝九時四十分ごろ、旭川市六条一四丁目大成小学校で、授業時間中、一年五組の女生徒が便所で痴漢に襲われ、乳房を小刀で刺されて殺害されるといった「第二の鏡子ちゃん殺し」事件が発生した。

被害者の女生徒は、同市四条、昭和炭鉱鉱員吉本耕さん（四五）の三女幸子ちゃん（六つ）で、同朝九時三十分ごろ、一時間目のコイノボリの工作中、便所にいったさい、便所内に隠れていた何者かに小刀で左乳下を突き刺され、胸から血をふきださせながら同校一年二組の廊下前に倒れているのを、同校の新谷ミヤ教諭が発見、手当を加わえ

たが、同十時三十分ごろ死亡した。

同年六月七日夜、東京都江東区三好町と、近くの猿江町の二カ所で、二人の女性が、自転車上の男から、いきなり左背と左モモを切られるという事件が起きた。

同夜十時半ごろ、同区住吉町一ノ七、木箱製造業滝上すみさん（四八）は、自宅から同区猿江町一ノ九、自家経営の工場へ夜食を運ぶ途中、同町二ノ二三先の暗がり、うしろから無灯火の自転車できた若い男に、いきなり鋭利な刃物で左背中を切られ、近くの安江病院に収容されたが、長さ二十センチ、深さ三センチ、ロツ骨に達する全治二カ月間の傷を負った。

それから五分ばかりたった同夜十時三十五分ごろ、同区深川三好町三ノ四、会社事務員・松田恭子さん（一九）が、近くの知人宅に遊びにいった帰り、自宅前で同じようにうしろからきた無灯火の自転車の男に左モモを切られ、長さ十センチ、深さ二ミリの全治一週間の傷を負わされ、近くの墨田病院に収容された。

滝上さんと松田さんの話を総合すると、犯人は二十五、六歳、やせ形で、髪をボサボサにした五尺三、四寸、工員風の男で、黒っぽい上着とネズミ色ズボンをつけており、細身のタイヤの自転車に乗っていたという。

海水浴場のモモ切り魔

片瀬の海岸では、二十八年夏には、十八名からのモモ切り事件が起きていたが、同年八月一日、片瀬東浜海水浴場で、同年はじめてのモモ切りが二件発生した。

同日午後零時ごろ、同海水浴場で、東京都北区上十条四ノ一三、料理店サービス係丸山文子さん（一九）が、波打ちぎわから十メートルぐらいのところまで泳いでいるとき、右足のふくらはぎをカミソリのようなもので深さ一センチ、長さ十センチほど切られ、全治十日間の傷を負ったほか、午後二時ごろ、横須賀市船越一ノ五〇、無職徳永サヨ子さん（一九）も、同場所で、下腹部を、深さ〇・五センチ、長さ八センチほど切られ、十日間の傷を受けた。

同十五日は、一日のうち四名もの女性がその被害を受けたが、これらのいずれもが、身長五尺三、四寸の、体格のいいアベックのグラマ―ばかりだった。

埼玉の娘殺しバラバラ事件

前夜から行方不明だった埼玉県入間郡高階村砂四三八、村議・農・葛貫進さん（五一）の五女久子さん（一九）が、見るも無残な姿となつて、同村内東上線新河岸駅付近のコンクリートの肥だめから発見されたのは、二十九年九月六日の午前十一時ごろのこと。犯人は久子さんの首と胴をタオルで絞め、さらに両手をはがい絞めにして麻ひもで縛って暴行したのち、鋭利な刃物で両方の乳房をえぐり取り、両足のものつけ根からえぐり抜くように切断、右足の大腿部の肉を削り、骨だけとし、しかも右くるぶしの上から全部骨だけ残して腹部の皮膚をはぎ取ったうえ、カマスに入れて肥だめに投げ込まれていた。これを、俗に、〃埼玉の娘殺しバラバラ事件〃というのであるが、その犯行の大胆で、残虐なことは、全く目を覆うばかりで、川越署特捜

本部では、その捜査に当たって、鋭異意、常性欲者にホシ（犯人）をしぼって捜索を行なっていた。

すると俄然、有力容疑者として、東京都北多摩郡調布町下石原二一七六、無職松原雲さん方止宿人、山梨県生まれ、窃盗前科一犯、古屋栄雄（二八）が浮かび上がってきた。そこで、間髪を入れず、十一月十八日夜、詐欺の疑いで古屋を逮捕、嚴重に追及したところ、二十一日の朝にいたり、その犯行の一切を自供した。

調べによると、古屋は、事件当日の五日期九時ごろ、東上線下り電車で鶴瀬駅まで行き、歩いてゴムヒモを売りながら入間郡福岡村から大井村にいった。そして、新河岸駅にいき、その後、砂新田方面にいったが、新河岸踏切り付近で、黒いスカートに白い半そでシャツ、ズツ



利

ク靴の若い女をみた。これが、かつて思いを寄せてふられた女にそっくりだったので、その女の身代わりに殺そうと決意し、肩を並べて歩いた。そして突然、

「オレは恨みがある」

と飛びつくなり、首を絞めた。

女は、前のめりに倒れた。このとき人声が聞こえたので、女を畑のなかにひきずり込み、人の通過するのを待って、女を仰向けに寝かせた。だが、うなるので、手ぬぐいで絞め直した。それから、女としての価値をなくすためバラバラにしてやろうと思い、安全カミソリとジヤックナイフでシャツを切り裂き、ハダカにしたうえ、左右の乳首、左足、右足の順に切り、最後に下腹部を切り取ったのである。すつか

りくたびれたので、近くの神社にいつて休み、その後ふたたび現場に引き返し、東上通運の倉庫からカマスを盗み出し、胴体をそれにつめて肥だめに投げ捨てた。足は重いので、肉を切りとって捨てた。そして肉片を持って再度近くの神社に引き返し、これをちぎって社殿、床下などに投げ捨てた。そうこうしているうちに夜が明けてきたので、福岡駅に向かい、乗降客が多くなるのを見はからって電車に乗ったといっていた。

ところで、この古屋は、東京練馬の洋裁生殺し、また、千葉津田沼の新妻殺しなどとともに、二十八年十月から二十九年八月ごろまで東上線朝霞―福岡駅間の電車で若い女性約二十名がおしりや下腹部をカミソリのようなもので切られた事件も、土地カン手口が似ているところから疑いがかけられていたが、あくまでこれらについては強引に否定していた。

自転車に乗った通り魔

同年十二月十三日午後八時五十分から同九時三十分ごろまでの約四十分の間に、東京都墨田区向島須崎町から同区柳原町柳原橋のタモトまで約三丁の暗い路上で、人妻、芸者など七人（一名は未遂）が、同一犯人らしいロイド眼鏡をかけ、自転車に乗った三十男に、カミソリのような刃物で背後から頬を切りつけられた。

さらに翌十四日朝、またまた、同区亀崎町、女工羽角ナスさん（四六）ほか一名が、前夜の現場付近で、同様男に顔を切られるということが起こった。

同日十三日夜八時五十分ごろ、同区須崎町一六八先を歩いていた同

区向島三ノ二芸者置屋「辰巳家」の女将萩野静江さん（三八）は、うしろに自転車のペタルの音を聞いた瞬間、左顔面に約十センチの傷を負い、一カ月の重傷を受けた。

それから、三分後、同町八六先で、お座敷帰りの同町七四「万家」の芸者小島玉枝さん（三二）は、前から自転車に乗ってきた男に切りつけられたが、とっさに身をよけたので、右エリ首にかすり傷を負っただけで済んだ。

次いで、同町一七〇先、言問橋交番のすぐ脇で、同町一六五「の家」の芸者矢口すみ子さん（一九）が、うしろから、右顔面を約十センチ切られ、十日間の傷を負った。

続いて同町一七一先暗がり、同町一〇七、喫茶店「三光軒」のママ松永きくさん（五八）は、うしろから追いつがりがさま頬を切られたが、軽傷。

同九時二十分ごろ、約一キロ離れた同区江東橋二ノ一〇先で、同番地の人妻田沼きよ子さん（二七）は、うしろからきた同風体の男に左頬を切られ、一週間の負傷を受けた。

また同九時二十五分、そこから約二、三百メートル離れた同区錦糸町三、錦糸町公園入口付近の暗がり立っていた横浜市七島町一一七夜の女・松崎よしえさん（三九）は、物音にふり返ったとたん、自転車の男に右頬を切りつけられて一週間の傷を負った。

同九時半ごろ、さらに四、五メートル離れた同区柳原橋タモトで、江東区大島町二ノ九二六、人妻岡村糸子さん（三九）は、うしろから自転車できた男に顔を切られ、十日間の傷を負わされた。本所・深川の両署では、これら九件は、人相から、同一犯人の仕業とみて、変質者に重点をおいて捜査を行っていたが、その片鱗だもつかめず、今

日に至っている。

翌三十年一月二十五日夜七時二十分ごろ、東京都墨田区亀沢町一ノ一〇、無職松村糸江さんの長女千恵子さん(二二)は、お使いにいつての帰途、自宅付近の二葉小学校前の暗がり、うしろからつけてきた二十七、八歳、背が高く、カーキ色の登山帽に、レインコートの男にいきなり後ろ髪を引っぱられて倒されたが、千恵子さんが大声で救いを求めたので、何もせずそのまま逃走した。

このあたりは、前年の暮れ以来、頻々と女切りが発生していたおりもおりのこととて、る同一犯人が手口をかえての犯行ではないかとみられた。

同年二月二十六日午後九時五分ごろ、またしても墨田区寺島六ノ一二六先路上で、同区吾嬬町西九ノ四六曳舟^{ひきふね}中学二年生川越美年子さん(一七)が学校の帰途、うしろから無燈火の自転車できた二十歳ぐらの男に、追い抜きざま右ホオを木片のようなものでなでられたが、帰宅後、右ホオに長さ六センチ、五日間ぐらの傷を負わされているのを知った。

前年暮れ、同区向島須崎町一帯で、一夜に九人の女が顔を切られた事件を同一犯人の仕業と思われた。

同年十二月十七日、前年暮れから東京都江戸川区西部一帯で、九人の女性をキリで刺した犯人の少年松原勇吉(一七)が、小松川署に捕まった。松原は、同年十一月夜、同区逆井一ノ三三付近路上で、同町一ノ三六、無職斎藤操さん(三三)を、自転車ですれ違いざま、長さ十センチの電気工事用キリで右下腹部を突き刺し、二週間の傷を負わせたほか、わかっただけでも九件の傷害を行なっていたというから、ひどいものである。

満員電車の中のスカート切り

三十一年四月二十九日夜、東京都台東区内で、連続二件のホオ切りが現われた。同夜七時二十分ごろ、台東区金杉上町九三、和洋女子大付属高校一年生坂井順子さん(一五)は、帰宅の途中、自宅前の路上で、うしろからきた十七、八歳学、生服を着た高校生らしい男に、突然、カミソリのようなもので、左ホオを切られ、全治十日間の傷を負わされた。

また、その現場から一キロ離れた同区金杉下町一〇一先で、同区三輪町八一、区立下谷中学校三年生柴田勝代さん(一四)が、同様、自転車で乗ってきた学生風の男に左ホオを切られた。

二十三日午後三時ごろ、上野鉄道公安室に、埼玉県浦和市北浦和五ノ一二九、会社員筒山淑子さん(三四)が、

「けさ、京浜東北線北浦和から赤羽間でスカートを切られた」

と届け出た。調べによると、淑子さんは、同日午前七時半ごろ、北

浦和駅から電車に乗り、飯田橋の勤め先にいったところ、

「スカートが切れている」

といわれて届け出たもので、スカートは、右大腿部近くから左へ十三・五センチ切れ、スリッパも五センチ切れていた。

淑子さんの話では、電車が赤羽駅付近で非常に混雑したとき、隣にいた、小柄の、ヤミ屋風の男がいたずららしいといっていた。

なお赤羽―大宮間で、三月二十九日午後六時ごろ、埼玉県北足立郡会社員下村くに子さん(一八)が、右大腿部を切られ、全治十日間の傷を負ったほか、モモ切り事件が頻発していた。

同年九月十六日午後五時五十分ごろ、東京駅三番線ホームで、世田谷区経堂町一七八、立大生桑原園枝さん（二二）が、京浜線大宮行き
の電車から降りようとした十七、八歳、高校生風の少年に安全カミソ
リの刃で太モモを切られ、全治十日間の傷を負った。

桑原さんの話によると、電車が停まり、多勢の客に押されて降りよ
うとしたとき、足のあたりにズキッと痛みを感じたので、ふり返る
と、五尺三寸ぐらい、黒い学生服を着た少年がいた。そのときは気づ
かなかったが、降りてはじめてスカートが切られているのを知ったと
いうことである。また、犯人と思われる少年は、下車せず、そのまま
いつてしまったという。

同月二十八日午前七時十分ごろ、国電品川駅で、京浜東北線、桜木
町発、赤羽行き電車から降りようとした、東京都大田区新井宿三ノ一
三二四、東京女学館中等部三年生佐藤和子さん（一四）と、同区山王
二ノ一七八三、山口富美子（一四）の二人は、何者かにスカートの
上からカミソリのようなもので切られ、佐藤さんは左モモに長さ五セン
チ、深さ〇・五センチ、山口さんは左腰に長さ七センチ、深さ一セン
チ、ともに全治一週間の傷を受けた。同時刻は、大混雑のラッシュ時
であり、二人は犯人に全然気がつかなかったという。

同年十二月二十五日午前八時三十分ごろ、総武線秋葉原駅で、東京
江東区深川南砂町一、事務員藤生容子さん（二四）が、オーバーを切
られ、そのそばにいた同区南砂町三、中学生村田常夫（一五）とい
い争っているのを、警乗中の万世橋署員がみつけ、容子さんが、

「この少年がたしかに切った」

との申し立てに、田村を本署に連行、取り調べたところ、翌二十六
日になって、同線内のスカート切りを自供した。

風俗奇譚 夏の臨時増刊

5月10日発売
価 二八〇円

変態性欲犯罪特集と世界残酷物語特集の話題版

それによると、同年十月三十一日午前八時ごろ、同線の車中で、千
葉市山田町五、美容師津村はる子さん（一九）のオーバーの上からカ
ミソリでスカートを切って一週間の傷を負わせたのがはじまりで、十
一月一日、同十六日、同二十六日、十二月二日と、同三日、同二十五
日の容子さんまで、合計七件、若い女性ばかりをねらって、スカート
やオーバーを切っていたという。村田は、女の下着がみえたり、驚く
女の様子にこのうえなく興味があったといっており、そのいずれの犯
行も通学途中での仕業であった。

以上終戦後の混乱期が、一応落ちつきかけたところから、世相がすつ
かり安定した七年間の、女の肉体切りの犯行を網羅したが、これらの
犯人は、捕まったのもあれば、いまだに逮捕されずに迷宮入りしてい
るものもある。だが、これらの犯行のもとをなすものは、共通して、女
の驚き騒ぐ様子を見て興味を覚えたり、女の下着をのぞき、肌を切り
赤い血がにじみでるのに無上の興奮を感じる手合いで、いわば、フェ
チズムにサディズムが合併した変態性欲者であることには間違いな
い。同じフェチズムでも、女の下着を盗み集めたり、落ちている髪
の毛を集めたりするていのものに比べて、直接危害を加える点で、は
るかに凶暴性があり、危険・凶悪と言わざるを得ない。通り魔は防ぎ
ようはないとはいふものの、こうした変質者は、やはり、未然に予防
する方法を講じてもらいたいものである。

フェチシズムの源泉は嗅覚

湯 浅 重 二

(地) 地球上のかなり広い地域で、現在もなお鼻キッスが行なわれている。ビルマ人のあいだでは、「キッスして」という代わり「においをかがせて」といっているくらいだ。

鼻あいさつの意味は、互いのかき合いである。そして、頬キッスにしろ、唇キッスにしろ、いや、もっとも強烈なキッスであるクンニリングスにしろ、キッスはすべてにおいをかぐこと、相手のにおいを吸い込みたいという希望である、と説く学者さえいるくらいだ。

たしかに、味の無いにおいはあっても、においの無い味というものはない。ということは、キッスが、嗅覚フェチシズムから出ていることを意味する。つまり、かき合うという動物界の風習が、人間にキッスを贈ったといってもいいのではなからうか。

そして、かぐことが、性愛の基本であるということを、無意識のうちに確認した表われがキッスだといってもいいのではないだろうか。

(女) の髪の毛の香気秘密をさぐったものが頭髪フェチシズムの傾向をもち、衣料を集めるフェチシズムも同様に、それに染みこんだ女の体臭をかきとろうとする嗅覚フェチシズムなのである。なぜなら、頭髮や衣料に含まれているにおいは、倒錯性欲を生み出すからである。

ワキガに異常な興奮を覚えるフェチシストがいる。ワキガの、ふつうの人にとっては耐えがたい悪臭が、彼らにとっては、またとない快美なものなのだ。だから、恋をしている女は、相手の恋人から、その腋窩のにおいを浸みこませたリングゴを食べさせられると、どこまでもその恋人についてゆ

かねばならないというメックレンブルグの迷信さえ、根づよく守られることになるのである。

だがこれは、迷信として片づけるより、腋窩フェチシズムの一種として見たほうが、納得できるのではなからうか。

(人) 間の嗅官や嗅覚は、その役割りが退化している。だが、人間の嗅覚が、ある倒錯性欲と結びついていることを看過してはならないだろう。

だから、クンニリングスが、においの刺激にもとづいていることが認められるのである。

そしてこの倒錯性欲は、愛の文化として古い歴史をもっている。

確かにクンニリングスは、根本において毛髪フェチシズムによるのであるが、それはまた、嗅覚によってつちかわれたというべきである。

そこで大胆に結論を下せば、すべてのフェチシズムの根源は、においであると言えるだろう。人間特有の、そして民族や人種特有のにおいが、フェチシズムを誘発しているのである。

いじめてください、打ってください——と女性に頼む男がいる。いじめられてこそ生き甲斐を感じる彼らの偽らぬ心情を吐露した手紙を紹介しよう。

谷 貫 太

マゾヒストの手紙から

前号に、ドイツのザッヘル・マゾッホ教授の書いたといわれている幾つかの手紙が掲載されておりましたが、現代の日本にも、こういう手紙の実例は少なくありません。私は、たまたま手もとに幾通かの、同様な手紙を持っています。これは、私の収集品の一部であるもので、発信者受信者のいずれか片方から、発表を許されているものばかりです。ですから、この中に出て来る固有名詞は、もちろん原文とは違いますが、発信者や受信者の職業、年齢などは、正しいものです。とくに文章は、一切省略はしてありません。

これらのほかに、多くの手紙がありますが、今回は、とくに、その中から、被虐的傾向のある男性から、加虐的傾向のある女性に対して発信されたものを引用しました。

(手紙の二) 私はあなたの忠実な犬です

発信者は三十七歳、東京都杉並区在住の歯科医師、健康。

三十五歳で結婚、一女あり。家系になんらの異常なし。高等教育をうけ、成績は平凡だが、とくに歯科を専攻した。開業して、現在までに二年経過し、患者からの評判も悪くない。本籍は東京都、中産階級としてはかなり富裕のほうである。

受信者は、高等女学校卒業、東京都北区在住、二十八歳、無職、未婚、家族と同居中。父を昭和三十一年に失ったが暮らしむきは悪くない。本籍は東京都、係累に異常なし。

「先日は、思いがけない楽しい時間を過ごさせていただいて、心からお礼を申し上げたい一念に駆られ、このお手紙を差し上げます。もしこのお手紙が無礼であるとお叱りをこうむるならば、お約束の次回にその償いをさせていただきます。

今度お目に掛かるときは、私がこれから書きますように、十分にお楽しみくださるようなお膳立てをさせていただきたいと思えます。

そして、前回申し上げたように、決してあなた様の裸身を見たり、



手を触れたいなどとは申しません。あれは、匹夫の誤りでした。おっしゃるように、気高い方は、どのようなお姿でも、十分に尊く感じられるものでした。

私は、これまでに、経験が乏しかったために、あのような楽しみを普通の情事と混同しておりました。なるほど、ああやって、肉体の一部さえ接触せずとも、私などには勿体ないくらいもったいないのよろこびを味わうことが出来るということを知りました。

私は、妻が、和服を好むために、今まで洋装の女性に十分な時間のあいだ接することがありませんでした。したがって、あの華奢な細い靴のカカトが、お仕置きの道具として、どれほどの効果があるものかということに気づきませんでした。

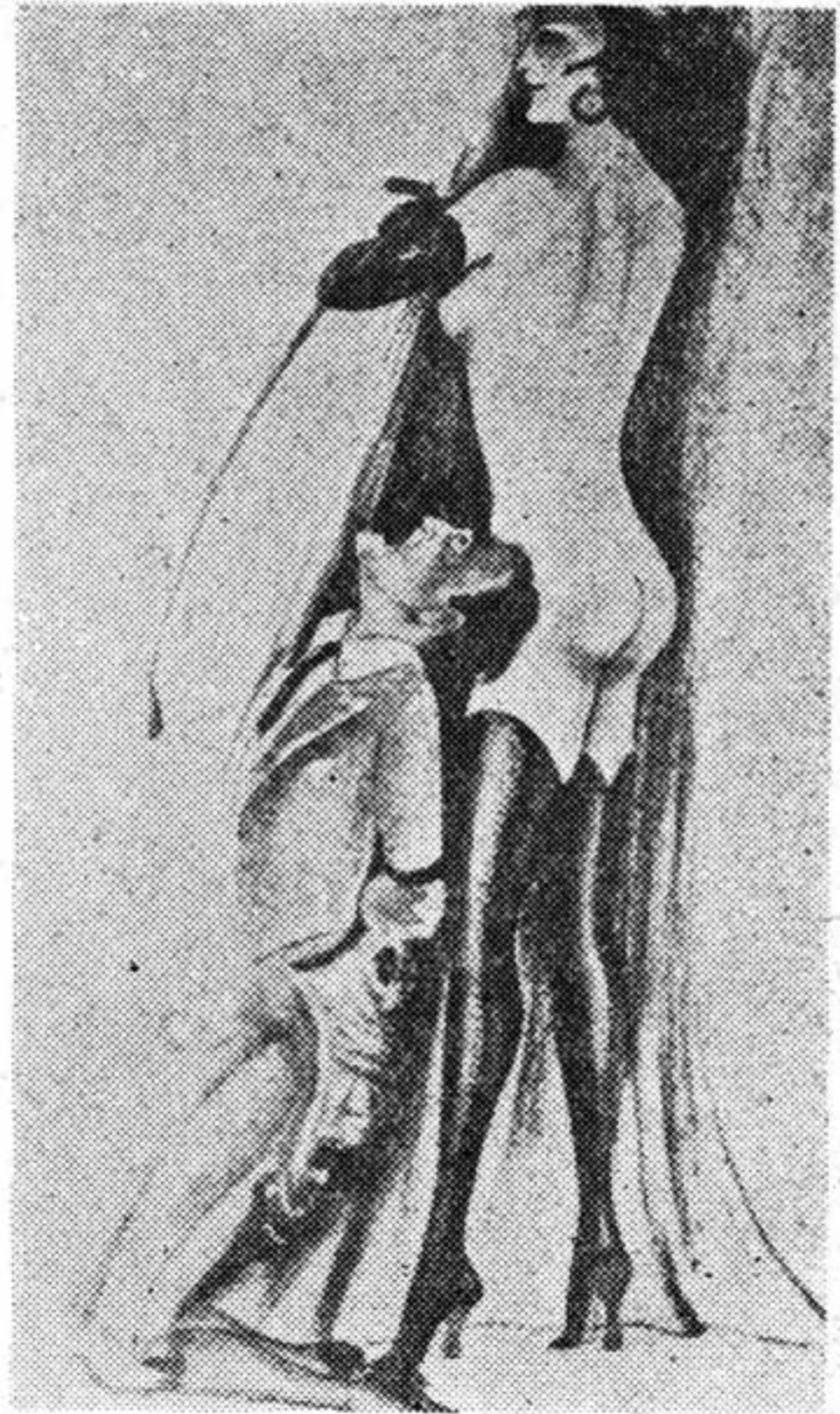
あなた様は決して、大づくりのほうではないのですが、あなたの体重が、あのカカトにかかる、その苦しみは、ちょうど、太いきりを揉み込まれるように、鋭く、激しゅうございました。このごろ流行のイタリアン・スタイルの靴の先端が、あのように激しい効果のあるものとは存じませんでした。

和服を着た女体のかくれた美しさでは、とうてい表現することのむずかしいと思われる、あの華やかな残忍さは、一度で私を酔わせてしまいました。高価なモヘアのオーバーの裾が、お歩きになるたびに、そつと、私の目に触れたのを思い出します。裾であるからこそ、あのような感触があるのでしょう。

這いつくばろうということの、考えてもみなかった屈辱感をも知りました。私の目の前には、ひろく床の上の敷き物がひろがり、その上を歩く、あなた様の脚の美しさは、たとえようもないくらいでした。今度お目に掛かるときには、私は、先に参っております。そして、先日、あなたからいただいた奴隷の服をまとして、地に這っておまち致します。その時の楽しい空想は、今から考えただけでも、ゾットいたします。

扉のノブが、ガチャリと回って、まっ黒いスラックスと、金色の靴が見えるでしょう。

その時から、私の務めが始まるのです。私に命ずるのは、言葉でなく、あなたの足蹴と、お持ちになると約束してくださった犬のムチだけなのです。きっと、それは、大きなグレイハウンドや、ブルドッグをこらしめるために作った、痛みのはげしいものでしょう。それに、お怒りの程度によって、きっと、その音も激しく大きいでしょう。



私の身体が、その痛みに耐えることが出来るかどうか、もし、耐えることが出来ずに呻き声を出したりした時は、呻きの出なくなるまでムチをふってください。そうしないと、私の思い上がった対等の観念は、消えないでしょうから。

私が、あなた様の前では、奴隷や、犬や馬のように従順でいなければならぬこと。あなた様の身体からほとばしるお小水や、お糞も、命ぜられるままになめ、くらわねばならないこと、どのようにに恥ずかしいことをも忍ばねばならないことを教え込んでください。私は、あなたのムチの唸りの下で、どんなことでも致します。

私の舌が、普通の男たちより長く、そのうえ器用なことをもお忘れないようにお願いいたします。舌は、どんなものよりもきれいに、お身体を淨めます。あなたのお顔から靴の裏まで、どこにでも使えるの

です。

私にとって、あなた様のお小水で淨められる日は、法悦に浸る日でもあります。どうか、この次には、私へのお仕置きや恥ずかしめに、手心をお加えになりませんように。

あなたの忠実な犬より

私の支配者たる方に。

この手紙は、犬や馬の名をあげてはいても、その実、恥ずかしめの方法として並べただけで、一番大切な、注目すべき点は、排泄物に対する激しい崇拜であると思われます。次に掲げる手紙は、違った形でのマゾヒズムを示しています。

(手紙の二) 私はあなたの馬になりたい

発信者は三十五歳、川崎市在住、自家営業者。健康。二十六歳で結婚、昨年妻と死別、子供なし。家系に異常なけれども、妹に先天的ヒステリー性症状を認む。高等工業卒、成績首位。周囲に親友なく、人づき合い無し。趣味としてラジオ製作。本籍は東京都、資産とくになし。

受信者は二十三歳、身許不明確の某女。女学校卒、長崎県人というも不詳。先天的に異常なけれども、環境によって、男性憎悪の念が激しい。現在、横浜市に在住。経歴中、客商売あり。金銭欲に富み、勤勉なれども、身の回りは整頓せず。姻戚に異常体格者ありという。独身独居中ながら男友達多し。現在某ナイト・クラブのホス

テス。係累多し。

「僕は、あなたを、どうしても気高い方だとは思えないのです。あなたは、どう見ても、水商売をやっている女性としか見えないのだから。そのあなたが、馬に乗るのが好きだときいて、僕は正直おどろいた。乗馬のような貴族的な遊びとは全く縁のないような顔をしているのだと僕は思った。」

しかし、僕を無理矢理に乗馬クラブへ連れて行って、君が、スラッとした乗馬服に着換え、細いムチを手にして出て来たときに、僕は、君を見直したことを告白しないわけにゆかない。

ひき出した逞しい馬にまたがって、君が思いがけないほどの激しさで、馬の腹を蹴ったとき、馬はビクッと腹をけいれんさせた。その感じやすい腹に、もう一度、手綱をひきしぼりながら、君が、残酷に拍車を蹴込みながら、僕のほうを見て笑ったのを覚えている。それに、

『もう二、三時間したら、あなたも、こうされるのよ』

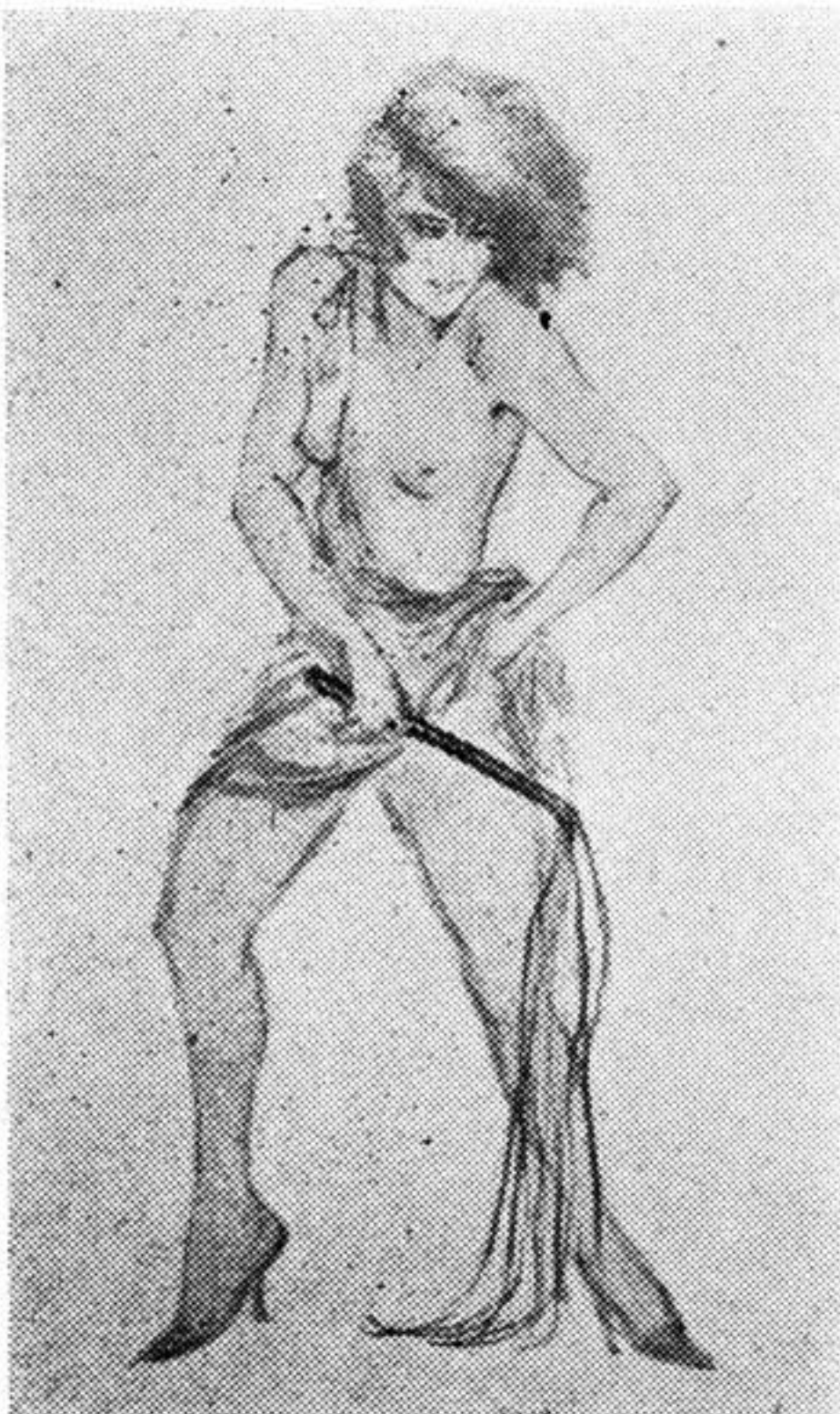
といいながら、振り上げたムチで馬のお尻を打った時の君は、忘れることが出来ない。

あれから、事実、僕は、君の乗馬靴の下で呻かされたけれど、あの長靴の冷っこい感触と一緒に、馬上で残忍そうに、満足そうな笑みを浮かべた君を忘れることが出来なくなってしまった。

今夜、僕は、独り寝の床で、あの時の君を思うと、情欲が湧いて来るのを感じて、どうにもならない。この前には、君を乗せるだけでは満足出来なかったけれど、今度は、きっと、それだけで満足を得ることが出来そうに思う。

今度は、もっと残酷に乗っておくれ、僕の心から、苦しみに対する抵抗をとりさってしまいうまで、調教してほしい。では、また会う日を楽しみに」

言葉はわざとぞんざいに書いているが、これは本物だ、と思わせるものが見られます。まず最初に、本当の馬を責めるのを見せた後に、男を馬にするというこの女性は、十分サド、マゾの体験者だということわかります。サド、マゾともに、直接の残虐行為に粉飾された休憩や、心理の上での期待を考えないでは、十分な結果は得にくいものです。それを、チャンとのみ込んでいるこの女性は、さすがと思われましますし、それをまた、従順にうけ入れた男も、先天的にマゾヒストであるのでしょうか。



(その返信) 同じ趣味の娘を紹介するわ

「昨日の晩、あなたの手紙が届いてびっくりしました。まさか、手紙をよこすとは思っていなかったの。

でも、読んでみて、このあいだ会ったときに言ったことが本当だったことがわかりました。ですから、手紙を出したということは、結果的にみてよかったです。

しかし、はたの目もあることです。あまりたびたび出さないでください。もし間違つて開封されると困りますし、男の人からの手紙がしょっちゅう来ると、変な目でみられるのです。

私は、毎週水曜日の午後と、土曜日の午前中に、馬場にゆきます。あそこには、ほかに大勢、娘さんや奥さんが馬に乗りに来ます。私の一番仲のよい、ある娘さんが、水曜と土曜に来るので、時間をあわせてゆくように、なつてしまいました。今後、あなたにも紹介しましょう。

私とあなたのつき合いの中に、若い娘さんが、もう一人加わったところで、別に断わる理由もないでしょうし、全然第三者の異性に、恥ずかしい格好をじつと見つめられるのもよい趣向だと思いませんか。だから、ごく近いうちに、私は、あなたを紹介するつもりです。そして出来れば、その日に、彼女に面白い見世物を見せてやってもよいと思っています。

存外、彼女のほうが、私よりひどい責め手かも知れません。彼女の乗り方をみていて、私には、そんな気がするのです。

では、約束の日を間違えないように。いずれまた。暇をみて返事のつづきを書きましょう。

それから、今後は、封筒の裏書は女名前にすること、忘れないでください」

(返信の二) 厚い皮膚も破れて血が

「昨日、水曜日なので、私は、この前の手紙に書いたお友達と一緒に馬場にゆきました。少し小雨勝ちでしたが、かえって、そのくらいの時のほうが、ホコリが立たず、気持ちよく乗れるものです。

私たちは、一時間半ぐらい、つづけて馬を責めました。私は、あなたが来るかと心待ちしていました。が、来なかった、残念でした。私よりも、一緒に乗っていた、若く、美しく、残忍な娘さんを見せあげたかったのに。

昨日、彼女は、純白のキュロットに、焦茶色の長靴をはき、細く長い枝のついた拍車をつけ、手には、しなやかな革で細く編んだムチを持っていました。

栗色に近い美しい長い髪をなびかせて、彼女は、二十三回も、同じ障害を跳ばせたのです。停止すると、彼女は、全く思いやりのない冷酷なやり方で、馬を懲らしめました。

明るい栗毛の馬は、汗ばんで、じつとりと全身が黒く光っていました。お尻に近いところには、彼女が当てたムチの痕が、ウネウネとはつきり見えました。

お腹には、彼女があまり激しく拍車を使ったために、さしも厚い皮



膚が破れて、血が出ていましたが、それでも構わずに、まだ蹴りつづけられたので、お腹の一部がよじれていました。

その血は、ピカピカにみがいて来た彼女の靴のカカトにベツトリとついていましたが、この美しい娘さんは、そんなことはお構いなしで、意志に従わない馬を、いかに服従させるかだけを考えているようでした。

帰りに、彼女は私にききました。『このあいだ、あなたのおっしゃったオカシナ男に会ってみたい気がして来ましたわ。今日白嶺（馬の

名）を懲らしめている時に、フツと思いついたわ。おかしいわね。なぜかしら。急に、会ってみたいくなっちゃうなんて!』
——だから、私はわざわざ、この手紙を書いたのです。よく考えて、この次には、必ずややって来てください」

（手紙の三） あなたの長靴姿が忘れられぬ

次の手紙は、もっと端的です。発信者は四十歳、中央区在住、自由業、病的な短身。妻帯者。一児を三年半前に失い、目下、妻は肺結核で療養中。精神病的遺伝なし。大学の法科卒、成績中くらい。人つき合いよく、楽天的。経済的困窮の前歴あるも、現在では中産階級に属す。本籍は仙台市。

受信者は三十一歳で群馬県生まれ。兄弟姉妹各一人、両親健在、家系に一切異常なし。現在は、豊島区在住、快活、かつ商業的才能あり、情欲旺盛にして、男関係多し。未婚、かつて内縁関係あり。現在、某扇子問屋に勤務中。

「私は、もう忘れることが出来ません。真っ黒い光沢のあるコルセットをつけ、薄くすけてみえるストッキングをつけ、幅ひろい帽子をつけて、手袋と編み上げ長靴をはいたあなたの姿が、脳裡にやきついてしまいました。

ちよっと考えると、そんな扮装はコッケイかも知れないのですが、私には、実に魅力的でした。外国の本や、雑誌には、時々そんな姿の

女性を見つけることがあります、実物として見たのは、私には、初めてです。

そのうえ、あなたは、黒いサングラスをかけていたので、ちょっと異様な感じがしました。

でも、あの扮装が、私の異常な性感をどんなに刺激したことか。その一つ一つのアクセサリを私は撫回でし、なめたい衝動にかられました。でも、さすがにそれは出来ませんでした。あなたはチャンとそれを見抜いて、前もって二メートル以上離れているように命じたのですから。

でも、二メートルの距離は、決して私の喜びを妨げませんでした。今、お借りしたコルセットがここにあります。私はこれにさわっているだけで、どうにもしようのない気持ちになって来ます。

もう一度お目に掛かりたいのです。もし、いけなければ、写真を送ってください。これが私のお願いです」

(その返信) 鉄トゲのムチを用意しました

「女がぞんざいな口をきくのは、みっともないものです。けれど、女です、相手が、犬や馬や猫であるときには、コラとか、お前とかいう言葉を使います。もちろん、あなたのような男を相手にするときでもぞんざいな言葉は、決して不自然だとは思いません。もし、お前が、この手紙に腹を立てたり、不満を持ったりするとすれば、それは、お前の心掛けの悪さにかかっているのだと思い知りなさい。私のムチはこの前より激しく、酷い意地悪い方法で、お前の耐えることの出来ない

不潔なところを懲らしめます。

私は、この次には、お前に、もっと厳しい女主人であるように心掛けています。私の靴の下でモゾモゾとうごめいている、けだもののような男を、私の脚が感じ、私の手に握られた、わずかに一メートルの革の紐が、お前に、この世のものとは思えないような悲鳴をあげさせるたびに、私の手が感じるような、異様感覚を、十分に味わいたいものだと思っています。

そのうえ、もし、ふつうの革ムチが、お前に十分な仕置きを完遂出来ないときのことを考えて、私は、自分で、犬用のムチに鉄の刺を編み込んだ新しいムチを持ってゆきましょう。そのムチが、お前の恥ずかし気もない背中に、ポツポツと血の斑点をつけたときに、私は、お前が、どんなにみっともないことをするか想像するだけで、楽しいのです。

もし、お前が、それでも、十分に考えを通すことが出来ないかも知れないことを考えて、私は、乗馬の時に使う拍車を、といておきましょう。小さな砥石でみがき立てた拍車の刺が、やわらかい脇腹にくい込んでしまうと、きつとお前は、身をもがき、喘ぐでしょう。そのうえ、拍車で責めることは、お前の体温を直接、私の内股に感じることもあるのです。

私の股の下でビクビクしながら、責め苦にふるえる男を感じることは、人間馬に乗る最大のよろこびの一つでもあるのです。

書いているうちに、私は妄想してしまいます。その夜の、目の覚めるような異様な光景を考えるだけで、身体中を熱いものが通りすぎてゆくのです。このつつきは、会ってから話します。話しながら、私は

試してみましよう。ではまた」

以上を示されるように、この種の手紙は多く、行為の代償となるのです。実地にやってみて、決して面白くないと思われる形や行為を綿と書いてあるということは、十分に注意されてよいことです。たとえば、馬にまたがったときには、ちょうど靴のカカトが、馬の腹部に来るようになっていますが、人間の場合には、ヒザでさえ、腹より下に来てしまい、よほど、乗る方が小さくて、下になるほうの人が大きくても、爪先が床につかえてしまうものです。

写真撮影などの時には、それでも、一応ゴマカシがききますが、実際行為には、むしろ、乗っているほうが不自然なポーズのために、苦しいものです。

このように、手紙の中に現われる言葉には、実際行為で不可能なことを想像でまぎらわすような傾向があります。私たちは、もし、このような手紙のやりとりをする時でも、相手の実際の希望と、言葉の遊びとを、よくかみわけねばなりません。

ひどい例として、こういうのがあります。

まず、男のほうから女にあてて、

「私がお部屋に入ったら、すぐお始めください。どんなことにでも服従します。もし、お気に入らなければ、ローソクの火で、私を焼いてください。電気アイロンをお尻に当てられても、我慢いたします。」

ムチには、どうか、長さ一センチ以上の鋭い刺をうえつけておい

てください、幅のひろい皮バンドの内側に刺をうえたものを締めさせて、地べたに転がしてください(以下略)」

この手紙を貰ったS女は、最初に会った瞬間から、まず、皮ベルトで彼を打ちのめした。ところが電気アイロンをお尻にあてられたいはずの男は、細い女持ちのベルトで打たれただけで、勘弁してくれというのです。

その男から、相会の後に女にあてた手紙が、その事情をよく説明しています。

「大変申しわけないのですが、私が想像していた苦痛より、あまりひどい痛さで、おどろきました。この次からは、あなたがお飼いになっている犬を可愛がるように可愛がってください。よほどひどい悪さをした時以外は、ムチをお使いにならないでください。(以下略)」

彼は、想像で、熱いやきごてや、刺のうえてあるムチを、ロマンチックに夢みていたわけです。結局、この人は、直接行為よりも、そういう光景を見たり、そういうことをきいたりすることが、一番好ましかったわけです。

私の手もとには、ほかにもいろいろな手紙があります。けれど、その大部分には、性器の直接的な呼び名や、ワイザツな——つまり、エロそのものの——言葉が出て来ます。そのうえ、そういう部分を抜かすと、全く意味のない文章になってしまうのです。その中から、比較的わかりやすく、直接的な表現の少ないものを、次の機会に、また、おしらせいたします。

ハイマジナリイ体験記V

浣腸に魅入られた女

鵜

藤

恵



白い女の顔

八月も半ばを過ぎた蒸暑い土曜日の夜、私は不思議な体験をした。

その日私は、下宿の二階四畳半の暑さに耐えかねて、二百メートルほど先を流れる吉中川の橋の上の涼しいことを思いついた。

ワイシャツ一枚の姿で、橋の欄干にもたれて立つと、微風がそよぎ、そこは予想以上に涼しく、下宿の狭い四畳半とは雲泥の相違だった。私は、しばらくそこにたたずみ、微風に熱っぽい肌をなぶらしていた。

時刻はすでに十時半を過ぎていたのに、そこには、多種多様な人間が、鮮やかな色彩のネオンの映える川面を見つめていた。

数十分もそんな格好で橋上にたたずんでいた後、暑さからの解放感からか、私は煙草を

吸いたくなつた。それを口にくわえた時、背後に人の近寄る気色を感じた。と同時に、私の肩にソツと手を掛けた者がある。

ふりむくと、二十二、三歳の、透きとおるように白い肌の女の顔がそこにあった。

女は、媚びを含んだ目で私を見つめ、婉然と微笑みかけると、こう言った。

「ねえ、火を借してくれない？」

私は無言で、女の指し出す煙草にライター火を近づけた。女は、それを一服吸うと、私の身体にピタッと寄り添った。私は、真実ドキッとした。そして、女がシロウトでないことを直感した。

蒼い舗道

私の思ったとおり、女は娼婦だった。

売春防止法が数年前に執行されて以来、私たちの客引きは、次第に巧みになり、露骨にそれとわかるような行為はしなくなった。

この女も例外ではない、まず煙草の火を要求して、それとなく私服か否かを確認する。私服でないかわかると、肝要な商談？に入っていく。この女の最初の質問はこうだった。

「一人なの？」

すでにそれと見抜いた私は、女の問いに對

して直接的な応答はしなかった。

「幾らだい？」

「エッ、アッ、アラ、気早いのね」

不思議なことにそう答える女の表情に、濃い恥じらいの色を覚えた。それは直接、この女の、この職業の経験の未熟なことを教えていた。細い右手にタマゴ色のハンドバッグを持ち、自分の身体にピッタリ寄り添った女の身体から、この種の女からは感じられないにおいを感じた。

私の脳裏に、ある一ツの実験がうかんだのは、その時である。

「少し、歩かないか」

私は、煙草の煙を大きく吐くと、こういった。

「ええ」

女は意外に従順だった。誘いかけた女のほうから、黙って客の言いなりになるのも奇妙だった。

たいていの娼婦には「ヒモ」と称する男が影のように、常に、情婦の身边をうかがっている。

もし、この清潔なおいを感じた女にも、「ヒモ」と称する男があったら、客の誘いに簡単に乗るはずがない。そのほとんどは、場

所を指定してくるものである。

私は川岸を選んで歩いた。他人目には、この一組のアベックが、仲のよい恋人同士に見えるだろう。この女を、誰が娼婦などと思うだろうか。

寄り添ってしばらく歩いているうちに、私は、女が、実際に数年来の恋人のように思えてきた。しかし、まだ油断は出来ない。美人局という手がある。が、この疑惑もやがて消えた。

川岸を右に折れると、俗にいう屋敷町がある。この近辺の地理に明かるい私は、女と寄り添ってそこを曲がった。この道は、およそ四百メートルほどの長さであり、道の中央には種々の幼樹が樹立している。

その道を三分の二ほど歩いただろうか。私は、自分たちの歩いて来た道をふり返って見た。時刻は、すでに十一時を過ぎている。繁華街と違って、通行人はもろろん、尾行者らしい人影もない。ただ、視野に入るものは月光に映えた蒼い舗道だけであった。これで美人局の疑念は消えた。

それまで、無言で歩いていた女が、それを機に私にきいた。

「ねえ、どこまで行くの？」

「ウン、もうすぐ、そこだよ」

「……………」

女は黙ってうつ向いた。不思議な娼婦である。こうして一緒に歩いていても、不潔な感情は全然湧いてこなかった。

二人の靴音だけが、蒼い舗道に、高く響いた。

赤い乳房

簡易ホテルの門をくぐる時も、玄関から女中に案内されて、指定された部屋に行く途中も、女はしじゅう恥ずかしそうにうつ向いていた。その態度は、とても故意にそうしているとは思えなかった。

女中が蒲団を敷いて部屋から去ってしまうと、初めて女が私に言った。

「お願いです。私の話を聞いてください」

そういう女の表情は、真剣だった。私はびつくりした。ここまで来て、女にこんな態度をとられるとは思わなかった。女の顔には、橋の上で最初に見せた、あの媚びを含んだ目は、すでになかった。

「なんだい？」

「……………」

「言ってごらん」

「私の話を聞いても、決して笑わないと約束してくれますか」

女はまえにも増した真剣な声で言った。私は、女の声と表情に威圧された。

「ウン、決して笑わないと約束するよ」

それを聞くと、女は安心したように語り出した。

「私は、一度結婚したことのある身です。結婚したのは去年の春でした。夫と一緒に一カ月ほどたったある夜、夫は私に、『美智代、裸になってごらん』と言うのです。私は、夫の突然な言葉に驚いて『いったい、急に、どうしたの？』と、ききました。すると夫は『いいから、黙って裸になって！』と、まるで命令するように言ったんです……………」

美智代は、過去に、夫から突然裸になれなと言われたことはなかった。明かるい電燈の下で、自分の肌を夫に見せるのは恥ずかしかった。しかし、美智代は夫を愛していた。

美智代が、パンティー一枚の裸になると、夫はそばに敷いてある蒲団を指さして、そこにうつ伏せに寝るようにいった。夫の言葉に従った美智代の裸の背が、電燈の光に白く輝いた。

その時、夫の手に、いつ用意したのか、ガラス製の流腸器が光輝したことを、美智代は夢にも知らなかった。

その手が、美智代の臀部にかかった。肛門に異様な異物感を覚えた時にはすでに遅く、冷たい液体は、美智代の体内に注入されていた。（後でわかったことだが、夫は流腸マニアだった。もちろん、美智代はその時、流腸愛好症という言葉は知らなかった）

その夜から夫は、毎夜、美智代に流腸した最初のころ、夫から流腸をかけられることを、美智代は極度に嫌悪した。そして、流腸のたびに、長いマツゲに涙を溜めて夫に哀願した。が、夫は許してはくれなかった。美智代が泣いて哀願すれば、かえって、夫の虐待心はあおりたてられるようだった。

毎夜、美智代は、羞恥のために頬を染めて白いシートにうつ伏せに寝た。冷たい液体が体内に注入されるのを意識しながら、真珠のような大粒の涙は、枕に染みだした。

ある夜、流腸が終わり、排泄した後、涙の目で夫にきいた。

「ねえ、あなた、私が嫌いになったの？」

夫は、美智代の涙に濡れた顔を見て、やさしく言った。

「嫌いになるわけがないじゃないか。どうしてそんなこと言うんだ」

「だって……。じゃあ、どうして私に浣腸するの？」

「美智代が可愛いからさ。可愛くてたまらないから、浣腸するんだ。憎くてするんじゃないよ」

その夜から美智代は、浣腸を受ける時、涙を流すことは、忘れたようにしなくなった。そればかりか、あんなに嫌悪した浣腸に、次第に興味をもっていく自分を感じた。

初めての浣腸プレイから、数カ月たったあの夜のことである。浣腸器の先端を、夫の手で肛門に挿入された瞬間、美智代は、過去にない、いいしれぬ快感を覚えた。グリセリン溶液が体内に充満し、四、五分の時間が経過した。来たるべきものは、当然、激しい排泄感だった。が、それさえも、その夜の美智代には、苦痛ではなく、快感以外の何ものものもなかった。

美智代は、夜を待つ女になった。

二人の浣腸プレイは、一段と激しさを加え、美智代の浣腸時の姿勢も変わった。それまでは、浣腸時の美智代はほとんど、うつ伏せに寝ていた。が、それからは、足を大きく開い

て、犬のように四ツン這いになり、ある時は赤ン坊がオムツをされる時のような恥ずかしい姿勢もとった。

四ツン這いになって浣腸を受ける時、美智代の胸の隆起は下を向いて、赤くなった。そして、その先端のケシ粒のような乳首は、興奮して小刻みに震えた。

ピンクのオムツカバー

そのころから二人は、種々の浣腸器の収集を初めた。苦心して収集したなかに、イルリガートルがあった。美智代はイルリガートルを見て、幼い日の自分を思い出した。

——私は、病院のベッドに仰臥していた。奇麗な看護婦さんが、寝ている私のズロースをやさしく脱がした。室の天井からは、イルリガートルが吊り下がっていた。（もちろん小さな私には、その器具が何に使用されるものかわからなかった）その下部に付いている長いゴム管を手にした看護婦さんが、私の裸の足を開いた。そして、私は看護婦さんに言われたとおり、お腹の力を抜いて、小さな口をあけた。イルリガートルと私の身体が、一本の長いゴム管で連結された。イルリガートルをジッと見つめていると、中の白い液体が

少しずつ減少していくのがよくわかった。浣腸が済むと看護婦さんは、私のお尻に便器を当てた。——

あの時の冷たい便器の感触が、美智代は不思議になつかしいと思った。

夫からイルリガートルで浣腸される時、美智代は、幼い日の自分に戻った。仰臥してパントリーを脱がされ、頭上のイルリガートルと自分の身体とが、長いゴム管によって連結されると、美智代は陶酔の呻きを洩らした。

浣腸が終わると、夫のしている前で、美智代は、恥ずかしい格好で便器に向かって排泄した。排泄の済んだ後は、かならずオムツを当てがわれた。そして、花模様のついたピンクのオムツ・カバーを、くびれた腰部にピッチリとはめて寝た。

浣腸液も、体内注入可能と思われるものは種々使用した。グリセリン溶液、薬用石鹼水はもちろん、水、微温湯、牛乳、ETC。

浣腸は、肉体的苦痛以上に、精神的苦痛が多だ。これは、周知の事実である。美智代は、みずからその屈辱を求めていった。そこに羞恥を求める女の姿があった。

美智代は、浣腸マゾヒストとなった自分を愛しく思った。

半年のあいだ、美智代は、夫と二人だけの秘密である浣腸プレイに没頭した。

が、翌年の春、三月、夫は、不慮の死を遂げた。

それから数カ月後、夫を失った悲しみに、浣腸の二字を忘れていた美智代だったが、日がたつにつれて、過去に経験した浣腸の快感が潮のように全身を襲ってくるのを感じた。

ある夜、美智代は、自分自身で浣腸することを覚えた。夫の遺品となった白いガラスの浣腸器を手にする時、過去の日の激しい快感を想起した。

仰臥してパンティーを脱ぎ、イルリガートルの長いゴム管の先端を、自分で肛門に挿入した瞬間、美智代は、ひとり歓喜の呻きをあげた。しかし、羞恥を求める美智代には、それは、長くは続かなかった。

なぜなら、夫の手によって浣腸されたときの羞恥の快感は、まったく湧いてこなかったから……。美智代はその快感にひたるには、他人の必要なことを知った。そして、そのために、異性を欲した。

「きょうから十日ほど前に、私は、自分一人で浣腸することに、我慢が出来なくなりまし

た。それで私は、一つの計画を思いついたのです。それは……もう、おわかりになったと思います。売春婦になりすまして、欲求を果たすことだったのです。そのために、身体を代償にすることは覚悟していました……」

女の話は終わった。

しなやかな手は、正座した膝に置かれていて。その手を眺めながら、私はきいた。

「それは、僕が初めてだったの？」

女は可愛らしくうなずいて言った。

「でも私は、あなたに声をかけるのが恐かったです。派手な服装をして、吸えもしない煙草を吸った時、身体が震えたのが、自分でもよくわかりました」

女は、話の途中、かたわらのハンドバッグを引き寄せて、細い指で蓋を開けた。そこには、ガラス製浣腸器とグリセリン溶液の瓶が奥深く収まっていた。

女の話聞き終わった時、私は、運命の神の悪戯に感謝せずにはいられなかった。

何を隠そう。この私も、その女と同様、熱烈な浣腸マニアの一人だったからだ。

白い頸を見せて正座している女に、私は自分の忌まわしい性癖のすべてを告白した。自分が浣腸マニアであり、サディストの血も流

れていることを――。

その夜、彼女は、私にすべてを許した。ピンクの小さなオシメ・カパーが、くびれた腰部にピッタリとはまっていたことは、彼女の話のとおりであった。

そして、例のガラス製浣腸器が、私の手によって大量のグリセリン溶液を吸い込んだことは、言うまでもない。

黄色い芳香

いま、美智代は、私の目の前に哀れた姿をさらしています。

あれから二カ月後、私たちは結婚しました。あの夜、彼女の告白を聞いたとき、私の心は決まりました。この女性こそ、生涯の伴侶にすべきだと……。

美智代は、現在の生活に満足しています。

グリセリン溶液から牛乳まで浣腸したことのある美智代にも、たった一ツだけ腹内に注入（といっているのかどうかわかりませんが）したことの無い「物」がありました。それをいま、美智代は、私の手で注入されようとしているのです。全裸で四ツん這いになった美智代の、フックラと盛り上がった双の乳房と白い臀が、寒さのために、ブルブル震えてい

ます。

私と美智代の最初の出会いが八月でした。あれから五カ月たった今は、一月中旬ですから、室内とはいえ、寒さのために震えても無理ありません。

いま、私の手には、自転車のキャリイポンプ（携帯空気入れ）が握られています。『ポンプ』といえば、美智代の体内に注入される『物』がおわかりになったと思います。そうです。液体ではなく空気だったのです。ポンプで美智代の体内に空気を注入するのです。自転車の空気入れですから、その先端は当然そのままでは使用出来ません。

そこで私は、浣腸に必要な^{しかん}嘴管を取り付けて、先端だけを改造しました。

その嘴管を私は、自分の唾液で濡らししました。なぜ、そんなことをするのか、浣腸マニアの皆様にはおわかりのことと思います。いうまでもありませんが、液体浣腸の場合ですと、浣腸器の先端はすでに薬液で濡れていますので、容易に挿入可能なワケです。

ところが、空気浣腸ですと、浣腸器の先端に、なんら液体が付着していませんので、被浣腸者は、嘴管を挿入されるさい、局所に痛みを覚えるワケです。ですから、液体浣腸同

様に、先端を濡らして挿入しやすいようにするので。

次に私は、四ツン這いになって、初めての空気浣腸を待機している美智代に、足を三センチほど開くように言いました。美智代は恥ずかしそうに足を開くと、長いマツゲの目を閉じました。

唾液で濡らした先端を挿入するとき、美智代の臀部はピクツと痙攣しました。空気が腹内に入っていくのが、判然とわかります。やがて、腹部が、まるで妊婦のように膨脹すると、それまで静かに空気を注入されていた美智代が、

「あーッ、あなた、もう許してッ」

と苦しそうに叫びました。私はすぐ、ポンプを抜き取ると、空気が体内から排出されるように、用意しておいた脱脂綿で、しっかりと押えたのです。

そして、脱脂綿を押えた指を、静かに肛門から離すと、美智代の体内の空気が、奇妙な音とともに、そこから勢いよく排出されます。適当に排出させて、また押えます。

排出↓遮断↓排出↓遮断↓を、数回くり返しました。美智代の肛門で、一種のオーケストラが演奏されているようなものです。

さすが、自分から羞恥を求める美智代も、限界を越えた屈辱に、身体全体を真っ赤に染めて、必死に許しを請うのです。

「あーッ、厭ッ、厭ッ、あなたッ、もう勘忍して」

四ツン這いになった美智代は、苦しうに涙の顔を向けて、身もだえています。私は、少々美智代が可哀想になり、今度は、その、押えた指を離すと、そこに、自分の顔を近づけました。

そこから排出される空気は、素晴らしい芳香をもって、私の顔に勢いよく当たります。そして、それは狭い室内に、次第に充満していくのです。

やがて、美智代が腹内の空気を排出し終わると、私は、その形よくくびれた腰に（股間といったほうが正しいかも知れませんが）ゴム製オムツ・カバーをかけるのです。小さく折りたたんだ脱脂綿をあてて……。

私と結婚後、美智代は、現在までに、一度もパンティーをはいていません。これからもパンティーの世話にはならないと、美智代は言っています。オムツ・カバーで一生を暮らすのですから。

八十七個の洗濯バサミ

星野 かおる

I

東の山の稜線^{りようせん}が明るくなったと思うと、まんまるい月が、その上端をのぞかせた。空いつぱいにうす雲がひろがっているせいか、星は見えない。さっきまで西空にかすかに見えていた宵の明星は、もう沈んでしまった。

ゴォーッ……遠い汽笛が、このように湿度^{しつど}の多い日は、南方の峠を越えてはつきり聞こえて来て、旅愁を誘う。ゴトゴトッ、ゴトゴトッという、鉄橋を渡るらしい音まで聞こえて来る。山陽本線まで一里半の道のりであった。

ポトリ！

熟れ切った桃の実が、紙のふくろごと木から落ちる音が、すぐ右手から聞こえて来る。コオロギ、キリギリスの鳴く声が、ひっきり

なしに聞こえる。それにカエルの大合唱。

いつもなら、おおらかな詩情を誘われる天地のその表情であった。いや、つい昨日の夕べ、この桃山で、夫の良一と並んで、手をのばしては桃をむしって食べ、西方の松木立の間に、陽がおちた夕空が朱色に染まっているのを眺めたばかりであった。

月明かりで藤子は、左の乳房にとまっている蚊の数を数えてみた。一、二、三、四——五匹である。右には四匹。この分だと、いま、藤子の身体を責めている蚊の総数は七、八十匹を下らないであろう。

藤子は、許される限り身体を上下にのたうたせてみた。ワーンという羽鳴りをひびかせて、とび立った蚊は、全体の三分の一にも足りない数であった。あとの蚊たちは、いずれも夢中になって血の饗宴にふけっているのだ。

あった。

藤子は考え込む。この蚊たちは、私の血を栄養にして育ち、そしてあの池に、水たまりに、卵を産む。その卵は、ボウフラになり、蚊になり、また産卵する。

「郷里へお前を連れて帰って、お前の身体が郷里の山や川と一体になるまで、お前を責めてみたい」

といった夫の言葉が思い出される。

いわば、この無数の蚊たちは、夫の故郷の山々が、私の身体を融合するために使わした大切な使節なんだわ。それぞれ小さい槍をふりかざして、この豊熟な桃園にハリツケられた非運な犠牲者に、ときならぬ馳走への歓喜を歌いながら……この七、八十匹の蚊が、満腹したからといって、藤子の救われる見込みはなかった。しこたま、御馳走を腹に収めた



蚊たちは、それぞれ酩酊^{めいて}して家路につくであろう。そして、おのおのの家族に、隣の友達に、この投げ出された私の体の豊満さを告げるであろう。そして、いま私をむさぼっている蚊の何倍かのべ数が、夜明けまでに、入れ代わり立ち代わり、私の女体を観賞するためにやって来るんだわ。

この、泥棒のいない山間の別天地にも、桃の甘味に誘い出された桃泥棒が、二度やって来た。藤子は、身体は自由にならなかったが、「泥棒！」

と叫んで、二度とも撃退したのだった。その時、心の奥底では、気も狂うばかりの痛みとかゆみの中で、夫の郷里の土に溶解しようとしている自分の体を、そのオオカミたちが女の叫び声を目当てに、襲撃し、賞味してくれるのを心待ちにしたのだった。

「夫と同じ郷里の人々が、自由にならぬ私の体を犯したのだ」

という口実は、たやすく藤子の良心をねむらせた。けれども、オオカミたちは、藤子の叫び声に逃げて行き、無数の小さい迫害者ばかりが、藤子をなぶり続けた。

藤子は、ボトリとおちた、さっきのくされ桃が気になった。私と同じ娼婦の心——その桃も、枝をはなれて大地に抱かれたのだ。

夫が、この四本の桃の木の根元にゆわえた縄で、私を大の字に地面にハリツケて、身体を求めたのは二時間前だった。

「今夜こそ、君は妊娠する。桃太郎のように元気な子供を産んで欲しい」

夫は、あえぎあえぎそう言った。恐らく、夜明けまでに、もう三度は来るであろう。そして、私を責め立てている小さい虫たちにそのかさされて、私を、カツラの枝で打ち、ふみにじるであろう。

藤子は、女に与えられた不思議な直感で、今夜、自分が妊娠することを知っていた。夜が明けるころ、半ば失神して、夫の肩にかつがれて、この桃山を下山する自分は今もう、いつも夢に見る孕み女なんだわ。

「君が孕んだら、半吊りにして眺められる。楽しみだ」

夫の良一は、よくそう言った。

藤子は、何も恐いものはなかった。分娩の苦痛も、あのムチで血ぬられた結婚式に比べれば、物の数ではないであろう。

藤子は、ただ夫のなすがままにまかせればよいことを知っていた。七、八十匹の蚊たちに愛撫され、むさぼられる女の冥利をさえ、心の奥底で感じるのだった。

けれども、今は助勢を得て百匹を越したであらう蚊の大軍は、藤子のその心の奥底にまで槍先をさし込んで来るのであった。身体の前면에熱湯をかけられたような疼痛が、藤子の背に、あの血の結婚式につけられた、幾条ものムチ跡の痛みを呼びさますのだった。

首にも縄が回っていた。左右に動かすことを許された藤子の豊かな黒髪も、今はすっかり泥にまみれてしまった。全身を焼かれ、ゆがめられた唇にも、マブタにも、蚊は容赦なく襲いかかって来た。

かがみ餅に生えたカビを手で撫でると、一面に青黒い表皮がむける。私の身体はいま、カビが生えたように、一面に赤黒い蚊の表皮でおおわれているんだと、藤子は、愕然と気づく。いま、板で私のお腹をパーンと叩くと、お腹は、血で真っ赤に染まるだろう。「今夜は、私は子を孕むのよ。殺さないで。もうかんにんして」

蚊の集団を、一つの生きもののよう感じて、藤子は、それに訴え、子供のように泣いて、

た。その涙でぬれた頬と、投げ出されてひくひくとけいれんする女の肢体を、月光は、非情な色に染めた。

II

風が吹いて、窓のところまで枝をのばしたイチヨウの葉が、さかんに散っているらしいが、藤子には、何も見えなかった。色あせて少し茶色になりかかった緑色のカーテンが、窓をすっかりおおいかくしているからだ。

夫の良一は、近くの名曲喫茶の店で、好きなメンデルスゾーンかチャイコフスキーに聞き入っていることだろう。

藤子は、すわらされた回転椅子を回そうとしたが、縄がひっかかって、少ししか回らなかった。椅子自身、後ろの机にしっかりとゆわえてあったので、椅子もろとも倒れることなど出来ない相談であった。

この椅子は、良一と結婚したばかりのある日、近くの古道具屋で「お買徳品」として購入したものであった。藤子の長い髪も、椅子の背にしっかりと結びつけられていたが、目だけ動かして、室内のあれこれが眺められた。天井のあの板をはずせば、丈夫な梁に滑車がしっかりと固定されている。それを知って

いるものは、自分と夫の二人だけ……。結婚して九カ月、あの滑車から逆吊りにされた回数だけでも、もう二十二回にもなる。

東西の壁に向き合ってかかっているセザンヌとチチアンの額をはずせば、丸い鉄輪が釘で打ち込んである。両手をひろげ、つま先立ちに部屋の真中にハリツケられた回数は、逆吊りの回数の倍にもなるうか。

テレビの上に、ガス風呂の横に、電気ストーブの中に、中世時代の陰惨な空気が翼をひろげ、赤い口をあけてカラカラと笑っていた。

喫茶店まで歩いて七、八分、途中、古本屋に寄って行ったとすると、約二十分である。メンデルスゾーンが、始まったばかりであろう。そして、夫はゆうゆうと回り通をする。

この郊外の澄み切った月を眺めながら……。いずれにしても藤子は、あと三時間半は、この体に食い込む無数の魔の牙から解放される見込みはなかった。

夫は、帰って来てもすぐさま藤子を苦痛から救ってくれはしなかった。まず、涙でぐっしょりぬれた猿グツワをはずして、その口に長いキス。それから、ゆっくりと一つ一つの小さい牙をはずしてくれるのだった。いま藤子の裸身に食い込んでいるこのアルミ製の

牙は、合計八十七個に上る。それらはおのの殊勝な表情で、自分に与えられた乳房を、耳たぶを、ふくらはぎを、ズキンズキンと責め立てている。とりわけ堪えられないのは、両鼻孔をわかつ薄い肉片に左右からかみついている一個であった。

——この部屋をこっそりのぞいたものがあるとしよう。アメリカ映画に「私は死にたくない」という死刑映画があったが、この部屋は、まさにその死刑室であった。回転椅子にスーザン・ヘイワードよろしく、一人の女が両腕かけに腕を縛りつけられている。細引きは、さらに首、胸、ウェスト、ひざ小僧、足首に。こうして、全く身動きも出来ないその女囚は、きびしい猿グツワの下から、聞きとれぬうめき声をあげている。

ただ、スーザンと違ってこの女——藤子は一糸まとわぬ全裸であるが、厳密には、この言葉は当てはまらない。その真っ白い均斉のとれた身体のあるゆる部分に、アルミ製の洗濯ばさみがむごたらしく食い込んでいのである。

この、見てはならない部屋をのぞき込んだ者も、きびしいまいめの中で、許される限り、絶えず身体を蠕動して苦痛と孤独に堪え

ているその女囚の目にふれて、ハッとす。やがて、大粒の涙が溢れて来るその全眼にはいい知れぬ法悦の輝きがたたえられているからである。

しつような痛みを全身にむかえながら、藤子は、あの三角山の結婚式を思い出す。良一は、藤子を、その人気のない山頂に連れ出し、木の枝に縛って、気を失うまでムチ打ったものだった。

「もう傷跡が残ってもよい。僕は君をストリッパーとして働かすまいという自分自身の決心のために、君の身体を傷つけるんだ」

といいながら、くり返しくり返し、藤子の全身を打ちのめしたものだ。

うなずきながら藤子は、その激しいムチがパレースク劇場で一しよに働く数人の男に犯されたことを知っている夫の良一のしつと炎であることを知っていた。二度にうなずいたまま藤子は、頭を上げなかった。

意識を取り戻したのは、湖畔の砂の上だった。

「もう許してくれる？」

血のにじんだほうたいに巻かれたまま藤子は、必死に良一の愛を乞うた。その時のムチも、桃山で打たれたカツラの枝も、いま思え

ば、激烈で爽快でさえあった。いま、この全身に食い込む陰性の、ジメジメした苦しみに比べれば……。

藤子は、しかし、その小さい魔牙を限りなく愛した。夫の不在のとき、それらを収めた小箱からそと取り出して、唇を当ててみるのだった。

「お前たち、そんなに私の身体をむさぼりたいの。いいわ、食べたいだけ、食べるといいわ。もう三つ寝たら、お前には私の右の乳首をあげるわ。お前には左の乳首。女主人がいくら泣いたって、苦しんだって、遠慮することないわ。いじめたいだけいじめておやり」

その命令通り、その小さい牙たちは、いま藤子の女体のすみずみにまで、噛みつき、むさぼり食っているのだった。

夫は今ごろメンデルスゾーンを聞いているところである。劇場の仕事に打ち込んでしまった良一は、暇さえあると、音楽、音楽であった。生まれる子供の教育の責任は、すべて藤子が引き受ける約束であった。その教育者があやふやな知識でいたのではならない。良一は、日曜日ごとに、藤子をこうして回転椅子に縛りつけた。口頭試問が始まるのである。

「最澄、空海が唐に渡ったのは？」

「七〇四年です」

本を机の上に伏せた夫の手が、木箱から洗濯バサミを一個取り出す。そして、絶望した藤子のくるぶしへ。

「うっ」

という藤子のうめき声にたたみかけて、

「古今集がで上がったのは？」

「九五〇年です」

また一個、右のふくらはぎへ。

「頼朝が幕府をひらいたのは？」

「一四九二年です」

「コロンブスがアメリカを見つけた年だよ」

鎌倉時代にはいったので、小さい牙は太ももに移る。こうして、室町時代は下腹部を責める。下からじーんとした熱さが、上へ上へと上って来る。ちょうど、ひどく熱い風呂へ暴力で押し込まれているようなものである。もう熱湯はへそまで来た。ふつう、ここまで責められると、藤子の気持ちは転倒してしまつて、覚えていた年号まで間違つて答えてしまう。

一方、良一は、少しでも多く間違わせてやろうとかかっているのだから、赤子の手がねじられるようなものであった。本も、毎週新しいのを買って来た。急速に牙の数は増して来る。安土、桃山時代は上腹部を。

ついに江戸時代にはいった。良一は、ぐつとツバキをのむ。

「鎖国したのは？」

「一七十七年です」

良一の手が木箱にはいる。

「ああ、あたし、もうだめだわ。アアッ、痛いッ」

乳房をねじつた良一は、難問をたたみかけて来る。

「大塩平八郎の乱は？」

「知りません」

「よし」

良一の手が乳首をもむ。

「そこもはさむの。ウウッ」

右の乳首にかみついた小さい牙は、嬉しさにブルブルと身をふるわせている。

「伊能忠敬が日本地図を作ったのは？」

「忘れました。ウウッ」

こうして、二つの豊かな乳房を中心にした胸部、首は、江戸時代、明治時代、大正時代の難問にじゅうりんされ、藤子のあえぐ声と良一の冷やかな質問が続く。

いよいよ昭和である。

「原爆がおちたのは？」

「一九四〇年です」

しまったと思ったときは、もう左の耳たぶに一つ。

「日本国憲法が公布されたのは？」

「一九四六年、いや四五年です」

右の耳たぶに。

「日本人が、始めて、ノーベル賞を貰ったのは？」

「一九四七年です」

良一の左手が、藤子の鼻をつかまえる。

「そこだけはかんにんして。アアッ」

藤子の口一ぱいに布ぎれが押し込まれる。

キリキリと後頭部をしめつける手拭い。――三時間近い折檻は、こうして、始まるのであった。

でも、あたしは夫を愛しているんだ。どうせ、夫は新しい本を用意するんだから、この小さい牙の数を五十以下にすることなど望めやしない。八十七個の牙にかみつかれるのも百八十個の牙にかみつかれるのも、大差はないと思う。だったら、来週からは、わざと間違つて、夫の満足の行くまで、身体中をさいなまれよう。

藤子の両眼から、ホロホロと涙がこぼれる。風が強くなって、イチヨウの落葉が、ベランダにサラサラと音を立てた。

変態王・燕山君

小 松 五 郎

高麗朝以来、約一千年のあいだに、朝鮮に三人の変態王が出た。高麗の恭愍王、同じく辛禑、李朝の燕山君の三人である。そのなかで最も甚しかったのは燕山君で、その変態ぶりを少し書いてみよう。

生い立ち

燕山君は、李朝九世の宗王の長子で、尹妃の出で、父成宗王の死後、王となったが、在任十一年（一四九五—一五〇五年で）、臣下のために廃立され、ついに江華島に流されて、のち病死した。

燕山君の母の尹氏は、猛烈なヒステリー女であったとみえ、成宗もてこずり、ついに廃妃して宮中から出してしまった。その後、彼

女は、成宗の毒殺を計ったことが露見して死を賜わることになる。

燕山君は、聡明英敏である反面、この生母の欠点を遺伝して、大へんなヒスであった。

ある日、成宗とともに後苑を散歩していたとき、飼っていた鹿が足をなめたのを怒り、これを蹴った。成宗は、もっと慈仁の情をもたねば王としての資格はないぞとさとしたのだが、父王が死んで即位の日、まだ喪中にもかかわらず、そのときのことを覚えていて、自分の足をなめた鹿を、手ずから射殺してしまったという。

政治的な変態ぶり

即位後二、三年のあいだは、英明な王とし

て人民にうやまわれたが、だんだん悪くなっていた。

とくに、母の尹氏が毒を仰いで死ぬとき、血痕のついた手巾を伝えて、無念をはらせと遺言したのを、のちに聞いてからは、いっそう残酷になった。

まず、生母の尹氏が廃妃された時、ならびに死を賜わった時、成宗をいさめなかったということを理由に、そのことに少しでも関係のあった百余人を一網打尽にし、重い者は死刑にした。しかも本人だけでなく、その家族はもちろん、三親等、四親等のものにまで刑を及ぼしたという。そればかりかそのときすでに死んでしまっていた者に対しては、棺をあばいて骨を砕かせたというから凄まじい限

りである。

これを漂風の刑という。

また、世子であったころ、自分につれなかつたというカドで、罷職、遠流、死刑などに処せられたものも多かったし、即位後も、少しでも自分にさからうものは、たちまち死刑にしてしまった。

また、生母の尹妃が死を賜ったのは、嚴妃、燕妃の二人が成宗に告げ口をしたからだという者がいた。すると燕山君は、事の正誤も正さず、たちまち、王子王女まである亡父の二人の妃を内庭で撲殺してしまい、その子たちは流罪に処してしまった。

またあるとき、京城市中のところどころに彼の悪政をなじった落書らくしよがはられた。このときは、嫌疑者の八親等まで捕え、千十余人を虐殺した。

人民の困惑などおかまいなしの政令が多かつた。たとえば、京城の十里以内に標木を立て、ただ、自分の遊獵の目的のためだけに、その中の人家数十部落を取り払わせた。

そればかりか、京城から漢江を渡る渡船は当時、上下で三個所あつた。そのうちの二個所を、自分の遊獵やメカケをつれての行樂のための通行用として、一般人に使用させなか

つたので、行人は苦しみ、近辺に野宿して渡船を待つ有様だつた。

性的な變態ぶり

そのころ宮中の宴樂を行なうのに官妓がいた。これは、いつの王の場合もいたのであるが、彼女らは、宴会の席以外には出られないことになっていた。

それなのに燕山君は、宴遊に興を添えさせるのはもちろんのこと、ひそかに宮中に引き入れて閨房に侍らせた。

こんなことをした王は、前にも後にもなかつたという。

また新しく採青使という官職を設けて、各道へ使者を出し、士族の子女で容色の美しいものをさがし求めて、ことごとく宮中へ召し出した。

これが数千人というのだから、トルコのハレムにも匹敵する後宮であつたというべきであらう。

それでも、彼の変態欲はあくことを知らなかつた。そこで、内宴にことよせて、士大夫たちの妻を宮中に召した。彼女らには、エリに名前を書かせて、目にとまったものがある

せと命じて、衣服をはいで、思いのままに性欲を満足させた。

こうして閨の相手をつとめた女の夫は、官職を榮達することができた。だから、女たちの中には、すすんで燕山君の目にとまろうとする者さえ出たくらいである。

こうして誰かれの見境なく発見し、ついには自分の姉妹にまでその魔手をのぼすにいたつた。そのため自分から毒を飲んで死んだものが二人あつたという。

妓生キサンをメカケにしていた男があつた。ところが、この妓生の美貌が燕山君の目にとまつたので、その男を殺して、メカケの妓生を取り上げてしまった。

そこで、美妓をメカケにもつていた者はみな、女と手を切つて別れる者が多かつた。

宮中へ召し出された、ある夫人が、物思いにふけていたところ、夫のことを思っているのかと燕山君に聞かれたので、正直に、ハイ、そうですと答えた。すると、しばらくして、侍女が銀盤に何かのせて、その夫人のところへ持ってきた。見ると、夫のなま首ではないか。びっくりしている夫人を、こんどは情けようしやもなく殺してしまった。

その後、宮中へよび出してあつた妓生のひ

とりに、お前は前のダンナであった男のことを思い出すかときいた。その妓生は、前に殺された、夫人のことを知っていたので、イイエ少しも思い出しません、と答えた。すると、そんならば殺してもいいかという。よろしゅうございますと返事をするやいなや、家来にいいつけて、何も知らない男（妓生の前のダンナ）を殺してしまった。

もう一人の妓に、同じ問答をした。この妓



は機知があったので、ただ殺しては興がありません、一旦島流しにして、さんさん苦しめておいてから、あとで殺すほうがおもしろいでしょうと答えたので、その男は助かった。

また、燕山君は、刹那的に興奮が強かったとみえて、宮女四人ばかりを連れて麻浦へ遊山に出かけたとき、途中の路上で、女を抱擁愛撫したという。蕩春台へ行ったときも同様であった。正史には、この二つしか書いてないが、そのまかに、たびたび、こういった。路上での痴戯は、しばしばだったようである。

ある時、宮中に、ひそかにメスオス二頭の馬を入れた。その交尾の有様を見るためであった。

また、郊外に柵をつくり、その中に数百頭のメス馬を入れておき、後からオス馬数百頭をその中に放って、噛んだり、いらないたりする声が山谷にひびき渡ったという。これま

た、馬の交情を眺めて、歓楽の具としたわけである。

その末路

燕山君は、約十年のあいだ、以上のような無道暴虐の政治を行なった。だから、聖賢の学問などは不必要だとして、儒生学生に、王が遊覧するときのカゴをかつがせるほどの侮辱を与えた。

やがて、成希顔を中心とする、国家を憂う有志たちによって、さしも暴君の燕山君も、一夜にして、王位を追われる身となってしまった。

そのことが知れるや、八道の人民は小おどりして喜んだ。

燕山君に媚びて悪逆を行なっていた連中はみな殺され、王の寵妃のうち最も奸悪な三人が殺され、丸ハダカで、京城の市中にさらされた。

そのとき、人民が大ぜい集まり、そのなやましい裸体の曲線を見ていたが、アソコへ人民の膏血を吸収したのだと口々に言いだし、石を放って、たちまちのうちに、石で、そのからだが見えなくなってしまうと伝えられている。

花嫁は略奪すべし

庄 司 善 吉

花嫁を追いかける

インドでは、花嫁のひたいに朱を塗ることが、一般的な風習になっている。

また、シナイのドウイン族は、馬に乗った一人の男が、二人の男を従えて、同じく馬に乗っている娘を襲撃する。娘は逃げながら石を投げつけて、あくまで戦う。だが、この勇敢さが、男にとってはたのしいのである。

こうして、ついに、男たちは、娘をつかまえ、娘を連れて、その父の家に行く。

そして、花ムコの名をよばれる。やがて娘は、嫁入り支度をしてラクダに乗るのだが、絶えず抵抗のそぶりをよそおいながら、男の家へ連れて行かれる。

そして、酒宴、贈りもの、乱舞がつづいて、かくて婚姻の式がはじまるのである。

だが、こうした儀式(?)も、必ずしも複雑なものばかりではない。アメザ族では、花嫁はただ、一つのテントから、別のテントへ走って行けばいい。そして、そこに待っている数人の女に導かれて、少し離れたところに準備してあるテントを訪れる。そのテントには男が待っていて、花嫁を無理矢理引きずり込んでしまう。そうすると、付き添いの女たちは退散してしまうという寸法である。

これは、簡単明瞭にして、しかも、はなはだ要を得た儀式である。

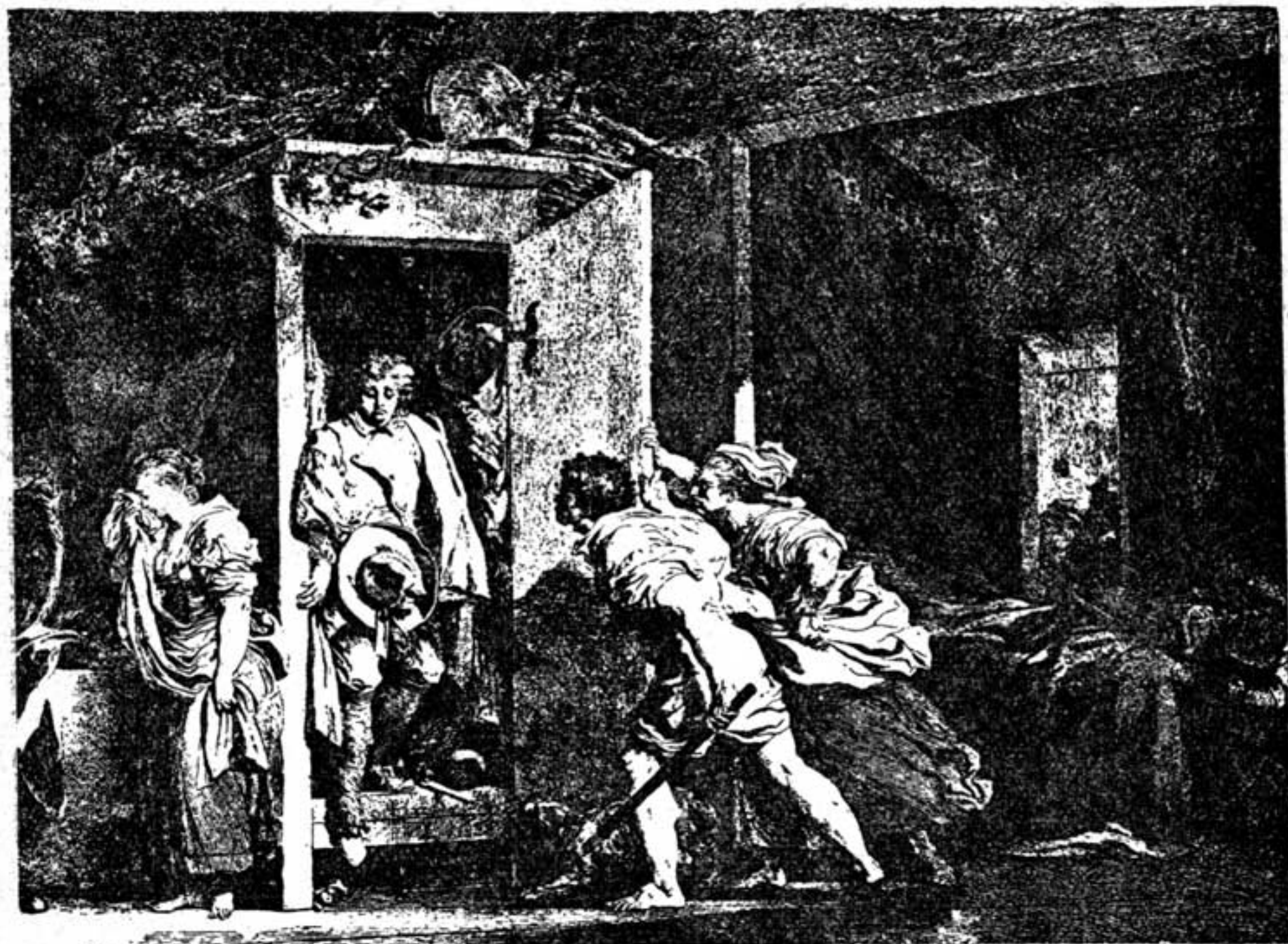
ジャワ島のムーア族では、父親が、娘のからだをヒモで巻きつけて動けないようにし、花ムコは、友人二人の助力によって、その娘を馬にのせて走り去ってしまう。そして自分の家へ着くと娘を隠してしまう。助力してくれた友人にも礼を言わず、自分も家のなかの

どこかへ身を隠すのである。
 こういうような略奪の真似事みたいな儀式が、今なお、あちこちの民族のあいだに残っているのだ。

ケープ・ヨークのエキスキモー人のあいだでは、新夫婦の両親が、平和に婚姻を取り行なうのであるが、しかもその儀式には、略奪の真似をしなければならぬことになっているという。

まず、花嫁になる女が逃げだす。花ムコになる男は、自分の家までその女を追いかけ行く。もちろん、このとき女は、男の家へ向かって逃げていくのである。

こうして、最後に女は追いつめられるのであるが、すると女は、あらん限りの声をはりあげ、手足をもがく。そしてそれが落ち着いてしまふと、女は男に抱かれて、夢みるよう



襲われた愛人たち

にうっとりとする。

あるレッドスキン部落では、苦い夫婦が抱擁する場合でも、この略奪の真似をすることになっている。つまり、夫は、妻の小屋へ夜中に忍び込んで行かねばならない。情欲を盗みに来た強盗というわけである。

数日の闘争の末

だが日中、妻の小屋に近づくのは、非常に不行儀なこととされている。カムチャツカへ行くともっと奇妙な儀式になっている。

まず、自分がほしいと思う娘の両親のところへ行つて、その家の仕事を手伝わねばならない。しかも、この手伝いの期間 は、かなり長く、数年間 つづくときもある。しか

も、これが、略奪結婚の序幕なのだ。

こうして見習いの仕事の時期が終わると、女は幾枚かの厚い着物を着て、その上からヒモと網で縛り固められる。

このとき男は、花嫁となるべき女の抵抗に對しては、公然と暴力で戦うことが例となっている。

女は幾人かの護衛にとり巻かれているのでその護衛の女や娘たちは、男にとびかかって打つやら、叫ぶやら、髪をひきむしり、顔をひつかく。この闘争は、時として数日間もつづくことがある。

幾度も幾度も攻撃を試みて、ついに男が勝ち、女もそれを認める。

そこで、はじめて婚姻が成立する段取りとなるのだが、なんとも乱暴で、手数のかかる結婚式であろう。

娘の代価を決めてから

ターコマン族のあいだでは、両親の同意があつてもなくても、結婚できることになっている。

ただし、両親の同意がない場合は、家を逃げ出して、若い男女は近所の村落に隠れ家を見つける。そこでは、周囲の人々が好遇して

必ず一カ月か六カ月滞在することになっていく。そのあいだに、その村落の二人の年長者が、両親と相談して納得させる。

だが、これで結婚の話が決まったのではなく、ここで娘の値段が決められる。

すると娘は、親の家へ帰り、そのまま六カ月から一年間は、親の家にいなければならぬ。そのあいだ男に会うことは禁じられているので、内緒で会うより仕方がない。

これが形式化されたのが、中央アジアの遊牧民種の大部分のあいだで儀式となっている方法である。

若い娘が、嫁入り支度のまま、騎馬にまたがって、殺したばかりの山羊か羊の子を鞍にくっつけたまま逃げまわる。花ムコと大勢のお客は、同じく馬にムチ打って、その花嫁を追いかける。

ところが、花嫁もたくみに曲がりくねって駆けたり、カー・ボーイのように馬のからだの陰に身を隠したりして、その鞍につけた山羊をとられまいとする。

ベンガルの土人のあるもののあいだにも、これと大変よく似た風習がある。

クルミ族や、その他の首陀族は、結婚式に闘争の真似事をする。そして花嫁は、ひたい

に血を塗る。

初めに書いた、インドの花嫁が額を朱で塗るのも、じつは、これと同じではないかと思われる。暴力的略奪の名残りらしい。

メック族やカチリヤ族では、花ムコは、その友人たちを従えて、花嫁の家へ行く。花嫁もまた、大勢の友達にとり囲まれて、待っている。

そこで、両群が闘争の真似事をするのだが、花ムコの側が、必ず勝つことになっている。かくて花嫁は運び去られ、その後、花ムコは、両群にご馳走して、娘の代価を、その父に支払うことになる。

ここまでくると、略奪結婚の形式をかりた売買婚ということになる。

略奪された女は奴隷

ところで、原始的結婚の研究家マクレナンをはじめ、その後の社会学者らは、この略奪結婚を次のように定義している。

「未開の社会では、男女の結合は、一般に、男の暴力的略奪によって行なわれた。そしてこの略奪が、次第に友愛的なものに進化し、ついに、その旧習を、わずかに儀式の形にとどめた平和な結婚になってしまった」

宮内省に秘蔵される奇書の
一字の伏せ字なき完訳版！

医心方

房内記

乾・坤全二巻を収録

丹波 康頼・著
原 一平・訳

定価 二五〇円(送料)

本書は、中国の黄帝とその女医素女の共著で、日本では円融天皇の時代に、天皇御用の医者たちが、「日本伝統の奥義にあわせ」て天皇家用として著わしたものだ。原本は現在でも宮内庁に秘蔵されているという。閨房の秘戯、テクニク、性欲増進の秘薬の処方など、性愛に関する、あらゆる心得を教えている。

本書はその完訳、限定版であるが、「東京都千代田区神田神保町一・星文館」風奇係「あてお申込みくださればお取次ぎします。」

◀週刊新潮・文芸春秋にとりあげられた問題の書▶

なるほど、ある地方では、確かにそうであったと思われるが、全部が全部、そうとは限らないようである。

未開人の群れや部落は、お互いに、絶えず生存競争をしている小さな群れの隣部落や敵の女や娘を略奪した。ほかの物品を略奪すると同様に、女をかすめとり捕虜として、あらゆる労働のためのドレイとした。

原始人は、もともと残忍性に富んでいるのであるから、この略奪された女たちの運命に対する苛酷さは、とうてい、われわれの想像の及ぶところではあるまい。

だが、略奪された女たちは、それに対して別に気にもとめなかった。それが当たり前とされていたからである。

そんな風だったから、オーストラリア人は理由のいかんを問わず、略奪してきた女を地にたおして、投げ槍で、手足を刺し通したりした。

敵の部落に捕えられてきた捕虜が、この虐待を忍んで、なんの抵抗もせず、それに従わなければならないのは、しごく当然のことであるというわけである。

それに、女を略奪するということは、男にとっては大きな誘惑である。それによって男

たちは、ほとんどあらゆる未開部落のあいだで不文律となっていた、女をもらうためにその両親に代価を払うことからまぬかれることができたからである。

もちろん、強奪と結婚とを混同してはならない。そして、この強奪の危険性や不便さを感じてきたことが、恐らくは、交易ということを考えるにいたったのであろう。

つまり、女を男に譲る賠償額の平和的な話し合いという考えを固定させたのではあるまいか。この交易は、原則として、強奪によって得るであろう権利の大部分を、男に保留させた。

それだから、ポリネシア、いや、少なくともニューギニアでは、買った妻を殺した男は、女の側に姦通罪のない限りは、その親戚の者たちの復讐を受けなければならないことになっている。

だが、

「もし、イヤになったら、売ろうと、殺そうと、食おうと、勝手だ」

と、娘を渡すときに、その父か兄が、買手の男にいうのはフィジー島であるし、古代ロシアでも、結婚にのぞんで、父は娘をムチで打ちながら、

「今からは、よく言うことをきかないと、ムコに食われてしまうぞ」

といったくらいだから、一面、花ムコ絶対専制の土地もあるようだ。

また、ある風習は、どうして、こんなにも多くの地方に、暴力的略奪を思い起こさせる結婚の儀式が行なわれているかを、明示しているものもある。

つまり、略奪者が、いろいろな危険をおかすところから、その略奪は名誉の行為とみなされていた。したがって、その真似をすることが、非常に愉快がられたと考えてよいようである。

しかし、なによりも、この略奪の儀式そのものは、両親のもとから売られてきた女の屈辱を意味する。すなわち、夫が妻に対して極端な権利を祝福したものだから。

スパルタでは、妻は、夫によって賃貸されることのできたし、またローマでも、妻はドレイと同一視された。

このローマから発生したローマ法が、現代になお生きながらえていて、女性の地位が、男性の従属的なものであることを運命づけたのではあるまいか、という説をなすものも少なくない。

狐が女に化け男と契った話

若 月 泰 明

妖狐・玉藻の前と殺生石

近衛天皇の侍女のなかに、玉藻の前という名の、美しい、器量のとくにすぐれた女がいました。

その容姿はあまりにも美しく、侍女のなかでも、ひとときわめだっておりましたので、天皇のご寵愛は、ことさらに深かったので、だれ知らぬ者がなくらいでした。

ところが、この玉藻の前が、どこのだれの息女であるのか、その素姓については、だれも知るものがありませんでした。

それは、久寿年間のある日のことでありました。

宮中で開かれた盛大な酒宴の会は、ついに夜に入り、夜はさらに深更におよんでいきま

した。会もだんだんにぎやいだころ、急に、殿中の燈火が、一時に、ぶつと消えてしまいました。

おどろき、あわてふためいた臣下の者たちは、いつさんに燈火のもとに近ようろうとしましたが、ふと、こうごうしい光に、天皇のほうを見ると、天皇のお膝下に侍っている玉藻の前の身体から、目もくらむばかりの光を放って、昼をもあざむくばかりなのに、ふたたび、ぎょう天してしまいました。

どういふものか、その後、天皇は、病いの床に伏され、いろいろな名医に見てもらって治療をなされましたが、いくども治療を重ねられても、その効果は、いっこうによくな

る様子がありませんでした。

そこで、天下随一の陰陽師として、名の高い安倍泰成をお召しになって、この病いを占わせられました。

泰成が参内するや、そのうらないに先立って、まず、玉藻の前にばく大な御幣を持たせて、神に祈りをさせました。

祝詞の声は壮嚴に殿中にひびきわたり、まさに終わらんとしたとき、御幣をすてて、玉藻の前が、あつという間に白狐となって、まっしぐらにかけ出したのでありました。

こうして、白狐は一路、下野国那須野へ逃げこみましたが、その後も、たびたび旅人に姿をかえて、多大な害を、いろいろな人にこらわらせておりました。

そこで、いよいよ白狐退治の議が一決して、朝廷からは、三浦介義純、上総介広常、千葉

介常胤をつかわして、全国いたるところで白狐退治がはじまりました。

そのころ犬追物^{いぬおひもの}というのが流行したのでしたが、これは走り犬を使って射騎の練習をするので、それが盛んになりました。

その結果、三人の大將たちは、那須野へ出発、例の白狐を狩り立てて、ついに義純の矢で、射ち殺してしまいました。



ところが、その後百年というもの、キツネは、化けて石になりかわり、鳥獣類に危害を加えました。というのは、その石にふれるとたちまちに死んでしまうのでした。こうしていつとはなく、その名は殺生石となづけられました。

しかし、このことを聞いた後深草天皇は、詔勅をもって、僧玄翁に命じて、殺生石の怪をやめしめられたのでありました。

勅命をかしこんで、僧玄翁は、下野国に下り、土地の者に案内をさせて、殺生石を見いだしたのですが、その左右には、たくさん白骨が山のようにつまれてあったということです。

翁は、それを見て、たいへん心をいため、杖をうちあげてその石を打ったのです。

石はたちまち粉のようにこわれて、みじんとなって飛散してしまいました。

×

キツネに精気を吸いとられた男

江州武佐^{ごうしゅうむさ}の宿に、割竹小弥太^{わりたけのこやた}という者がおりました。もとは甲賀に住んでいたのですが、ふとしたことから江州に移り、そこで旅人宿

この玉藻の前については、もう一つ、おもしろい伝説があります。それは、次のようなものです。

中国のむかし、殷^{いん}の紂王^{ちゆうおう}の御代、一代の麗姫^{れいき}とうたわれた姉妃^{あがき}が、王のお召しによって故郷を出て都に向かう途中、とある旅館に一泊しました。ところが、その夜、突然あらわれた金毛白面九尾のキツネが、姉妃の精血をすすってその胎内にはいつてしまいました。

つまり、九尾のキツネが姉妃に化身して殷紂の宮房にはいりこみ、人を害すること数知れずという悪業を、はたらくことになりました。そして、ついに宮房を追われ、そのキツネが日本に逃げてきて、近衛院の女官玉藻の前となったということです。

あるいはまた一説によりますと、この九尾のキツネは、西域の班足王の夫人で、のちに周の幽王の后となった褒姒^{ほうし}であるともいわれています。

をはじめたのです。

この男は相撲が好きで、力量もあり、すごく大胆でした。

ある日、少しばかり用事があって、篠原堤のほうへ歩いていくと、妙なものに出会いました。

日はすでにとっぷりと暮れて、前後に人影もなく、静かな晩でした。ふと前を見ると、道のかたわらに一匹のキツネが駆けだして来て、人間の髑髏どくろを身にまとい、立ちあがって

北のほうに向きなあって、礼拝するかと思っただとたん、たちまち、十七、八の美しい女に姿を変えてしまったのでありました。

小弥太は、もとより大胆な男でありましたから、その女にちかづいて、女の肩に手をかけ、声をかけました。すると女は、

「わたくしは、これからずっと北に行つたと



ころの北の郡こおり、余五ごというところの者でございますがこのあいだ、山本の城を攻めとろうと、木下藤吉郎という大將がやつて来て、余五木下きのもとのあたりを、みな焼きはらってしまいました。わたくしの親兄弟は山本山で打ち死にし、母は、それがもとで、病いになり、困りはてているところへ、軍兵どもが、押しこんで来

て、家にあった財宝を、一つのこらず奪い取ってしまいました。母親は、声をあげて泣きさけびました。すると、軍兵たちは、母親を殺して、そのまま立ち去ってしまいました。そのため、わたくしは、たよるべきところもなく、こうして、孤児になってしまいました。どこにもなく、さまよい歩いているのでございます」

と、本当に真しんにせまって、哀れな声で、いうのでした。

小弥太は心の中で、

「まさしくキツネのやつが化ばけて、オレをたぶらかそうとしているのに、違ちがい、さっきのキツネが化けたのに、違ちがい、さっきのだから。だが、こっちは、また、このキツネのやつをたぶらかしてやろう——」

そう思いながら女に向かって、

「それはそれはずいぶんお気の毒なことです。

幸いに、わたしは家は貧しいながら、女一人ぐらい養うことは出来ますから、一緒に来てはどうです」

と、さそってみた。

すると女は、喜んでついてきたのです。

そして天正てんしょうのはじめ、江州もようやく戦いも静かになり、北の郡は、木下藤吉郎の所領

となつて、石田市之助が、京から下つて、この領を支配することになりました。

石田は途中、武佐の宿で、小弥太の宿に泊まったのですが、小弥太の連れて来た女を見て、限りなく好きになつてしまい、たのみこんで、岐阜に連れて帰つたのでした。

つれ帰つてからは、大事に大事につれそい、この女なくては、夜も日もあけないというありさまでした。

ところが、しばらくするうちに、石田は、

一夜の契りゆえ男の身代わりとなつた狐

昔、ある男が、朱雀大路を歩いていきますと、向こうから、一人の美しい女が来るのに出会いました。

男は、自分の知らない女ではありませんが、あまりにも美しいので、ツカツカとそのそばに寄り、

「どうか、私の女房になってください」

とたのんだのです。

女は、突然の出来事におどろいたようすも見せず、

「それは、わたくしから望むところでございます。しかし、わたくしを女房にお持ちにな

妙に身体の具合が悪くなつたので、京に住む有名な僧侶にたのんで祈禱をしてもらうと、それは怪しい物がついて精気を吸うからだといふので、壇を飾り、灯明をつけ、香をたいて祭文をよみ、おはらいをしました。するとかの女は、その場にどうとう倒れてしまいました。

よく見れば、女と見たのは、一匹の古ギツネで、頭には人間の髑髏をまといつていたのでした。
(「伽婢子」巻の二より)

と、あなたのお命にかかりますよ」

と、妙なことを言つたのです。

けれども男は、よほど思ひつめたものとみえて、

「いいや、たとえ、この身がどうなるうともよいから、ぜひ、わたしの言うことを聞いてください」

と、真心こめてたのんだのでした。

女は、それに答えて、

「あなたが、それほどまでに思つてくださるのは、ほんとうに嬉しゅうございます。ではわたくしはあなたのお命に代わりましょう。

その代わり、もしもあなたがわたくしの心を不憫だと思ひになられましたら、どうかお願いでございます、法華經を書いて供養してくださいまし」

と、ここで約束をして、男の思い通り、夫婦になりました。

さて、夜が明けてから、女は、男に向かつて、

「では、わたくしが、きのうお約束したことがウソでないという証拠に、あなたのお持ちになつてゐる扇子をください。そして後刻、武徳殿のほとりまで来て、見ていただきとう存じます」

といつて、女は、さも名残りおしそうに男の家を出て、どこへ行くともなく、姿をかくしてしまつたのです。

男は、どうも女の言つた言葉が気にかかるので、わざわざ武徳殿のほとりにいつてみますと、おどろいたことには、一匹のギツネが扇子で顔をかくしたまま死んでゐるではありませんか。

男はこれを見て、

「ああ、悪いことをした」

と思ひながら、その日から七日目のあいだ法華經を書いて、ねんごろに供養をしてやり

ました。

すると、ちょうど七日目にあたる晩に、男の夢枕に、このキツネが、大勢の天女に守られながら現われて、

飼い犬に追われたキツネ妻

昔、欽明天皇の御代に、三野国大野郡の人が、自分の妻になる美しい女をさがそうと思つて、ほうぼう歩いていましたが、そのうち人里はなれた野原に出て、一人の美しい女に出会つたのでした。

その女は、なんとなくその人に心ありげに見えたので、男は女に向かって、

「あなたはどこへおいでになりますか」とたずねました。

「わたくしは、よい夫に縁付こうと思つて、歩いております」

と女は答えました。

それを聞いて男は、さつそく、

「それはそれは。わたしも妻をさがしているところですが、あなたは、わたしのところに来てはくださぬか」

と相談を持ちかけますと、女は、二つ返事で承知しました。

「お陰で一乗の力により、劫利天に生まれる身分となりました」

と告げて、そのまま、ゆうゆうとどこかへ消えていってしまいました。(『法花伝』より)

二人は、その場で夫婦になり、やがて、可愛い一人の男子を生みました。

この家には、一匹の飼い犬がおりましたが、いつも、女のいるほうを向いては、さわがしく吠えたてるのでした。

ある時、女が犬の子に追われようとして、もはや、のがれることが出来なくなつてしまひ、とうとうキツネになつて、まがきの上に登つてしまいました。

男はこの様子を見て、一時呆然としましたが、やがて、

「お前とわたしの仲には、すでに子供まである。わたしは決してお前のことは忘れない、だから相変わらず来てほしい」といいました。

そこで女は夫の言うがままに、毎夜、通つて来ました。二人の仲に生まれた子は、岐都きつと名付けられました。

やがて、その女が別れ去ろうとする時、見ると紅染めの裳きものを着け、容色も美しいので、男は、またまた恋しく思つて、一首の歌を詠みました。

古非皮米奈 和我戸爾於和奴 多可妓留
皮呂可爾美縁立 伊邇師古由恵邇

(『日本霊異記』より)

こういう類いの話は、全国あちこちに残つていたのであるが、キツネが、どんな理由で、こうした口碑くひのなかへ、人間として入つて来るようになったか？

ここには、いろいろの原因もあるうけれども、古代人の、一切万有ばんゆうを擬人化する思想がキツネばかりではなく、一切の動物類を擬人化したままで、このほかにも、蟻、あるいは猿と、あらゆる動物の擬人化が行なわれているのである。

なお、猿などは、年功をへると人間に化するものと思われていたらしく、この点、後年、発表されたチャールス・ダーウィンの「進化論」すなわち人間は微生物からだんだん進化した、猿をへて人間に進化したものであるという近代科学の説の暗示を、すでに古い昔において示している形がある。

明治性的珍聞史 (5)

車夫のオカマを狙う

赤坂やげん坂の玉窓寺に仮寓していた英人テットメル、人力車に乗って早稲田の近くへ行って大酔した。ところが帰ってきても車夫に賃金を渡さないで、車夫の代次郎が待っていると、ワラジをぬいで上げれという。代次郎が上がると酒をすすめ、やがて無理に寢床に誘つていうには、「淫心発動して我慢できない。オレの意に従えば賃金を払うが、もしイヤだといえれば払わないだけでなく、コレだぞ」と短剣をひらめかせた。

代次郎はびっくり仰天して、一生懸命で雨戸を蹴って逃げだしたところを、怪しい

やつとばかり邏卒に捕まってしまった。そこで代次郎が、かくかくの次第とワケを話

和姦ないヨ

湯島天神下町一丁目の商人磯啓之助という男、深川西森下町の商人田村三右衛門の妻ときと密通し、ついに夫婦となって暮らしていたが、預け金の証文のことからゴタゴタして発覚し、和姦律で二人とも懲役一年に処せられた。

事の始末は、万延元年四月、ときは田村三右衛門方へ嫁してきて二男一女を設け、

したので、さっそく玉窓寺に行き嚴重に談判した。テットメルもさすがに閉口して、賃金三分を出して代次郎に渡したということである。

(日要新聞第十七号・明治壬申三月)

事故もなく暮らしていたが、明治元年のころ、三右衛門と磯啓之助と懇意になり、互いに親戚同様の交際をするようになった。

そのうち明治五年、三右衛門は、親戚うちにゴタゴタが起こったので、啓之助を掛け合い人に頼んだので、啓之助は朝に晩に三右衛門方に入りし、しただって、ときとも親しく話すようになった。

ところが、それを見た三右衛門は、二人が密通しているのではないかと疑心を起こし、ときをいろいろに訊問したが、もとより、あとかたもないことだから、ときは、ハッキリ否定した。

ちやうどそのおり啓之助がたずねてきたので、夫から疑いを受けたと話したところ啓之助は大いに怒り、高声で三右衛門をのしつたが、その場はとにかくおさまった。さて、その後、啓之助はよくよく考えてみるに、このような嫌疑を受けたのだから、いっそのこと事実にしてやれと、ついに、ときを誘って、小松川辺の旅館へ連れ込み、とうとう関係を結んでしまった。そしてのちに、ときは三右衛門と離婚し、啓之助と夫婦になったのである。

ところが、三右衛門方で、貸し金の証文が紛失したことに気づき、これはてつきり、ときが家出のときに持ち出したのだろうと三右衛門が訴え出たので、一件が露見してしまつたわけである。

(郵便報知新聞第九十三号・明治六年七月二十日日曜日)

鶏姦は獄中の規則

六月四日 小島仁三郎 三十七年

自分儀御吟味中、入檻おせつけられおり候ところ、当五月八日、岡田善吉と申す者新入りつかまつり候。折りから事なきのあまり、同人へ相戯れ、流行唄うたい申すべく、もうたわす候節は鶏姦犯させるは獄中の規則と申しあざむき、

その夜ついに、同人を鶏姦つかまつり候ところ、翌朝、同人より、前夜の次第御訴え申し上げ、自分御吟味を受け、恐れ入り候こと、右の通り相違申し上げず候。以上。

(東京日々新聞第三百九十七号・明治六年六月十四日)

大事なところを手で探る

柴井町の小六という芸者が、先日夜中に手水場へはいつていると、大事なところを手の手先で探りまわすものがございました。

芸者がさぐられるのは常のこととて、びくともするものでございせんが、手水場の中といい、ことに夜中のことゆえ、薄気味悪かつたが、そうかといつて家族に話すのもバカバカしくつて、まずはそのまますてておいた。

ところが、その後は、小六に限らず、女

がはいると、誰でもかまわずさぐりまわすので、親父が聞きつけて、それはなにしろ不思議なことだ、人間業か、お化のせいかと、いろいろ吟味をしまするに、今の世にはお化けはいないという話だから、これは人間の仕業に違いあるめえと、手水場の掃除口に忍じ返しのように数本の大釘の先を並べて打つたところ、その夜から、さぐるものがなくなりました。

どんなに手長猿のようなものが伸ばして

も、なかなか掃除口から探りまわすほど届くはずがないわけだろうと思われます。

そこで、朝野新聞には、当社の厠^{かわや}にいた狸が転宅したのであるかと書いてありま

変 態 心

このごろ情死の数多く、じつに嘆惜に堪えないところである、と世相を憂える徒輩も多い。

去る二十日にも、北本町表町五十五番地先の川岸に、男女の浮き死体があった。男の年齢は二十二、三、女は十六、七ぐらいであろう。

ところが、この二人は、男女衣服をとりかえて、男は女の着物を着て、緋ぢりめんの腰巻きをし、紐に紅でみねと記してあるのをしめていた。

また女は、男の衣装で、白木綿のフンドシをはき、将棋の駒の形にふの字をほった銀の指輪をはめていた。

そのうえ、二人のからだを細帯で結び合わせていたというのだから、まったく恐れ

すが、なるほど、そんなものでもござりましょう。

(東京曙新聞第五百四十号・明治八年七月三十日)

中

入る次第。

路傍で情事之多淫女

福島県から来た人の話によると次のようなことがあった。福島市内の北屋某という商家に、年齢五十六、七歳にもなる下女がいた。この女は、生まれつき多淫で、男出入りが繁く、夜ごと二、三人の男を左右にして、その醜態は見る人の眉をひそめさせ

痴情のきわまるところを、昔から、比翼連理というが、この二人もまた、この類いであるのだろう。まだ身もとは不明だが、結局、教えもしない過ちに、父兄は撫然として、世に合わせる顔もあるまいと、もっぱらの評判である。

(東京日々新聞第六百七十七号・明治七年五月三日)

た。先日、道ばたで、三十歳ぐらいの男をつかまえて青カン中を、通り合わせた邏卒に見つかり、二人とも捕まって本庁に送られたということである。

(東京日々新聞第二百八十五号・明治六年二月七日)

共犯マメ仕掛け

小管県管内の百姓で、よし夫婦というのは、夫婦相謀って妻に不義をさせ、奸夫から金を強奪していたが、その事実が官に聞

こえ、正夫の取った金で農具を買い、妻と奸夫を小金原の開墾に徒役せられることになった。(新聞雑誌第三号・明治四年辛未)

娘三人殺しは巡査なり



揚弓のひく手あまたの客取りは、芝神明の社内にて、百中争う恋の的、甲乙がねらうアダ者は、お蔦に、お美津に、お竹の三人である。

女が三つで姦^{かしま}しいというが、これも三大区の巡査を奉職する男があつた。巡査という職業柄も、物の道理をわきまえるべきを、淫情の闇に踏み迷い、さきの娘三人を、青山南町の下宿に招き、酒宴にかこつける手料理の、やいば合わせて待つとも白歯の娘三人、命は夜半のこがらしの、果ては涙に散るカエデ、したたる血潮の紅は、密室の中に敷きつめた、その名も錦織^{にしおり}熊吉が、暴挙のために三人とも、刃の露と消え、熊吉は、明治七年十月二十二日に捕われました。

(東京日々新聞第八百三十三号)

女の男装は罰金か？



三月十四日、小舟町の火事のとくに、紺木綿のモモ引き、腹掛けで、頭巾をかぶり、麻うら草履をはき、差し子の半天を着た美しい男が、あちこち火事見舞いに歩きまわる様子が、どうも女らしい物腰。

ある巡査が、見とがめて呼び止め、住所姓名をただしたところ、思ったとおり芸者で、もと大阪町のまさき屋で、布袋軒とか、富本安太夫とか、幾つも名のあつた中村清助という人の養女のおやまであった。

彼女は、そのまま屯所とんしょに引かれて行ったそうだが、定めて罰金ものだろう。

(東京日々新聞第九百六十九号)

助
ち
ゃ
ん
狸

タヌキが人に化けても怪しむことはないけれど、人がタヌキに化けたから事件が起こった。それも、タヌキの姿に化けて愚俗をだまし、眼病がなおるといいふらして大流行。一ぱい半の目ぐすりを煎じて、目いっぱいにくすりにする。ところは薬師堂。妖魔にかかったといつては、奇病のマジナイを頼みにくるものが多かった。

そのなかに、武州秩父郡横瀬村の農業某の娘がいたが、その娘の部屋へ、夜ごと、通ってきた美少年があるが、どうも様子がおかしい。

おりもおりとて、この美少年は、人かタヌキか、タヌキか人かと、腹つつみ打つ太平の御代にも、奇妙なことと話題になっている。

(東京日々新聞第九百九号)

ひとり情死は愚中の愚



横浜港吉田町の清正公の境内に鶴寿という揚弓場があった。そこのおみきという矢取り女は、まだ二十歳にもならないのに、すこぶる美人だったので、これを射落とそうと押しよせる客も多かった。

その客のなかに、鍛冶工で定吉というのがいたが、これが、おみきに恋慕の念ふかく、気やすめの舌先の甘いことばにつられ、フイゴ祭りの夜もふけて、おみきのところにたずねてきたが、おみきは持病の癪といつわって追い帰す。

ところが定吉は、今宵こそは本望とげんものと思ったのを、胸の金ヅチもトンチンコンと打ちはずされたので、かねて用意の短刀を、自分のノドに突き立てたばかりか、これはと驚くおみきをねらって、抜きとった短刀を投げつけたが、フスマに当たって、おみきは怪我もなく、自分も死にはしなかったが、ひとり情死は愚中の愚、奇中の奇話というべきであろう。

(横浜毎日新聞第六百二十一号)

刑罰はどのように変態的か

久保寺 正巳

わが国に刑罰制度の定まったのは、大宝律制度以後であるから、それ以前には、刑罰に関する成文律というものはなかった。したがって、それらの文献もきわめて乏しいので、ここでは、それ以後の時代における刑罰、しかも変態的と思われるものだけを述べることにする。

もともと刑罰は、人間のサディスティックな性向の表われであるから、どうしても変態的残虐性を帯びるのは当然である。ことばをかえていうならば、変態でない刑罰はないといえよう。

火あぶり

火あぶりを行なったことの、記録に残っているのは、古くは神功皇后摂政の五年二月、

新羅の使者三人を檻おりのなかに投げ入れて焼き殺したこと、雄略天皇の二年七月、百濟くだらの池津媛夫婦の罪を罰して焚殺したこと、また、同天皇の崩御後、星川皇子が謀叛を謀って焚殺されたことなど、これらは、みな『日本書紀』に載っている。

それから少し後になって、天正七年十二月、織田信長が、荒木村重の妻子、ならびに一族を焚殺したことをはじめ、織田信雄が囚人を焚殺したことや、織田信忠が恵林寺えりんじの僧を焚殺したことは、『信長記』に記されてある。

信長が、いかに残虐であったかということはいろいろ書かれ伝えられているが、その代表的なものに『信長公記』がある。その一節を引用すると、

「この外女ほかの分、三百八十八人、かせ侍の妻つぎ子付々之者共也。男の分百二十四人、これは

歴々の女房衆へ付け置き候、若党以下也。合計五百十余人。矢部善七郎御検使にて、家四つに取り籠め、こみ草をつませられ、焼き殺され候。風のまわるにしたがいて、魚のこぞるように、上を下へとなみより、焦熱大焦熱のほのおにむせび、おどり上がり飛び上がり、悲しみの声、煙につれて空に響き、獄卒の呵責の坂もこれになるべし、肝魂を失い、二目とも、さらに見る人なし。哀れなる次第、なかなか足り申さず」

徳川時代においては、放火罪を犯したもののについては、獄門と同じく、鈴ヶ森、千住小塚原で処罰された。

それは、まず罪人を火罪木かさいぎに縛りつけ、足もとに薪と茅を積み重ね、非人どもに、かがり火で茅に火を放たせ、それが薪にもえうつって一面の火になるという方法であった。火

磔^{はり}刑^{つけ}

ハリツケという、すぐ十字架にかけられたイエス・キリストを連想するが、古代のハリツケに使用する用具は、十字架に限ってはいない。X形をしたもの、Y形をしたもの、T形をしたものなど、いろいろある。日本では、男子用として、カタカナのキの字形のが

あぶりの目的が達せられたと思うころ、検使は、非人に命じて、水をかけて火を消させ、最後に一人の非人が、かがり火を持って、罪人の鼻を焼き、男であったら陰部を、女であったら両の乳房を焼いて止めをさした。



火あぶり——柱はツガの5寸角
長さ2間、土中3尺。縄の結び目
は粘土を塗る。罪木にくくってから
茅薪で四面を覆い、火をつける。

あり、女子用としては十字架があった。また、逆さ磔刑というのがある。これは、人間の身体をさかさにしてハリツケにするのであるが、永暦元年、頼朝が、長田忠致^{ただむね}と景宗^{かげむね}の二人を逆さハリツケにしたのが、その一例である。この刑罰は、主として、逆臣たちに加える刑として用いられた。

磔刑というのは、人間は、ハリツケの用具に縛りつけるか、または釘づけにして、脇腹をヤリで突くのが多かったが、そればかりではなかった。ひどいになると、ハリツケ台に縛りつけたまますてて餓死させたのもあれば、野犬に吠ませて殺すのもあった。そのほか、遠くから弓で射殺したり、方法はさまざま

であった。

『信長公記』から、その例を見ると、
「天正七年十二月、辰刻^{たうのこく}（午前八時）に、百二十二人、尼崎に近い七本松というところで懸け張り付けなすべきに相定まる。おのおの引き出だし候。さすが歴々の上臈たち、衣装美々しく出で立ち、かなわぬ道をさとし、美しき女房たち並びおるを、さもあらけなき武士どもが受け取り、その母に抱かせ、引き上げ引き上げ、張り付けに懸け、鉄砲をもってひしひし打ち殺し、ヤリ、ナギナタをもって差し殺し害せられ、百二十二人の女房一度に悲しみ叫ぶ。声天にも響くばかりにて、見る人目もくれ、心も消えて、かんるい押えがたし、これを見る人は、二十日三十日の間は、その面影身に添いて、忘れやらざるよしにて候也」

徳川時代には、関所破り、主人や親を傷つけ、あるいは殺害した者、姦通して夫を殺した女、にせ金を作った者などが、みんなこの刑に処せられた。

ハリツケの方式は、八寸角三尺の柱に、長さ五尺五寸、厚さ二寸五分の横木の打ち付けである罪木^{さいぼく}に、罪人を縛りつけて、十人の非人たちにこれを地上にたてさせ、三尺五寸を

土の中にうめさせて、この支度が出来上がる
と、検視与力の指図にしたがって、二人の非
人が左右に別れ、一人の非人が、罪人の目の
先二尺ばかりのところへ、ヤリの穂先をつき
つけ、「アリアアリア」とかけ声をかける。
これを見せ、槍と言った。それが終わると、ヤ
リをしごいて右のほうへ回り、罪人の右の脇
腹を力いっぱいにつく。ヤリは、罪人の胸の
ななめをついで、肩から五寸以上ヤリの穂先
がつき出る。これを突き手の自慢とした。

血がタラタラと槍の柄を伝って流れ出る。

その血が手先まで流れて来ないうちにヤリを
ぬいて、またヤリをかまえる。その時、もう
一人の非人が左側へ回って、左右同時にヤリ
をくり出して、罪人の脇腹を両方からつく。
その突いたところを検視の役人が見とどける
と、二人の非人は、左右から罪人のノドをつ
く。これでハリツケは終わるのだが、三日間
はそのまま、さらしておくのである。血は流
れ、ふき出てハリツケにされたまま罪人を苦
しませておくのである。

串刺し

串刺しは、ハリツケの一種ではあるが、残

酷きわまるもので、ハリツケどころではない。
もっとも罪人を苦しませる方法である。それ
は、ハリツケにしたまま、竹のさおで、体中
をつきさし、その切先が口から出るように貫
くのである。

その串刺しの刑を、刑罰の手段として用い
たのは、徳川幕府からで、永禄五年三月、吉田
の城主小原肥前守が、徳川の家臣の妻子を謀
叛の罪で串刺しにしたのがはじめであるとさ
れている。

鋸挽き

鋸挽きというのは、地面を掘って大きな箱
をうずめ、その箱の中央へ柱を立てて、柱に
罪人を縛りつけ、中央が半月形に切り込んで
ある二個の角棒を、ちょうど半月なりに切っ
てあるところが首にあたるように、双方から
合わせてはさんで、二本の角棒をカスガイで
とめる。すると、二つに合わされた木の中か
らニュッと首だけが地上に出る。

こうしておいて、竹でこしらえたノコギリ
で、なるべくゆるやかに、首のまわりを挽く。
これは、出来るだけ長く苦しませておこうと
いう目的による残酷きわまる刑罰である。

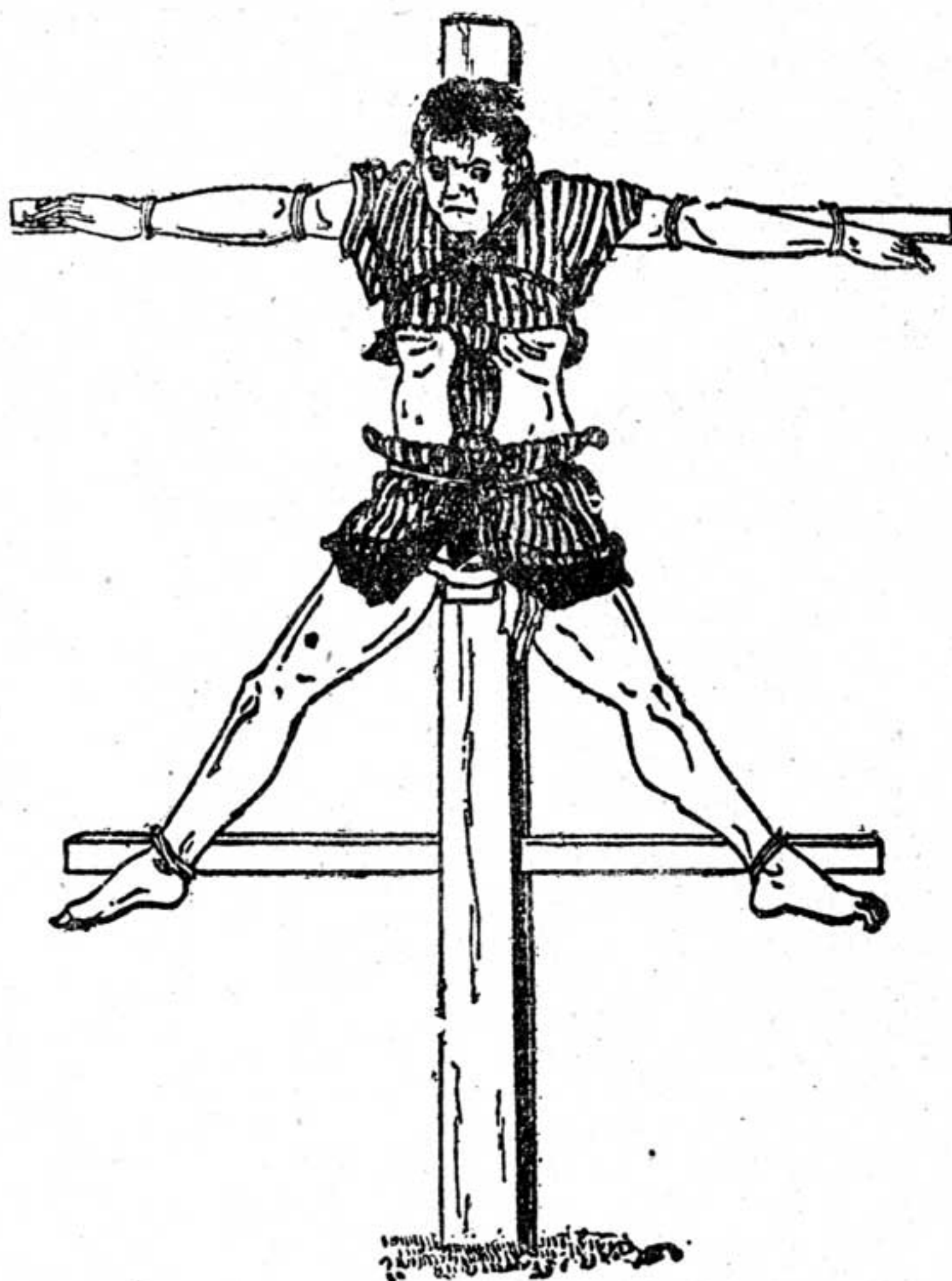
その一例は「織田信長記」に出ている。

「千穂峠にして、鉄砲をもって信長を狙いけ
る松谷の善信坊は、江州高島に隠れおりたる
を、磯野丹波守がさがしいだし、搦め取って
同十日、岐阜に参る。信長大に悦び、立ちな
がら土中に埋め、竹ノコギリにてこれを斬ら
せらる。七日にして死にたり」

徳川時代においては、ノコギリ刑は、単に
一つのみせしめの刑罰中に加えてあった。主
殺し、親殺しの重罰は、ノコギリびきの形式
をしたうえで、ハリツケにすることになって
いた。

その方法は、前にのべたのとだいたい同じ
であるが、ただ竹ノコギリで挽くことだけは
さすがに残酷であると思つてか、実際にはさ
しひかえ、罪人をあまり苦しめないように、
刀で軽動脈を断ち切つて絶命させた。そして
その時出た血を竹ノコギリと、本当のノコギ
リにぬり、罪人の入っている箱の両側に立て
かけておいて、そのまま二日間野ざらしにし
た。恐ろしいところを見せて、世間の人々を
威嚇するためであった。

しかし、もし、罪人に遺恨のある者がいて、
ノコギリで首を挽かせてくれと願い出るもの
があれば、その者に挽かせてやった。



ハリツケ——柱は長さ2間、横貫2寸角（これは上下とも）、土中3尺埋める。木はツガが使われる。

この二日間の野ざらしが終わってから、ふたたび、あらためてハリツケの刑に処した。

牛裂き・車裂き

牛裂きというのは、罪人の左右の足を片一方ずつ別にして二頭の牛に縛りつけ、牛を左右ちがった方向に走らせて、地面を思う存分

ひきずらせながら、マタをさくのである。

車裂きもこれとほとんど変わらず、牛を車に変えただけで、同様に裂き殺すのである。

織田信長が、その子信忠とともに摂津におもむいて、多くの男女を車裂きの形に処したことは、記録にも明らかである。

また、牛裂きについても同様で『稽徳篇』には、

「会津の前の大守蒲生氏の世、罪人をして両牛に跨らしめ、焼松をもって両牛の間に入る、牛のおおの驚怒して左右に開けば、罪人を裂く。これを牛裂きと言う」

徳川時代には、このような残忍な刑罰は、さすがに明るみには出されなかったようだ。

煮ごろし

煮ごろしとは、その名も高い石川五右衛門の親子ともどもの釜いりである。

『絵本太閤記』から、三条河原で煮られる一条を抜き書きしてみよう。

「去るほどに、五条行の面々商議ありて、下司におおせて五右衛門を引き出し、『太閤の寢殿へ忍び入り、殺害し奉らんと計る条、匹夫下郎のなす業ならず、叛逆の張本人あるべし、明らかに白状せよ』とさまざま拷問におよびけれど『石川五右衛門という盗賊にて、あまねく諸侯の屋敷へ押し入り、財宝を奪い取るのほか、何者にか頼まれ候わん』とて、ほかに申す言葉もなし。されども太閤のおおしませ堅城へ忍び入る曲者、同類の数多あるべしとて、日々に重き拷問にかけ給えども、少しもひるめる色なく、ただ大言を吐き、司

史を罵り、傍若無人の有様なり。

しかるに、河内国竜田越の山中にて、一人の賊徒を捕え糺明せしに、その名は筑紫権六とて、石川五右衛門が手下の賊なるよし申すにより、やがて伏見へ引き渡しけるが、この権六が白状にて、悪徒の同類残らず相知れ、諸方へ人を馳せて捕えさせるのに、一月ばかりに二十余人を搦め得たり。この者ども、ことごとく拷問に及びければ、巡見使となりて水口大垣を掠め、岩村にて上使を殺し、田丸にて大金を奪いしことどもことごとく上聞に達し、案外の強盗、世の見こらしにとて、三条河原に大釜を据え、内に油をたたえ、二十余人の手下とともに煮殺しすべしとの評定に一決し、文禄三年冬十月、洛中洛外を引き回されけるに、見物の老若男女雲のごとく集まりて、あなあさまし、刑罰も多き中に、ためしも聞かぬ釜いりは、悪人ながら不便なりと皆あわれを催しけり。

京極通り松原に森如軒と言え茶人あり、旧来、五右衛門に交わり深く、茶味を談じ合おせることたびたびありしが、思わざりき、盗賊の魁首にて、釜いりの極刑に処せらるるを、只今ここへ引き来たと、往來の群衆キリを立つべき累地もなし。如軒夫婦は、あな

無残とて、引きかづき臥しいけるに、五右衛門、如軒が門前にて、驚護の武士に向かい、『しばらく馬を停め給わるべし、これなる家は都に名高き茶人のよし、かねがね聞き及べり、ついに知人ならねど、薄茶一つ所望したし』と言う。武士ら、その乞うにまかせ、如軒を呼びて、しかじかと申せば『心得て候』とて、やがて衣服をあらため、樂の茶碗を点て、さし出せば、武士取りて直に飲みしむ。五右衛門大いに喜び『あな心よや、末期の茶なり』とて、北の方へ引かれて行く。

この後、罪人を引けるときの例となりて、この家にて茶を与え飲みしむとぞ。

……さても河原には、巨釜三つまで立て、油を盛り、柴薪積みて焚きけるほどに、炎天を焦がし、にゆる音雷のごとし、見る者肝を冷やし、魂をくらます。まことに焦熱地獄のありさまも、これにはすぎじと恐ろし。

やがて五右衛門以下の盗賊を引き来たり。

いましめの繩をそのまま、熊手にて引っかけ、かの釜の内へ投げ入れば、たちまち五体は朱のごとく変じ、七転八倒して叫びにけるを、稲麻竹葦のごとく寄り集まりし見物の男女老少、あえて目を定めて見る者なく、面を蔽い気を失うもの数を知らず。異国にては、人を

いる例多しといえども、本朝においてかかる刑罰のあるとも聞こえず、自業自得とは言いなから、あさましき身の終わりなり」また「稽徳篇」には、この刑のことをくわしくしるしてある。

「大釜を作り、そのふたに穴を穿ちて、罪人をその中に頭面および両手を出し、本履をもつてその脚につけ、火を焚いてこれを炙る。火気釜内に透る時は、膏油をもつて穴に潑ぎ入る。見る者もまた甚だこれを哀れむ。またあるいは大壇を作り、一本の杭を立て、首械をもつて罪人をつなぐ。両手をば竹の輪を入れてこれをしめ、麻葦を束ねてこれを燃やし、左右前後よりこれをもつて焚きければ、罪人躍湧して死す。これを名付けて焼松炙りと言ふ」

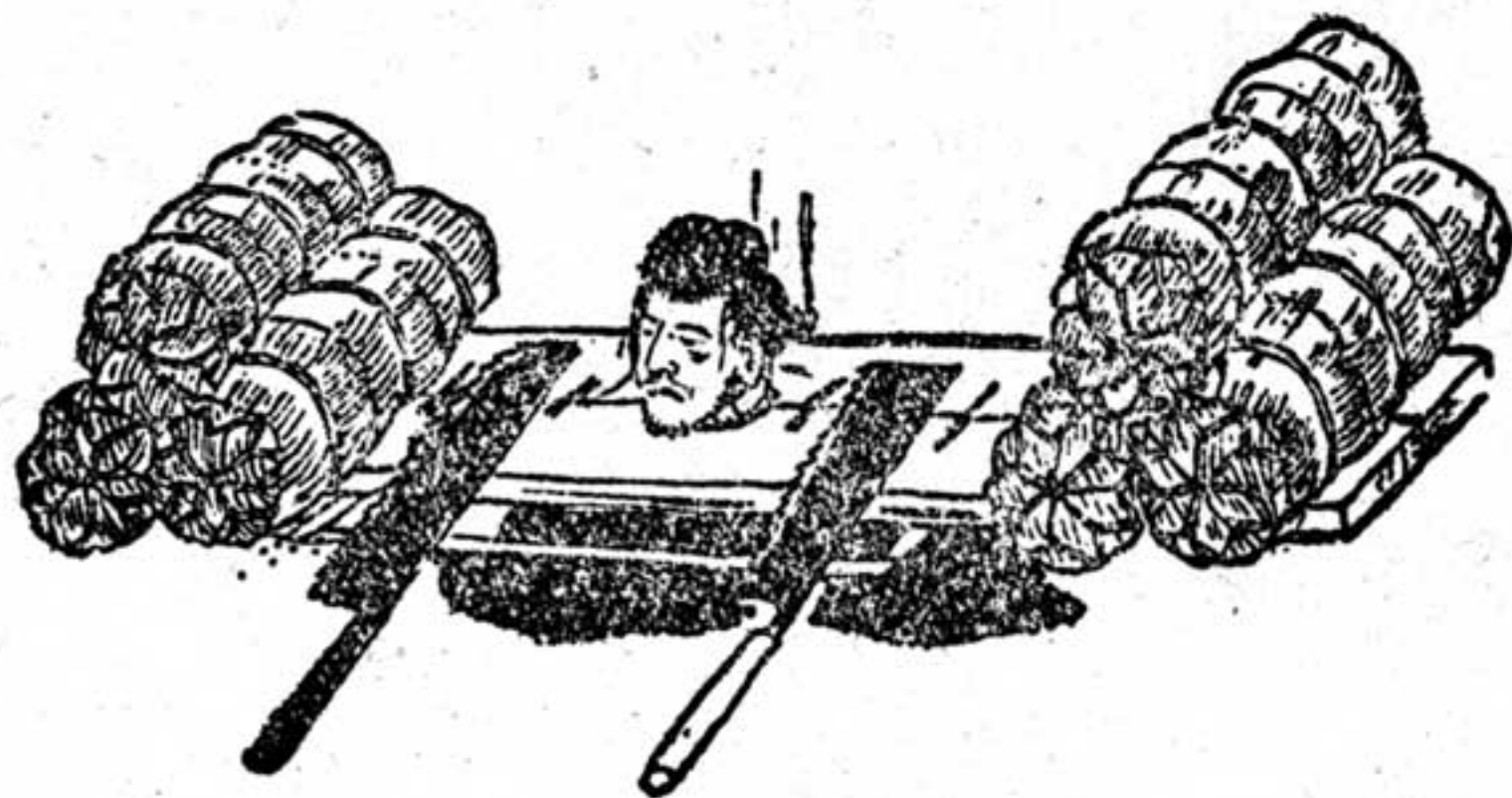
焼松炙りのほうは、火あぶりの部に入るべきだが、ここに付記した。

生殖器毀傷刑

まず、珍しいのは宮刑である。これは、支那から来たもので、宮と割とを総称して言うのである。支那では、死刑に次ぐ重い罰とされ、男子は陰茎を切断し、女子は監房に監禁

して終生男子を見せないものである。この宮刑に処せられた男子は、宦官^{かんがん}として、後宮に使用することもある。

日本でも、中世紀ごろまでは、宮刑というのがあって、男子の陰茎を一部切断したことがあるが、女子に対する宮刑は、支那とは違っていた。「太平記大全」には、「男は勢^{せつ}を



ノコギリびき——はじめは実際にノコギリでひいたが、のち竹ノコギリに血を塗って側においてサラすようになった。

裂き、女は根門を縫いつぶるを官刑と言う」とあり、また「後太平記」には、「宮刑は淫乱を犯すと罰するゆえに、陰門および陰茎を割塞^{かつそく}するなり」とある。これによると、日本では、男女とも、性交不能にするために用いたようである。

鼻を切り取る刑

鼻を切り取る刑は、劓刑^{びけい}と称されて、支那やインドでも行なわれた。主として、貞操を破った妻と、その相手の姦夫に加えられた刑罰であった。

日本では、北海道のアイヌのあいだで、明治十年ごろまで、姦通した男女にこの刑を加えていたようだ。姦通以外にも、この刑を加えた記録はある。

天文十六年、赤口関左衛門と寺川四郎右衛門とが争い合いをしたことに対して、武田信玄が、この刑を兩人に加えた。また、織田信長も、長島城を逃がれ出ようとした二千余名の男女に、この刑を加えている。

朝鮮征伐のさい、敵軍の捕虜の耳をそいで持ち帰って、これをうずめて建てたというのが耳塚の由来でもある。

捺火印刑と剝刑

捺火印刑とは、罪人の身体に焼印^{やきいん}をおす刑罰である。カッカツともえた鉄の火ばしで、腕、足と、身体のどこにでも、にえつく火ばしでやけあとをつくった。これを見れば、一目で罪人であることがわかった。また、罪の重さによって、場所や大きさが、ちがっている。

剝刑^{ひけい}というのは、両足の筋を断つ刑罰である。為朝が腕の筋をぬかれて、島流しの刑に処せられたのはこれである。

墨刑

墨刑というのは、罪人の顔をきざんで墨を刺すのである。入れ墨のことである。

履中天皇の元年四月に、阿曇連浜子の死を免じて、鯨刑に処したのが、この刑のはじめである。その後、二百五十年間ほど、この刑をつづけられていたが、大化の改新以後はこれを廃した。しかし、徳川時代になると、ふたたび復活した。

八代將軍吉宗のころまでは、これについて

の一定の制規はなかったが、享保五年二月十七日に、これを新たに制定された。それによると、

「耳鼻そぎ候科のものより一等軽き品のは、向後腕に回し、幅三分ほどずつ二筋入れ黒致し申すべく候」という御定書であった。入れ墨の方法は、江戸、日光、甲府、郡代、人足寄せ場、伏見、大阪、奈良、堺、長崎、佐渡、駿府など、場所によって形がちがっていた。また、同じところでも、罪の種類によって入れ方が変えてあった。しかし、この刑は、主刑ではなく、他の刑罰の付加刑として行なわれたものである。

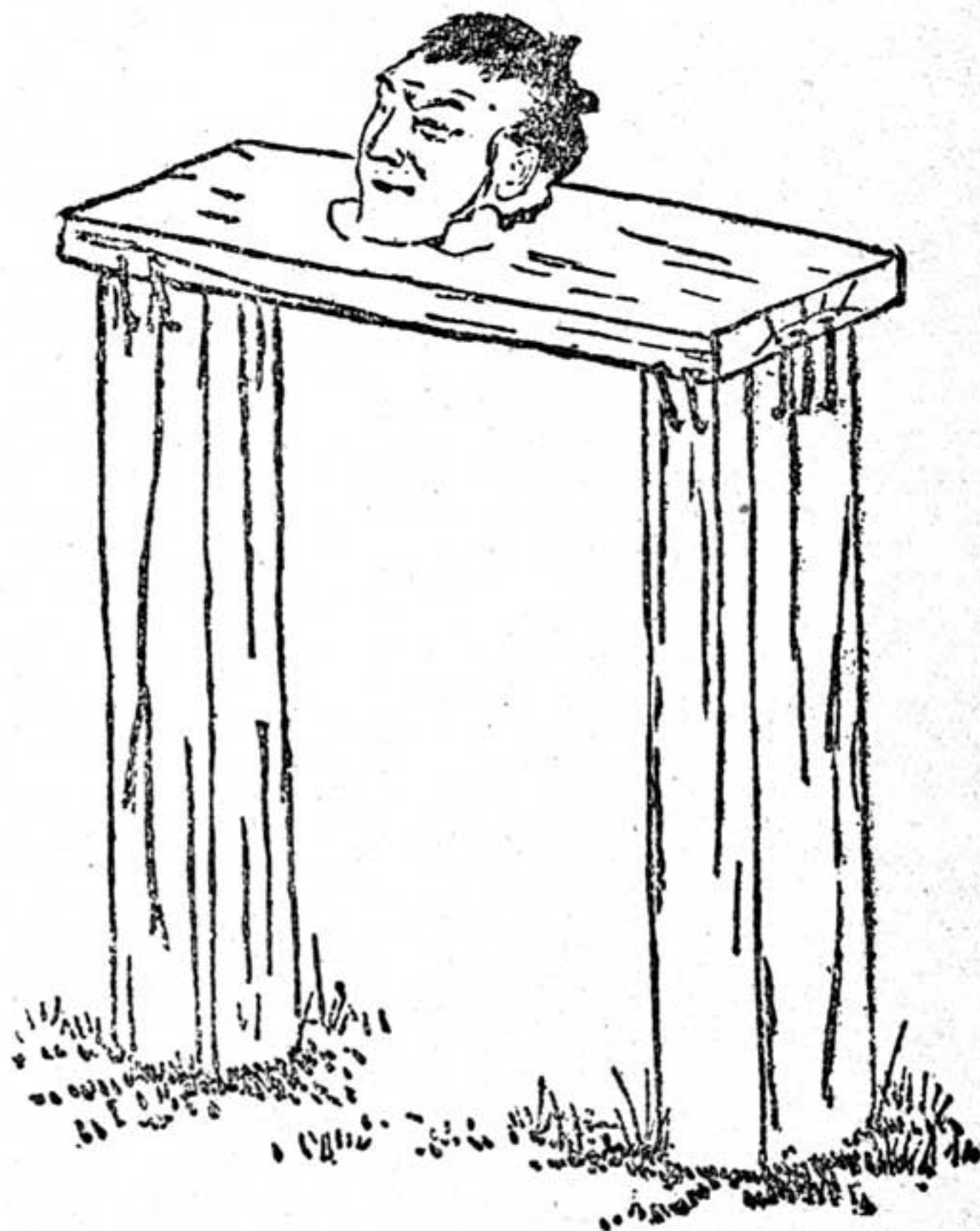
獄門

獄門は、徳川時代に行なわれた刑罰で、さらし首のことである。

獄門にする罪人のあるときは、小伝馬町の牢屋敷内で首を切り落とし、非人にその首を洗わさせ、それを俵に入れて、町方与力、同心が付きそって、獄門の刑場へ運んだ。

刑場は、品川鈴ガ森、または千住小塚原であった。

刑場の獄門場には、モミの二寸板で作った



獄門——首掛けの長さ4尺、幅8寸、厚さ2寸、足は4寸角で長さ6尺、土中が2尺5寸、木はツガ。板は裏から釘2本で打ち首を刺す。

高さ六尺三寸、長さ四尺五寸、幅四寸の獄門台を据えつけ、そのそばに、捕り物に使用する三つ道具と、罰状を書いた捨て札とを建てておき、番小屋で非人が番人した。

この獄門は昼間は人の見せしめにさせるために首をさらしておくが、夜になると、しょう油の空樽で首をかぶせておいた。こうして三日二夜さらしたうえ、弾左衛門から町奉行

へうかがいを立て、それから定め地の地へ埋葬したが、罪状を記した捨て札だけは三十日間そのままにしておいた。

斬罪

同じ罪人の首を切り落とす刑罰にもいろいろあった。斬罪、切腹、死罪、下手人の四種



斬 罪——右は刀をふり上げる首打ち役の同心、中央の目かくしした男は受刑人。左は介添えの非人。

で、これは罪人の身分と犯罪によって区別されたのである。すなわち、斬罪、切腹は武士に対する刑罰で、死罪、下手人は平民に対する刑罰であった。

まず、斬罪に処すべき武士があると、三人の奉行が立ち会いのうえで、その罪跡をくわしく調べて、斬罪の御証文を作って、これを御老中に提出する。御老中は、この御証文に

連判して將軍に奉った。將軍は、それを見た上で、許可の旨を朱で書き入れて、御老中を経て係りの奉行へ下げもどす。この朱書の入った御証文を赤紙御証文といった。

この赤紙御証文が下がると、罪人を評定所へよび出して、御証文を読み聞かせ、刑を言い渡す。それが終わると、ひとまず牢屋敷へ戻るのであるが、帰る時は、来る時よりも警

衛が嚴重になり、かごかきの人数もふえて、走れるだけ早くかけてゆく。これを「追っ立て」といった。

処刑は、千住の小塚原で行なうことになっていたので、牢屋敷から刑場までは、窓を荒格子にしたカゴに罪人を乗せて、与力、同心もまたカゴに乗って、例の「追っ立て」でかけつける。

刑場には、罪人の首を切って落とす首穴がこしらえてあって罪人はその前へ引きずられていく。

二人の非人が罪人の両腕を右左に捕えて、一人の非人が縄を持ちながら、罪人の首を前へつき出させる。そして、罪人の左側に立った首斬り役人の同心が一刀引きぬいてふり上げると、縄を持っているうしろの非人が、罪人のノドにまいた縄を切る。これを合図として発止と一刀斬り下げて、罪人の首は首穴に落ちるのである。これには、目かくしをする場合と、素目のままする場合があり、また、下手に首を切って、首が穴に落ちずにそのままぶらりと首のつけ根についたまま罪人の息が絶えていないこともあった。

切 腹

切腹は、武士であるということを実感させるために、特別の寛典をもって、おおせつけられた。

徳川時代における切腹を行なう形式は、庭にタタミ二枚をならべ、その上に、あさぎ色木綿の五幅蒲団を敷き、さらにその上へ小砂をまいた。そして、左右と後ろの三方に、白木綿の幕をはりめぐらした。この幕外の右のほうにムシロを敷いて、普通の幕をはり、ムシロの上には棺桶と白張り屏風半双を置いて

ここに介錯人、介添人、死骸とりかたづけの足軽七、八人、目付役、徒士目付らがひかえる。

定刻になると、検使の正副二人と、徒士目付二人が座敷に着席して、徒士目付が、「切腹人差し出で候え」と言う。その声に従って介錯人と介添人が幕内に入り、検使のほうに向いて一礼して切腹席のかたわらに着く。続いて、切腹人がたぶさをうしろへ折り曲げ、白衣に水色無紋のかみしもを着て、白たびをはいて入ってきて席に着く。

そして切腹人は、検使に一礼して、介錯人に身分をきく。すると介錯人は、何役をつとめるもので、何のなにがしと名を名乗り、「不肖ながら介錯つかまつる、お心静か」と挨拶する。すると切腹人は、「それは千万御大儀でござる、何分よろしく頼み入る」と挨拶を返す。その時、足軽が土器盃と、土器に塩を盛った折敷と、水を入れた銚子を切腹人の前へ進め、末期の盃をさす。これは、出血を少なくするための一種の血どめ法である。

それが終わると、別の足軽が、折敷に切腹刀を載せて進み、膝先五寸ほどのところへ置く。この切腹刀は、切先を五分ほど出して、そのあまりは紙でまいてコヨリで四力所結んである。

切腹刀のかわりに木剣や扇子を用いることもある。その場合は、切腹人が手を伸ばして折敷を取ろうとした時、不意に介錯人が首を打ち落とす。切腹というより打ち首である。

真剣の場合は、これを腹に突き立てたまま引き回してはいけないのである。しかも、その突き立てるのも、五分以上深く突いてはいけない。なぜなら、そうすると、出血がはなはだしく、時には、はらわたが出て、席を汚すからである。しかし、切腹の言い渡しに対して、不服な者は、故意にそうした法則にそむいたりすることもある。

一方、介錯人は、切腹刀が真剣である場合には、首を切り落としてしまわないで、ノドのあたりを五分残して、首が胴体からはなれないように切る。もし、切腹刀が真剣でない木剣か扇子のときは、首を一気に打ち落として、検使に首実検を乞うのである。死体は、切腹人の家族を呼び出して下げるる。

死罪、下手人

町人の打ち首である死罪、下手人の処刑法は、御証文の手つづき、申渡しの場合は斬罪と同様であるが、小塚原までつれて行かず、

牢屋敷内で行なうことになっている。

すなわち、いよいよ処刑が決まると、三人の非人が、罪人を牢屋敷内の首斬り場へ連れて来る。そして、半紙二枚を二つに折って、折り目へわらの縄を通して目かくしとし、首切り穴の前へ引きすえ、三人の非人が両腕と背中をおさえて、罪人の首をつき出させ、斬り方の浅右衛門が切り落とすのである。

それを見届けて町方の与力が帰ると、浅右衛門は、死骸からキモを抜いて取って帰る。あとかたづけの非人たちは、罪人の衣服、下着からふんどしままではぎとって役徳する。

罪人の死骸はその日のうちに小塚原へ持って行って、引き取り人があれば引き渡し、なければ小塚原の常行庵に埋葬した。

下手人と死罪の差は、下手人は、当人だけの死刑であるが、死罪には、欠所という付加刑があつて、その遺族の財産まで一つ残らず官に没収されたのである。

さらし

さらしとは、罪人をにぎやかな町中へつないで、一定の期間、衆人の前へ面をさらさせる付加刑で、突き殺し、僧侶の女犯、心中未

譚奇俗風報画

妖美凄絶の迫真緊縛写真百数十葉と、豪華艶麗の悦虐名画数十点を一堂に会した目で見ると変態風俗絵巻。これ一冊で十分に堪能できる斯界最初の画報！



どのページをひらいても、溜め息のするほどの迫力あふれる女体緊縛。いまだき、ちよつと見られない世界の名画秘画のかずかず。愛好者は座右にゼヒ一冊を備えて、長くお楽しみいただける豪華版！
 〆定価二八〇円V

遂者などは二日ないし三日間さらしたうえ、ノコギリ挽き、またはハリツケに処した。さらした場所は、日本橋は橋のほとりに、間口五間、奥行三尺のこも葺き屋根の小屋を作り、三方をムシロで囲い、小屋の前へ、竹で二重の柵を作つて、衆人の観覧に供した。

そして、朝、辰の上刻じょうこく（午前八時）に、小伝馬町の牢屋敷から罪人を引き出し、モッコに乗せてさらし場につれて来て、本繩のかかったまま小屋の中の柱に縛りつけ、その前に罪状を書いた捨て札を建てておいた。こうして、夕暮れの七つ（午後四時）になると、ふ

たたびモッコにのせて牢屋へ戻した。この、さらし小屋の番人は非人がつとめた。僧侶をさらす場合には、五、六人ずつかためてさらし、心中未遂者は男女両方、あるいは一人が死んだ時には生存者の一名をさらして、非人に下げ渡した。
 また、吉原の郭内くるわで罰を犯した者は、大門口でさらされた。

その他の刑罰

なお、今まであげたほかに、絞罪こうざい（首を絞めて殺す）、格殺かくさつ（太い棒でなぐり殺す）、梟首きようしゅ（首を切つてオウチの木枝でさらす）、つぶて屍（額と両手を板に釘付けにして腹部へ矢を射る）、かつ鼓く（殺してその血を鼓にぬつて打つ）、三族の罪（当人ばかりでなく、その三族までを一緒に死刑にする）、徒刑とけい（囚人を労役に使用する）、笞刑たいけい、杖刑じょうけい（罪人の身体をムチあるいは杖でたたく）、引き回し（罪人を馬に乗せて町内を引き回す）、追放、遠島、たたき（ムチで罪人をたたく）、閉門、逼塞、遠慮、戸ノめ、押し込め、奴（貰い受として謹慎させる）、なければ牢内にとじこめておく）などがある。

変態見世物総まくり

入 谷 大 介

だいたい、見世物というと、インチキかイカモノばかりで、いわゆる変態あるいは異体であって、常態なものは見世物にならないといってもさしつかえないほどである。

ロクロッ首にしる、一寸法師にしる、さらに人魚とか、眼球の力持ちとかいうものでも、それはみな、ことごとく変態であって、決して常態なものではない。

ただ、その変態の程度によって、世人の好奇心をそそり、見世物として珍重されるのである。それゆえに、見世物につかわれる道具も、動物なら白いサルとか、三本足のニワトリとか、二つ頭のヘビなどがあり、植物なら、菖蒲魚^{しょうぶうお}、山芋^かの化したウナギ、逆さ竹、片葉のアシなどがあるが、それは偶然に出来たものとして、オカシナ物とし

か受け取れないが、人々が見ておどろくのは人間の場合である。ここでは、もっぱら人間に関する変態的なものを挙げてみる。

足 芸 の 女

たしか明治四十年ごろのことだったと思うが、大阪難波新地の妓楼の主人が、六人の男女を殺傷した事件があった。その時、芸者見習いの妻吉^{つまきち}という女が、両腕を切られて、その後、ついに足芸人となり、日本全国を興行して歩いていった。この女は、昭和十年ごろまで大阪に存命していた。

この種の足芸人は、妻吉ばかりでなく、古くからあって、両足だけで、琴をひいたり、三味線を鳴らしたり、小さな針の穴に

糸をおして裁縫もすれば、文字も書き、半弓も引くといった具合で、実に見えて感心するほど器用なものであった。

そのなかでも、とくに有名なのは、山鳥金太夫、早咲小梅などであった。

『均庭雑考^{きんていざうこう}』という本にもあるが、その一部をみると、

「慶長ころの古屏風に、京都四条河原で、足にて種々の業をする見世物の絵あり、若き女ありて、弓を射、太鼓を打ち、紙を切り、盆のうちの豆を選びかぞえ、縄をない、糸車にて糸を紡ぐ^{つむ}」

というのがある。それから見ても、古くから行なわれていたことは確かである。

これらの足芸人の多くは、妻吉のように災難によって両手を失ったもので、仕方な



しにその道に入り、ついには熟達して、芸が身を助けるような不幸な目にあったのであろう。

腹芸の男

今でも出雲名物の安来踊りには、腹芸のじょうずな男が出て来て、いろいろな珍芸を演じているが、今の腹芸は、芸といっても、趣向がきわめて簡単で、ただ腹へ、男か女の顔をえがき、腹部をふくらませたりへこませたりするだけで、はなはだ物足り

ない感じがする。

これにくらべると、天保十五年に、大阪から江戸に出て来て、江戸ッ子のどきもをぬいた玉本無腹の腸芸は、実にうまいものであったといわれている。

腹へ福助の顔をえがき、大頭をかぶっておどるのはそれほどでもないが、その福助の顔を、自分の口にくわえた筆で、自分の腹へ、おどりながらえがくたくみさは、いかに熟練しているとはいえ、まことに鮮やかであったと聞いている。

さらにおもしろいのは二見浦ガの腹芸で

まず、腹で大波小波を披露し、それが終わると、腹の皮を背骨にひっつけてしまい、そのへこんだところへ祝燈をあげると、三個の燈明をつけてあるくという、放れ業である。これが評判となって、浅草の奥山や両国で興行したそうだが、いずれも大入り満員であったようだ。

その後、腹でタバコをすう女が現われたが、彼女は、キセルをヘソへ当てがって吸い、口から煙を吐き出して見せた。だが、これは、あまりにもヘンだということで評判にはならなかったようである。

眼球の力持ち

力持ちの見世物はたくさんあった。だれでも知っているのは、女の力持ちである。これは、腹の上に米俵を六、七俵積み重ね、その上で子供にすもうをとらせるとか、モチをつかせるとかするのである。

延宝六年、泉州の堺で生まれた赤ン坊が四歳になると、石ウスに銭四貫文をのせて持ち上げたという話もある。

天保十二年には、江戸に來た齒力鬼右衛門

門というのが、大きな板をくわえて、その上へ米俵を乗せたそうさ。しかし、こういう例は、ほかにもたくさんあった。

同じ天保十二年十一月に、大阪から江戸へ下った若松出目太郎、彼は生年十五歳、この男が、目玉で力持ちをする見世物はものすごく、恐らくは空前絶後の放れ業だったろう。

この男の目玉は、生理的に、常人の組織とはちがっていたと見えて、舞台にのぼると、いよいよこれから芸当にとりかかろうとする前に、持っている扇子で、目玉をちよちよとつつくと、両方の目玉が、五、六分ほどびよこんと飛び出た。その飛び出た眼球へ、はじめは五貫目ほどの石をつるし、ついで、しょう油樽の中味の一ぱい入ったのをつるし、さらに、四斗入りの米俵をつるし、最後には、錢五貫文をつるして、舞台中を走り回ったそうである。

大丸と大陰茎

江戸末期の政治の頹廃したところには、今から考えると、言語に絶したワイセツな見

世物がすくなくなかった。

まず、男でいうと大率丸である。

牛込市ガ谷四丁目の裏店うらだなに住んでいた伊豆生まれの男の率丸は、米五斗ほどを袋に入れたくらいの大ささで、形が太く、足を前のほうに組んですわっていると、頭より率丸のほうに少し高く、前から見ると、身体は陰のうに隠れて見えなかったというので、ものすごい評判になった。

さらに、東海道の戸塚に、大率丸を持った男の乞食がいて、流行歌にうたわれたほど有名であった。

もう一つは、天保六年、江戸で見世物に出た、〃今道鏡〃と称する男の大陽物であった。

女相撲

江戸で女相撲が初めて行なわれたのが延享二年、両国であった。そして、宝暦、明和を経て、天明年間に禁止された。

ところが、文政九年になって、女とメクラの男との取り組む相撲が、上野の山下で興行されて、都人の好奇心をそそった。

男女の力士各十一人、女は淫売婦上がりや乳母などの年増醜婦で、しかも相手は目の見えない不具者であるにもかかわらず、珍興行であるので、大変なにぎわいを見せ、この見世物は大いに繁盛した。

女相撲は、昭和のはじめごろまで、ところどころで見られたが、当局によって、追いはらわれた。しかし、ぷつぷつとなくなったわけではなく、その後も、全国各地を堂々と巡業して歩いていった。取り締まりのあまりうるさくないところでは、男子の飛び入りを看板にして、もの好きな男たちをよろこばせていたのである。

女相撲といっても、せいぜい多くて二十人ぐらいであったから、相撲ばかりを見せているわけではなかった。

そればかりやっていたのでは、くたびれて、そう長くはつづかないし、客もしまいにはあきてしまう。そこで、余興として、舞踊ちからわざや力業ちからわざをして見せた。

どんなことをするのかと言えば、舞踊では「お目見えかっぱれ」「相撲じんく」「いちやな踊り」「源太踊り、どじょうすくい」など、下着をとってちらちらさせるような

ものばかりであった。また、力業曲芸としては、「蓮台渡し」「七人娘曲芸」「腹上のもちつき」「歯力曲芸」などであった。

もちろん女力士たちは素っぱだかではない。うすい肉襦袢を着て、猿又をはき、その上へ締め込みをしているのである。源太踊りなどでは、特別に派手なはんでんなどをひっかけて、勇敢に土俵の砂をふんでおどるのである。

力業の蓮台渡しというのは、あぐらをした一人の女の上で行なうので、胸と両足の膝の上へ一人ずつのせて両手で蓮台をくみさらにその上へ一人乗せて、上下させる簡単な芸当である。

七人娘曲芸というのほとんど同様であるが、一人が、幅広いバンドを利用して、前後左右に四人、肩に二人、合計六人を支えて回りながらおどるのである。

腹上のもちつきは、歯力曲芸とともに大変な呼び物になっていた。腹の上へ二十貫あまりの土俵を六俵、合計百二十貫を積み上げ、その上へウスをのせて、二人の力士がもちをつくのである。

歯力曲芸は、めったな者には出来ない。

二十四、五貫の土俵を口にくわえて、胸の辺まで持ち上げるのである。

これについて思い出すのは、「諸国見聞図絵」の中に、碁盤でろうそくの火を消す大力女の見世物のことが載っている。それには、

「文化元年甲申七月、下谷士貴店しきだなにおいて大阪下りの大女・力持ち淀滝、年ごろ二十七、八、身の丈七尺三寸……云々」と添え書きがしてあった。

わいせつ見世物

江戸時代には、猥せつ見世物は、両国のあたりで行なわれたものである。中でも有名なのは、「天の意和戸いわと」という「それつけ、やれつけ」のうたで名高い女陰の見世物、ヘビ使いがヘビを女の秘所に入れる見世物などがあつたが、これらはみな、窃視せつし狂きやうを満足させるためのものが多かった。

一妙開程芳いちみょうかいていほう（国芳）の画作「うたたねの遊女物語」の口絵には、次のような言葉がかかっている。

「武蔵、下総の両国に、再びひらく花の色

町、その入口に天の岩戸の御帳とびらひらいてそりや出た、またでた、そう出ちやたまらぬ、上見て下見て、八文じゃ安いもんだ、色の好きなやつ、目つきでしれる。きらいなおかたが、なにあるものか。そのわけだんヨ、このわけだんヨ」

「守貞漫稿」の大阪南今宮村戎神社詣での項には、

「陰門を見世物とすることは、大阪はこの両日（正月九日、十日）のみ、江戸は両国橋東の小屋にて、年中これを行なうなり」とある。

なかには、単なる陰部の見世物以外に、奇形なのを衆人に展覧させたりした。

「鍋島百物語」には、

「越後国新潟佐和村の源右衛門というものの娘、ことし二十一歳にて、生まれつき愚かなるが、かつ性器の陰核の長きこと尋常ならず、引きのばし結ぶに至る。この女、ついに山師の手に渡り、両国広小路にて見世物となりしが、それより所々の見せものとす……云々」と記してある。

しかし、ただながめているだけでは、見物衆もだんだん満足しなくなるようになって

てきてしまったので、小屋のほうでも、客足を引きとめるように、いろいろな工夫をこらして、竹管でもってお客にこれを吹かしめるようにした。

それは「守貞漫稿」に、次のように書かれてある。

「大阪正月十日戎には、灘波高倉辺にムシ口囲いの小屋を造り、中央に床を置き、若き女に紅粉を粧よそおわせ、華やかなる古掛けを着せ、木の床しょうど几に腰を掛けさせ、女の背腰以下は板壁にて、木戸以外より女の背を見せ、髪飾り多く、掛けの裾を右の板壁に掛け、美女を描きし看板を木戸の上にかけて、八文ばかりの銭をとり、女の裾を開き、陰門をあらわし、竹筒をもってこれを吹く時腰を左右にふる。衆人のうち、これを吹いて笑わざるものには賞を出す。江戸は両国橋東に、年中二二場あり、小屋および女のいでたち、前に同じ。あるいは片輪もの、因果娘、蛇つかいの類もっぱら陰門をさらして見世物とす。これまた八文。これらの見世物以上に「やれつけそれつけ」なるものがあつた」

これらの多くは、演者自身が露出症がほ

とんどであつた。

これらの見世物は、明治になるとともに禁止されたが、それでも地方などでは、往行なわれていたと見えて、明治五年四月の「愛知新聞」には、次のようなことが載っていた。

「開明の時に当たり、仏事の盛んなるは、仏氏の、いわゆる不可思議か。県下二月朔日より以来、開帳ある、およそ四十六カ寺なりし。右開帳のうち、丹羽郡飛保村曼陀羅寺は格別発向なり、見せ物ことに多し。なかんずく奇なるは、男女和合の図、幕を開けば一幅の絵さながらに両身一塊と、実に殷紂沙丘の後三千年、かつて公然と見る目なし。ある人いわく、このごときは、文明開化とは言わんか、また自主自由の権とされんか」

それどころか、大正のころには、福岡県の、川筋という遠賀川沿岸の炭坑地、その伊田町のはずれには、「やれつけ、それつけ」そっくりそのままの見世物が、あらわれ、見物衆をさわがせたことがあつた。そこには、数本の吹き矢竹がそなえてあつて、五分間笑わずに、女体に矢を吹いたら、反

物やめざまし時計を懸賞として出した。料金は一回十五銭だったというから、まことに驚くべきことであつた。

放屁名人

安永三年ごろ、両国の見世物に、霧降花咲男さきおという放屁の名人が現われて、大変な人気を呼んだ。屁をかがせてお金をもうけるというのだから、ずいぶん人をバカにした話だが、これまた、ワイワイおしかけて見にいっただから、いよいよもって気が知れないと思うのである。

変わりものの平賀源内は、これを見て、ひどく感心し、「放屁論」を書いたが、飄逸洒脱、実に古今の名文であつた。

また、同じころ、曲屁福平という男が大坂へ下つて、道頓堀で屁の曲ひりをやっで大当たりを取った。この男は、三味線や小唄、浄瑠璃に合わせて面白く屁をひりわけたというから、器用な男もあつたものである。抜け目のない大阪人は、さっそく放屁の薬を売り出して、一もうけしたというから、その人気、おして知るべしである。

屁も、こう名人になると、どうしてなかなか大したものである。

見世物小屋

田舎の町に秋の祭りが来る。

一本筋の町通りを、行ききったところに鎮守の社がある。

神社の境内には、ふうせん屋やあめ屋、駄菓子店などがずらりとならぶ。

こうした祭りの風景に、決まりきつてあるものは、見世物小屋である。

「いらっしやい、いらっしやい、あれあれあの通り、顔は女で、身体は熊、生まれましたは北海道北見の国——」

などと、木戸口でさげふ男、大人幾錢、小人幾錢の札がかかっている。

見世物小屋は、田舎の村や町ばかりではない。都会の盛り場、縁日、いたるところに見いだすことが出来る。

ひと口に見世物といっても、その種類はいろいろある。

江戸時代においては、前にも書いた通りかなりわいせつなものもあったが、今日で

は、取り締まりが嚴重なので、そういうものはあとを断った。また、あからさまに観衆を欺瞞^{ぎまん}することを目的としたものも、次第に数が減って来たようである。

一丈二尺の板に血を塗り、

「さあさあ、いらっしやい、一丈二尺の大イタチ、大イタチ——」

などと木戸口で大声をあげ、客を呼びこむが、中に入って見ると、板血^{いたち}である。

「なんだバカにしやがる」と憤慨しても、あとのまつり、もともと欺瞞が目的だから木戸錢など払い戻すわけがない。

こういう種類のものはほとんど、今はなくなつたが、もともと見世物そのものが、要するにゴマ化しでもなんでも、人の好奇心をひけばそれでいいのであるし、好奇心をひくような材料が、そんなにあるものではないから、そこに材料作成の手段が生じてくる。

「いらっしやい、いらっしやい、世にもあわれな人面獣身の子供、死んだものや模型のものとはちがい、生きているのが自慢」といって呼び込みをやる見世物小屋に、何があるかと思えば、その正体は、動物の

「なまけもの」であつたりするのは、いまだにあとをたたない。

見世物のカラクリ

豚の大腸を切断し、その中へ生きたウナギを入れておけば、中のウナギは見えないで、あたかも大きなミミズのように見える。それを、エジプトのナイル河で捕獲した大ミミズだといってお客の目をごまかす。

ロクロ首は、二人の人間を一人のように見せるのであつて、ただそれが、チョットした巧妙なシカケなので、田舎の者がだまされるのである。

ひくい台を設けた地上に、二尺四方、三、四寸高さの板をおき、その板の間から女の生首が出ているのを生首娘というが、その実、生首娘たる本人は、地下へ掘り下げた穴の中へ座布団を敷いて、一日中すわっているのだ。

こんな具合で、そのほかにも、いろいろあるが、それらのすべては、このようなカラクリになっており、ニセ物でない物はないといつていいくらいである。

マゾ妻・二代目 矢作ヨネ

—— 打たれて、蹴られて、縛られて、焼け火箸で死んだ女 ——

浜 村 利 男

一人は死に、二人は逃げ

有坂喜一（四二）は、こんどで四度目の妻を迎えた。最初の妻ハナは死亡し、次に貰った咲子、三度目の妻良子の二人は、ともに結婚早々、喜一を嫌って逃げ出してしまった。

良子が去ってから喜一は、ながい間やもめ暮らして勝手気儘な放らつな生活をしてきたが、そうしたうちにも、何か空虚な、ものたりないものをおぼえ、一日としてみち足りたと思う日はなかった。それが、偶然めぐり会った春江を知ってから、妙にうまが合うばかりか、好みの一致するところから、これまでも違って喜一は、毎日が楽しくて仕方がなかった。

なかでも喜一を一番よろこばせたのは、夜

の二人だけの秘密だった。喜一は、ふだんはなんでもなかったが、夫婦差し向かいになって落ち着くと、それまでとは打って変わり、狂暴性を発揮し、妻をいじめ、さいなむ奇病を持っていた。そのため、これに辛くも耐え忍んでいた最初の妻は病弱なところから、いじめぬかれてこの世を去り、あとの二人は逃げ出すといったことになったのだが、それでも、妻を迎えて一週間というものは、ネコをかぶっていた。ところが、持って生まれた病いは、いかんともし難く、十日になるかならぬかのうちに、本性をむき出し、「きょうから、お前がいやだというくらい可愛がってやるぜ。さあ、お前とオレの二人きりだ。着物を脱いでハダカになりな。早く。なにも恥ずかしがることなんかないさ」

と、パンツ一枚のハダカにし、もしこの場合いやだといって駄々をこねようものなら、「オレはお前の亭主だぜ。亭主のいうことがきけねえのか」

と、いや応なしに、着ているものを全部剥ぎ取ってしまい、恥ずかしさのあまり小さくなってオロオロしている妻をしばらくためつ眺めつしたあとで、いきなり、力いっぱい、その顔めがけて殴りつけ、それから、ところかまわず、踏んだり、蹴ったり、殴ったり、の乱暴をほしいままにし、最後に、抵抗する力さえ失ってぐったりとなった身体に、夢中でしがみつき、あくことなく抱擁を重ねるのだった。

こんな喜一に、はじめてでつくわした妻は面くらってしまう。そして、それが二度、三



利

度と重なり、やっと喜一がサディストであることをさとった。

正常な妻が、こんな夫を持った場合、精神的にも、肉体的にも、とうていついていけないものではない。まして喜一のそれは、極度に昂進しており、日とともに、その加虐行為は激しさを加わえていった。

これではたまったものではない。しかも、それが毎夜行なわれるとあっては、逃げ出すほかはなかった。

それでも最初の妻のハナは、古風な貞淑な女であったから、どんなにいじめ抜かれても耐え忍んで、じっとこらえていた。そのため、もともと身体が弱かったせいもあって、死んでしまったのである。さすがに喜一も、ハナを失った当座は、

「オレがハナを殺したんだ。ほんとに悪いことをしてしまった」

と、思い出しては涙を浮かべていた。

だが、それもながい間ではなかった。ハナをなくして打ちしおれている喜一に同情した知人が、

「死んでしまったものを、いつまでもよくよしていたって、帰ってくるもんじゃない。新規まきなおしに、新しく女房を貰ってみたら

どうだ」

といって世話してくれたのが咲子だった。

咲子との仲も、はじめの一週間ばかりは、うまくいっていた。しかし、そのメッキがはがれるに及んで、びっくりした咲子が、家を飛び出したことによって終止符を打った。

この咲子の場合に限って、あとの二人とは違い、仲人を通しての結婚であったから、当然、慰謝料を請求され、いまもって喜一は、会社から貰う月給のなかから、なにがしかの金をはらっている。それに対して別段不服らしい様子を喜一が見せないのは、自分でも当然のことと思っているからだろう。

だが、良子の場合は、浅草で飲み屋の女中として働いていたとき知り合って、妻として迎えた関係もあって、驚いて逃げ去っていったしまったまま、音信不通となっていた。

咲子と別れて良子を迎え入れるまでの間は、わずか三カ月足らずで、しかも良子と同じ屋根の下に、夫婦として暮らしたのは、たったの十日間だった。十一日目には、早くも良子は逃げてしまったからである。

道でぶつかった女

四度目の妻は、春江といった。喜一が、こ

の新しい妻の春江を知ったのは、全く偶然のことだった。良子に逃げられてから喜一は、十数年ものながい間、ひとり身の気安さから好き放題のことをして暮らしてきた。それが幸か不幸か、春江にめぐり会わせたのだ。

それは、ある夜のことだった。家に帰ったところで冷たい万年床が待っているに過ぎない喜一は、会社が終わると、いつも行きつけの銀座の喫茶店で時間をつぶし、その足で新宿に出て、角筈のバーをのぞいたあと、食事をして、大通りを横切って二幸裏のゴミゴミした薄暗い路地を抜け、電車通りを松竹映画劇場のほうに向かって歩いているときだった。ふいに、何かにつまずいて足を取られ、どしんとだれかにぶつかった瞬間、

「やっ、失礼！」

と叫んで顔をあげると、これがまた、年のころなら二十七、八歳の、妙に色っぽい女だった。女は一見、人妻といったタイプで、しとやかに喜一をみて、

「ほんとに道が悪くて」

と微笑した。

その笑顔を見て喜一は、死んだハナに似ていると思った。すると、急に近親感が湧いてきて、見も知らぬ女とは知りつつも、

「お急ぎですか。でなかったら、お詫びに、お茶でも……」

と誘った。女は、これに対して、「よろこんでお伴いたしますわ」と、意外に快くついてきた。

それから二人は、近くの喫茶店に入り、はじめのうちは世間話などしていたが、そのうち女が、

「奥さんはいらっしゃらないんですか」

と聞いたことから、お互いの身の上話になり、二時間近くも話し込んだ。このとき女は喜一に、

「私の夫は、某大学の教授なんです、学者肌で、研究のほかは、家庭はもとより、私のことも省みようとはしません。ですから、恥ずかしい話ですけど、私とは、夫婦とは名ばかり、たまに、それもお義理で、夫婦関係を結ぶといったところです。そんな私に、幸せなんてあるでしょうか。私は、それを少しでも忘れようと、毎日、あてもなくぶらぶら遊んでいるのです」

と聞いていた。これを聞いて喜一が、
「そんなにいやな生活だったら、いっそ別れてしまったらどうなんです、ご主人には悪いけど」

という、

「それも、何度も考えてみました。でも、私は駄目なんです。それが、私にははっきりわかるんです」

と急にうなだれて、力なくいった。

「どうしてです？」

「それは、ちょっと申し上げられません」

「そうですか。私にできることなら、お力添えしようと思ったのですが、残念です」

「ご好意は、うれしくちょうだいしておきますわ。決して、悪くお思いにならないでください」

女が言葉を切ったのをシオに、

「もう、何時ごろになるかな」

とつぶやいて、喜一が腕時計をのぞくと、一時をとうに過ぎていた。そこで驚いて、

「奥さん、どちらへお帰ります。もうすぐ一時半になりますよ」

といって女の顔を見ると、

「家は鎌倉なんです、今夜はホテルに泊まりますわ。行きつけのホテルが日比谷にあるんです」

といった。

「ご主人は心配なさらないんですか」

「いつものことなので馴れていますわ。それ

でも、何かあるといけなから、ホテルで電話します。その点、どうぞ心配なく」

「では、いきましようか」

喜一が、こういつて立ち上がると、女も腰をあげた。

外に出ると、こんどは女が、

「あなた、お帰れになれて。もし、なんでしたら、私と一緒にいらっしゃいません。私なんか、おいやでしょうけど」

というので、

「そちらがご迷惑じゃありませんか」

女のいうことを、喜一は、半信半疑で聞いて、それとなくいった。

「いいえ、ちっとも。むしろ、私のほうで誘いたいくらいですわ」

いじめてくれと言う女

ホテルの玄関で車をおりると、女は、

「あなたは私の主人なのよ、わかって」

と、いたずらっぽく笑うと、先に立ってドアを押してなかに入っていた。部屋は三階の中央で、道路に面していた。喜一が、馴れない洋室に入って突っ立っているのを見て、女はかたわらの椅子に腰をおろし、これまでと違って態度をぐっとくずして、

「ここにいるのはあなたと私の二人きりよ。あなた、なんにも欲しくない。私が欲しくないの」

と媚びた目で笑った。喜一は女の言葉を聞くまでもなかった。

「奥さん！」

一声、低く叫んで、女に飛びかかっていった。女は、それを巧みにいなして、

「あとで後悔なさるんじゃないかって。だって、いまのうちにやめになっておいたほうがよくなってよ。私って、さっきもいったように、変な女なのよ」

落ち着いてゆっくりいった。だが喜一は、女にすがりついた手を離そうとしなかった。

それを見ると女は、

「そう。ではいいのね。だけど、あとでいやだなんていわないで頂戴」

そういったかと思うと、彼女は、ひしと喜一を抱きかかえて、夢中で接吻した。生暖かい、ぬめるような甘い唇が、喜一の唇をふさぎ、狂おしく吸いついた。こんな情熱的な接吻を、喜一は、いまだかつて経験したことはなかった。

長い長い、死ぬほど強烈な接吻が終わると、女は荒い息づかいで、喜一の手をしっかりと、

りつかんで立ち上がり、

「さ、あっちへいきましよう」

と、ベッドのほうへうながした。

喜一をベッドのそばに伴った女は、帯を解くのもどかし気に、着物を肩からすべらして、

「早く、あなたも服を脱いで」

喜一をせき立てて、タックルするようにその身体をかかえ、ベッドの上に、仰向けに倒れた。

「奥さん……奥さん！」

興奮して思わず喜一が叫ぶと、女もうわずった声で、

「駄目よ、まだ駄目」

切なそうにいった。

「そんな、そんなこといったって……」

「我慢して……お願い」

「無理ですよ」

「ああ……ね、私を思いきり殴って。噛みついてもいいわ」

女は、突然、こんなことを口走った。とたんに喜一は、これまでの興奮と違った、ゾクゾクするものが身内を走った。それと同時に、女が、自分のことを変な女だといっていたのは、このことだったのか、と安心した。

そうとわかると、喜一の目は急に妖しくラランと輝きはじめた。そして、まずその手始めに、女の肩にガブリと噛みついて、内股の素肌を平手でピシッと力いっぱい打った。

「ああ、もっと、もっといじめて」

こうなると喜一は、もう夢中だった。ところかまわず殴り、打ち、噛みついて、女に歓喜のうめきをあげさせた。しかし女は、まだもの足りない様子で、

「私を縛って」

と喜一にせがんだ。喜一は、よろこんで、女のいう通りに、腰紐で、足を曲げて、身体のうしろで縛った。

すると女は、この縛り方が気に入らないらしく、

「手ごろしなくていいのよ。もっと強く縛って。思いっきり強く」

といった。喜一は、いわれるまま、力いっぱい強く縛った。こんどは女は、何もいわなかった。さすがに、ちょっと気になるので、

喜一が、

「大丈夫？」

と聞くと、

「いい気持ち。なにしてるの、あなたは私をいじめるのよ。くすぐって、死ぬほど笑わせ

て」

という。喜一は、ワキの下、足のウラ、おヘソのあたりから、首のマワリを、撫でまわした。女は、敏感なところに手がいくと、そのつど、喜一をけしかけた。

このくすぐりでぐったりとすると、女は、しばらく、精根つきたように、身体で息をしたまま、じっとしていたが、いきなり喜一にいった。

「あなた、バンド持っているでしょう。あれで、私を打って」

喜一は、いわれた通り、ベッドからおおりて、脱ぎ捨ててあるズボンからバンドを抜き取ってくると、女をめがけて、ピシッと打ちおろした。

さっと、女の背中に紫色のあとが走った。それをみて、よけい血走った喜一は、またしても、次の手をふりおろした。「あっ！ううう……さあ、もっと、もっとよ」

あとはもう滅茶苦茶だった。喜一のバンドは、間断なく女の身体にくい込むように飛んだ。そのたびに女は、

「ううう」

と、悲痛なうめき声を洩らして、ゆわかれ

たまま、ベッドの上を転々とした。

こうして女が力つきて、声さえあげられなくなったとき、はじめて喜一の手は止み、

「奥さん」

感極まって、女の縛ったままの身体に、ひとと抱きすがり、つかれたように愛撫するのだった。

その間、約三十分、やっと、女が気がついて、

「紐をほどいて」

といった。

喜一はいわれるままに、ゆっくりと紐を解いた。紐が身体から離れるのを待って女は、「こんなに楽しかったことって、生まれてはじめてだわ。私、もう、あなたを離さない」と、喜一にむしゃぶりついた。

こんなわけでこのとき二人は、はじめて肉体関係を結んだわけだが、その交渉中も女は、喜一にタバコに火をつけさせて自分の身体を焼かせるなどの異常性を発揮した。

燃けた火箸で肌を焼く

揃いもそろって異常な二人がめぐりあったのだから、このままで済むわけがない。女は、主人が構わないのをいいことに、その目

を盗み、また喜一は、会社が退けるのを待って、ホテルや旅館で待ち合わせ、二人だけの楽しい秘密に没入していた。

しかし、そうはいっても、二人が別々に生活していることは、いかにも不自然で、何かもの足りないものが感じられた。とくに女は、そうした気持ちがいっそう強く、一ト月ばかり、そんな関係が続いたある日、

「あなた、私と一緒にいたいと思わない」

急にこんなことをいいだした。

「そりゃ一緒にになりたいさ。だけど、君にはご主人がちゃんというるんじゃないか。その君を、僕がどうもできないじゃないか」

「だから聞いてるのよ。大事なことから、その場限りのいい加減なこといわないでね。ほんとに私が好き」

「当り前じゃないか」

「それじゃあ、もう一度聞くけど、あなた、私が死んでくれといったら死ぬ」

「よろこんで死ぬよ、君のためなら」

「ウソじゃないわね。それ聞いたら、私の心は決まったわ」

「……………」

「私、主人とはっきり別れる。あなた、反対しないわね」

<知性書院版>

性の悩みは本書で一切解決致します

<図書目録進呈>

新訂 性技大鑑

性科学研究会編

定価三八〇円のところ

頒価 二五〇円

送料 不要

★夫婦和合と愛情の技術
★現代の性の諸問題解明
△目次・性は人生の根本・男女の性器の構造・性生活を楽しくするため・完全なる性愛……他

新訂 寢室宝典

性科学研究会編

定価三八〇円のところ

頒価 二五〇円

送料 不要

寢室を花園にする宝典！
△目次・性技巧の知識・生理学の常識・結婚衛生学の知識・性医学の知識・性技巧の秘訣……他
全国の書店でお求め下さい。書店切れの節は代金を添えて直接当社へお申込み下さい。代引及び後金は受け付けかねます。

発売元

KK 星文館

東京都神田神保町一 振替東京四八〇二

「もちろんだよ、僕だって、君と一緒にいたいと、まえから思っていたんだもの」

「そうだったの。うれしいわ」

その夜は、ことさらに女は、激しく喜一にせがんで、せめ、さいなまれて、歓喜のうめきをあげた。

こんなことがあって、また一カ月ばかりたつと、急に、女の足が喜一から遠のいていった。そして、さらに一カ月ばかり過ぎて、ひょっくり喜一のまえにその姿を現わすと、

「ごめんなさい、ながい間。もう私、なにかも、あなたのものよ。はっきり別れてきたの」

と喜々としていた。

こうして二人は、天下晴れて、世田ヶ谷に家を借りて新世帯を営んだ。そうになると、二人の異常性は、火に油を注ぐようなもので、だれに遠慮もいらないうところから、日ごとに激しさを加わえていった。そのため、夜ともなると、痛さをこらえてうめく女の声が家の外にまでもれた。これが、口さがない近所隣の評判となり、

「あの家の二人、どうも変よ。変態なんじゃないかしら」
と噂されるようになった。

それも、二人が知らないうちはまだよかったが、二人の耳に入っては、こんなところに一刻もいるのがいやになり、さっそく蒲田に家をみつめて引っ越した。だが、ここも決して安住の地ではなく、一カ月足らずで川崎に移った。

川崎も同じだった。二人は、つくづく人の世をはかなんだ。そこで考えに考えた末、都心を離れて、ぽつんとおかれた家に越そうと相談がまとまり、あちらこちらと足を棒にして捜し回った。その結果、横浜のはずれの保土ヶ谷の田んぼのなかに一軒だけ置き去られたように建っている空家を発見、いそいで引っ越した。ここは、さすがに、じやまされるものはなく、二人に取っては、このうえない楽天地だった。

このころになると女も、喜一も極度にその異常性が進んでいた。ことに女は、普通のいじめ方では容易に満足せず、新しくその手を考へては、喜一に責めさせた。その身体を縛ったうえ、さかさにして青竹で殴り、こずかせたり、噛みつかせたりするばかりか、炭火のなかに火箸を差し込んでおいて、真っ赤になったので、手、足、腹、腰、太腿などにあてがって焼かせた。

火箸で身体を焼かせるときなどは、その焦げる臭いが部屋中に充満し、全くこの世のものとは思われなかった。そんなとき、喜一もだが、女はとりわけ歓喜の絶頂にあった。

苦痛にのたうち回ってうめく女と、顔をゆがめて目を血走らせて責める喜一——そこには、二人だけが知るよろこびだけしかなかった。二人とも汗びっしょりで、ただもう夢中だった。

それでも、いくら歓喜に陶醉するといっても、そこには限度があった。狂いに狂った末、女が力つきて失神してしまうのだ。これを見届けると、喜一は、これまでと打って変わって、やさしく女を愛撫した。

このような狂気にもひとしい生活が、毎日くり返されるのだから、喜一も、女も、目に見えてヤセ細っていった。それに女は、責め、さいなまされて、身体中傷だらけ、しかも生傷の絶えることがなかった。

この傷がモトで、女は、この家に移ってからちょうど三月目に身体を自由を失い、喜一におぶわれて、最寄りの病院に運ばれてきたが、医者も、その着物をはがして見て、身体一面の傷あとに顔をそむけたほどだった。この女が、春江だった。

銭湯ノゾキ話

日 比 野 寛 治

私は風呂屋の三助である。

三助といつても、このごろでは、**「流し」**

をとって背中を洗わせる客がめつきり少なくなつたから、おもな仕事は、湯を沸かすことである。したがって、その役目柄、湯の量や、浴客のこみぐあいを見るため、壁に設けてある穴から、ときどきのぞいてみる。

いい役目だなどと羨む方もおありであろうが、慣れると、全裸にも比較的ビクツカなくなり、和服などの、風にまくれた裾からチラとのぞかれる白い脛や、ショートパンツで自転車にのって通る女の太股などのほうに、興味をひかれるものである。

それはまあそれとして、ここでは、たびたびのノゾキのうちに、かいま見たことを、二つ三つ書いてみようと思う。

オナニズム

浴場におけるオナニズムは、ときどき見られることである。私のいる銭湯は、都心に近いところにあるので、午後の三時前や、十時ごろからあとは客は少なく、しばしば大浴場を独占することができるといふ場合がチャンスである。

中学二年の男の子は下を洗うとき、膝で立つてタイル張りの壁の腰にこすりつけていたが、やがて手ではじめだした。たえず、あたりを見回しながらやっていたが、しばらくして腹部を痙攣的に凹ませながら浴槽の縁へつつ伏してしまった。

十六、七歳のある男（彼は第三国人であるが）は、石鹸を手につけてひねっていたが、佳境の起こらない前に、私が壁をドンと一つ

打つたので、びっくりして浴槽へ飛び込んでしまった。

ある男は、相当な商店の息子で、二十五、六歳の独身であるが、気が弱いというか、どうも内攻的な性質のようで、一見ひじょうにおとなしく見える。この男のことは、二、三回目撃した。あるときは、浴槽内で行なわれた。頭を浴槽の縁にのせて静まりかえっていたが、体を中心に、円形の波紋が絶えず広がって、しばらくすると急に目をとじて、痙攣的に体を動かしていたので、それとわかった。

女の場合は、さすがに少ないようである。中学をおえたばかりの少女は、奇麗な顔立ちであるが、唇厚くて締まりがない。ひとりのとき浴槽へはいる場合は、縁へ両手を後ろざまにつき、お腹を凹ますようにしてこすり

つけ、静かに自分の肉体が湯にひたるのをノゾきながら、ある感覚を味わうようにつかるのである。厚い唇と同じように締まりのない感じだったが、この少女は、いつも立て膝で体を洗うような様子をしながら、立てた膝の外側から手を回して玩弄する癖があったようである。

三十近い、どうも素姓すじょうのよくわからない女は浴槽の縁にもたれて、片手は無意識に湯をチャプチャプもてあそびながら、片手を、やや開いた腿のあいだに差し入れて行なっていたが、オルガズムは特別な表情がなく、ただ手を抜き出してから湯を汲んでかけ、尻のほうから流れていく湯をふり返って、じっと見つめていたので、多分あったのだろうと想像したわけである。

放尿

不届きなのは浴場における放尿である。放尿といっても、やりっぱなしではなく、たいていは、下しもを洗うとき、湯をかけながらひそかにやるのだが、これは、ほかに浴客のあるなしにかかわらないのだから驚く。

何々役所の役人だ、何会社の社員だという威張ったタイプの連中がやるのだから、いっ

そう驚く。

女にはないようだが、尿の代わりに、メンスの赤玉なんかが抜け出るのは、よく見受ける。これは、ひそかに湯の落とし口に投げ込むのだが、ときには洗い桶などの下に隠しておくとみえて、掃除のときに、びっくりさせられる。

恥毛

これには種々雑多ある。

男に、こういうのがあった。メクラで、三十歳ぐらい。白痴であったが、その恥毛は、臍部から広範囲にわたっているが、短くて、疎であった。全体に肥満していたが、局部付近はことに肥満しているくせに、モノは短小で、一見、女性的にさえ見えた。ところが下を洗うとき必ず引き出してよく洗う癖があつて、それによって見ると、ずいぶん長大であったのに驚いたものである。

女のほうは、うっ蒼と繁茂したのや、そして前方に突出したのや、あるいは、その前がやや上方に反っているのや、正面から見て男性的に広範囲にわたっているのや、可愛らしく縦裂の頂を覆っているのや、短いもの長いもの、少ないもの無毛のものなど、多種多様

であるが、たいていは、中央部に一束のよじれた束状のがあるようだ。

多毛は、見るからに凄まじく、縦裂は隠れているが、少ないのは、その薄黒味を帯びた地肌が見えるのだから興味がある。

半島人には無毛がよくあり、寡毛というのが一番多い。内地人なみに多毛なのは、容貌まで内地人のようで、美しいのは、不思議である。

ときにはなんの気なしに穴からノゾくと、ちょうど真つ正面、つい鼻の先に、まっ黒いのをもった、肉づき豊かな腰があつたりして面食らうこともある。また、湯からあがつて、足をふくためうつ向くとき、不注意な女は、後庭や、薄黒い、いわゆる鉄色の縦裂や、それを圍繞するモジャモジャしたのを、残るくまなく後ろざまに見せるので、慣れているとはいえ、やり切れないものである。

小娘の可愛いよりも、年増盛りの熟しきつたのが、なんといつても魅力があり、婆アの、金具のゆるんだガマ口みたいなのは、嘔吐ものである。

それにしても、このごろの若い娘たちは、平気で丸出しにして、かえって肉体の立派さ（？）を誇示している感さえあるのだから、

しみじみ時代の移り変わりというものを考えさせられることも、ときにはある。

ノゾくやつ

女でノゾくのは、決まって、出入りのさい、番台のところから、男の脱衣場をノゾくくらいなものであるが、男は、出入りに番台からノゾくのはもちろん、客のないときは、浴場の中仕切りに伸び上がってノゾく。あるいは脱衣場の男女の仕切りの扉をあけてノゾ



くなど、なかなか努力を惜しまない。ノゾくことの少ない女のうちに、妙なのがいる。

それは、扉のスキから男がノゾいていると気づくと、体をふくにも、わざわざ近くへ行き、そっちへ向いてゆうゆうと体をふくのである。内股をふくときは、片足をくの字なりに広げて見せる女もある。

こうした種類の女は、クロウト上がりか、年増であって、娘にはない。いくら裸体を見

せるのを平気になったこのごろの娘といえども、やはり処女は、同性同士のあいだならともかく、そうでないときは羞恥心が、そうさせないようだ。

番台にすわって

番台にすわるのははじめは女湯のほうはまぶしくて顔が向けられない。それに、いま書いたような種類の女は、裸体のまま近づいてきて世間話などしかけるので、困ることがある。

慣れてくると、男女平等に注意ができるし、裸形の個々の鑑賞も、じっと見つめなくとも、いわゆる心眼でわかるようになる。

おもしろいことには、たまたま町であうようなことがあると、娘はたいてい恥ずかしそうにするが、年増なんになると、さぐるような目つきをするのである。この種の女には、絶対にといいほど醜い女はなく、しかも、決して難攻不落ではないだろうと、私には思われる。

どうも、三助風情の書いたものは、まとももなく、興趣を起こすような名文も書き得ないで、たいへんお屈さまだったと思う。悪しからずご諒願いたい。

▼目で見えるセックス・ドック▲

“男”が立たない場合の悩み解決法

医学博士 松

井 宏

退院が近いというのに

【問い】私は目下、結核で療養所に入院中

のもので、近く退院の運びとなります。実家とは車で五時間ほどかかり、五日目ごとに妻は一人で見舞いに来てくれ、そのたびに妻も楽しみを期待しています。

これは有難いことですが、時々困ったなあと思案にくれることがあります。妻は、判で押したように五日目に現われ、その日はなんとかして……と思います、なかなか私のモノが言うことをきかぬことがあるのです。

なんでも、ヨヒンビンという薬が応急に効果があるとのことですが、どういうもの

でしょうか？

【答え】お尋ねのヨヒンビン剤には、錠剤と注射液があり、神経性の陰萎に向くことになっていきます。

昔から、アフリカの住民は、ヨヒンベという木の皮を煎じて強精の目的で飲んでいきます。

その有毒成分が効果があるので、脊髄の刺激中枢を興奮させるほか、直接に外陰部の毛細血管を拡張してペニスの海綿体に血液を充満する作用があるので、よく応急の催淫薬と考えられています。

市販のものは、錠剤一個中にヨヒンビン

三ミリをふくみ、一回一錠ずつ、一日三回服用するのがふうですが、人によっては、心悸亢進、めまい、口渇、不眠、倦怠、よだれ、尿意、痔出血などが現われますから、よくよく注意して用いないといけません。

やはり、医師の指導下に、服用より注射を試みるのも一法ですが、長期療養者は、むしろ神経を強壮にして、間接的に強精の実をあげることをおすすめします。それには、神経の栄養に必要な燐分が、よく吸収されやすい形でふくまれている神経栄養剤のトノフォスファンが向きます。

これを常用することによって、あなたのコイツス・ノイローゼは、間もなく除きうるでしょう。

課長ノイローゼ

【問い】小生は、厄年の四十二歳で、妻は三十五歳、二児があります。現在、一流会社の課長をつとめていますが、近ごろ、年とともに精力が衰え、妻の要求を三度に一度も満たしてやれず、そのためか、妻は子供にも怒りっぽく、ヒステリー気味になってきました。どうしたら精力が強くなるでしょうか。

【答え】それは、会社や官庁によくある嫉妬心からの嫌がらせで、いわば課長ノイローゼに取りつかれ、そのため、あなたは赤信号を出したことになります。課長という椅子は、上りと下りのステーションのようなもので、乗降客が殺到するわけです。

人体でも、中枢神経と末梢神経の間には神経節という結び目があちこちにあり、神経の伝導のために四六時中大多忙です。この節が疲れて、機能が低下すると、身体に異常が起こるものです。

課長クラスは、ちょうどこの節にあたるといえます。肉体的に厄年などと考えず、

まだまだあなたの肉体を形づくる細胞組織の基本は若いのですから、その若さをふるいたたせるために、細胞に潤活油をふりかけるのが得策と思われます。

それには、ホルモン剤よりも、むしろ軟骨成分のコンドロイチン硫酸という、粘素を主剤としたゼリア錠の内服を当分づけてごらん下さい。

機械についてみても、この潤活油を失ってしまうと、その運行も駄目になるように

若い彼女に申しわけない

【問い】私の妻は二度目のお産以来、局部に緊張がなくなり、そのためか、妻の身体に対する興味が失せ、四十五歳になる小生も、セックスが衰えてしまったようです。妻もちろんセックスは求めず、子供だけに満足しています。

ところが最近、同じ会社の二十一歳になるオフィス・ガールが、小生に同情して恋

細胞間にこの粘素が失われると、細胞間の働きはにぶり、しまいにはひからび、ちょうどレンガの間のシッキイを失ったようなばらばらの状態になってしまします。

だから、この粘素を服用することによって、性器を鼓舞する細胞が賦活され、体内ホルモンの分泌作用が整えられる結果、インポも治ることになります。

つまり、これは、間接的な強精薬ですが、中年で激職にあたられるあなたのような場合には、この間接法を試みるだけで結構ですが、ホルモン剤の併用もむろんいいわけです。

仲となりました。この新鮮な果実の前で、小生のセックスも急に復活しました。ところが、最近、彼女がようやく快感をおぼえ、絶えず小生を待つ心境に達してきた様子が見えますが、反対に、小生のほうでは、日増しに、初めのころの情熱もなくなり、彼女の悲願を充実させてやるのが不可能になりました。これは、年のせいでしょうか。

小生と彼女の仲を知るものは、羨ましい限りだといひ、さぞ盛んだらうとひやかしますが、ひやかされればそれだけ切実に、小生は悲しく、彼女に対してすまない気持ちに責められます。

【答え】産後の奥さんの括約筋のゆるみから興を失ったというあなたは、その年若い女性に期待していた緊張感を見いだしたにもかかわらず、味わいつくし得ないという劣等感があなたを支配していることになります。

そこで、あなたは、あなた自身の性器に緊張力をじゅうぶん持たせるよう心がけるのが必要になります。男性性器の緊張力は

三十歳の若い女房に満足を

【問い】数年前に妻を失った六十五歳の老人ですが、半年ほど前に、三十二歳の未亡人を新妻に迎えました。私も妻も、数年ぶりの夫婦生活なので、回数も相当ですが、とかく私の負けとなりがちで、負けさせまいと、妻はしきりに扇情してきます。

年輩の女性として無理ないことながら、

女性性器のそれを反発的に強いものにするからです。たとえば、握手の場合です。あなたが握力を出さなければ、相手もその力を出さないのが一般でしょう。プラスあつてプラスがあるのです。手の運動神経麻痺の患者の握力はゼロに近いのです。

そこで、あなたは、緊張力を増し、それを強大にする必要があります。性器に筋金を入れることです。その目的のために、男性ホルモン剤の服用と注射を選んでごらんなさい。それには、アモリシン注射液を毎日か隔日に〇・五ccずつ、筋肉内注射をつづけ、同時に、アモリシン錠を一日三錠ずつ服用するといひでしょう。

私の敗因は、早漏と射精直後に心悸が亢進し、心臓は圧痛をおぼえ、早鐘をうつよう

になり、非常に口渴をおぼえます。ですから、冷水をさかんに飲まずにはおられせん。血圧その他に異常はありませんが、心臓が心配でたまりません。妻は射精しないと不機嫌です。

【答え】自律神経の不調和から、射精というショックから心悸亢進を訴えることになります。そこで、軽い狭心発作を予防する意味で、コラミンアデノシン液が向くでしょう。

これは、スイスの製品で、呼吸中枢を興奮すると同時に、冠状動脈を拡張するアミノコルジンと、直接冠状動脈を拡張するアデノシンという配糖体などの合剤です。スイスのアルピニストの愛用薬ともいわれ、その一〇—二〇滴を一日二—三回、食後に服用するのですが、あなたの場合は、行為の二、三十分後に服用してごらんなさい。必ず効果があると思います。

妻と彼女の両方を使いたい

【問い】近ごろ、ぼくの性生活には、革命的な様相がおこっています。と申すのは、

三十余歳の男ざかり、妻帯で子供二人のぼくは、同年輩の未亡人と知りあい、妻と彼

女と一人二役に迫られています。妻とは隔日、彼女とは妻と交わらない日の隔日つまり三百六十五日毎日毎晩という次第です。

そこでお尋ねしたいのは、未亡人のほうは新しい果実でおいしく、一回だけでは満足してくれず、少なくとも二回は行なう必要があり、これが対策として、いかに精力いっぱいのぼくとしても、連戦連勝というわけにはゆきません。

ぼくの強さは、戦時に南方に駐屯、マボカードなる果実を常食としたせいだと思えますが、これを材料にした薬はないものでしょうか。ぼくには、果実ではドリアン、マンゴの比ではないと、いまさらに深い思い出です。こんな次第で、三十代をすぎると、インポになるのではないのでしょうか。

【答え】フィリピン方面には、「後家さんにマボカードを食わせるな」という俚言があります。これは女の性欲よけの言葉でしょう。「マボカード・ボーイ」とは、あちらでは、「助平野郎」という意味の由です。それほど、いわゆる強精果実の有効成分や生理作用は、まだ不明ですが、それは、ふくまれている「香料成分」ともいわ

れます。つまり、一連の香料媚薬ではないかと思われれます。まだそういう製剤は提供されていません。

奥さんにせよ、未亡人にせよ、今は、セックス満開期で、あなたも同様ですが、時とともに、男女とも次第に衰えてゆくことは自然の理です。そこで、あなたが現在の全勝主義を保ちつつけるには、やはり、ホルモン剤、とくに持続性のデポー剤が必要と考えられます。

それには、国産のテストノン・デポーが適当でしょう。この薬は、一種類だけでなく、二種類の合成男性ホルモンをふくみ、

コール・ガールの私の増強薬は

【問い】お恥ずかしいことですが、ただいま私は、コール・ガールとして、毎日のようにさまざまな方に身をまかせている二十六歳の女性です。

会長も、会のドル箱と申して歓待してくれ、三度の食事もたいへんな美食です。食事をおいしくとって、うんと稼いで、堅気になりなさいといってくれます。

これを月一、二回、筋肉内に一管（一五〇ミリ）を注射しておくと、あなたのような激しい射精に対し、空席になった精液分泌を生理的な要求で少しづつ補うことができます。つまり、注入した筋肉内に、デポー（貯蔵）された二種類の男性ホルモンが適当に血液に入り、次から次へと精液分泌を補うことになります。いわば、倉の中にお米をしまっておくわけです。

やや衰えたりとも、あなたのセックスは強大ですから、あと五年、十年に衰えるとは思われません。その万端の用意に、今からデポー療法を実行しなさい。

年のころから申しても女ざかりですが、それこそ連日の重労働には、近ごろ、なんとなく堪えられなくなり、今では欲得を離れて、一夜のお客さんをわが恋人と慕い、どなたにも楽しく接待できたのに……もう一段と強くなれる薬はございませんか。なお、私は、常に性病には神経質なほど注意を怠りませんが、月経異常はありません。

【答え】ご盛業で何よりですが、その盛業に追いついてゆけるような薬物は、やはり性ホルモンが適当かと思われます。まず、女性ホルモンと男女両性ホルモンのそれぞれのデポー剤の注射を試みることです。それによって、セックスの負担に堪え、月経異常を正常に導くようにします。

このデポー剤というのは高価ですが、一カ月に一、二本打てばよく、割合い安くて有効なのは、ペラニンデポーです。これは女性ホルモンのエストラジオールという天然の卵胞ホルモンに一〇ミリを、一管一cc中にふくませたもので、一回の筋肉内注射で、約四週間にわたって効果が持続するといわれ、値段は一管八百円で、経済的でもあります。とくに、あなたのような房事過度による月経異常には向くでしょう。

この注射液を打つ間に、ダイホルモンデポーという持続性の男性ホルモンと卵胞ホルモン（女性ホルモン）の混合液を、やはり、筋肉内に注入します。一管中に男性ホルモンのテストステロンを六五ミリ、卵胞ホルモンを四ミリふくんでいます。この両性ホルモン剤は、それぞれのホルモンを持

つ特殊な性作用の一部を、異性ホルモンによって調整し、過剰ホルモンの副作用を除きます。

男も女も、体内では、男女両性ホルモンを分泌して、両者のバランスが健康を保つことになります。つまり、両性ホルモン剤は、たがいに協力作用を示し、房事過度によるホルモンのアンバランスを整える役割

妖婦のように強い妻

【問い】小生は、会社の外交をやっている関係から、よく家をあげがちですが、まだ



りを演じてくれます。

あなたのような職業に迫られての房事過度の女性以外に、それと同じような結婚生活者も少なくないのです。房事過度で全勝を勝ちうる女性も、若いうちは目立った異常は現われませんが、年とともに老け方が一般に早いものですから、ホルモンのバランスを常に保つようご留意ください。

子供のない二十五歳の妻は、明日は出張という前日は是が非でも欲情します。そういう場合の欲情は実に物凄く、きわ立って厚化粧を施し、妖婦のように迫って来るのです。本人にいわせると、早く子供が欲しい、旅先で浮気をされては悲しいというのです。前から好色な妻の欲情に拍車をかけるのです。

ところが、出張の前夜は、出張仕事の準備で多忙を極めるために、妻の本能を満足させられないこともあります。このような緊急の場合、妻の満足を買う、妻を安心させて、旅立てることのできる精力剤はあり

ませんか。友人の話によると、睡眠剤が思いがけなくよく効くとのことですが……。

【答え】 ちょっと考えると、睡眠剤は中枢神経の睡眠中枢を軽く麻痺して早く眠りに落ち、性興奮どころではないと考えられがちですが、一たんこれでぐっすり寝込んでから二、三時間後には、かえって性興奮を起こします。あなたのように、応急必須の場合には、奥さんともども適量を服用し、夜半にめざめたときこそ、奥さんの満足をかちとり、ふたたび熟睡のうえ、楽しく安心して旅立つことができるのです。

あなただけが睡眠剤を用いても、奥さんは、いらいらしてめざめていますからこれは、必ずお二人とも用いるようにします。

睡眠剤には、就眠剤、熟眠剤、持続性眠剤の三種があります。この種のものは、催眠作用を速やかに現わし、就眠を容易にする作用があります。その代表的なのはプロバリンですから、この薬を就寝の三十分前に頓服して眠りにつき、じゅうぶん眠ってから実行に移り、オルガズムの快を味わいそのまま快眠します。

この場合、人によっては、一度眠りを妨

げられた興奮から、二度目の眠りの得にくいことがあります。そういうときには、レスタミンコーワ錠を二、三錠のむと、すぐ利き目が現われ、プロバリンの習慣作用を避けることになります。

ガール・フレンドもパトロンも

【問】 ある厳格な家庭の娘さんが未亡人になり、その人が時々ぼくの下宿を訪れて迫られています。ぼくは別にガール・フレンドが三人もあり、彼女たちと性のはけ口を終わって下宿に帰ると、その未亡人は予告なしに向こうの都合で訪れるのです。

そういうとき、どんな薬をのむと、お互いに満足されますか、ぼくも若くて元気ですが、急に来られると、時には降参するきもあります。

降参すると、その未亡人は、ぼくをうらみ、誰かほかに女の人がいるんだと気違いのようになって、小使い銭もくれません。イカリソウという漢薬はペニスを怒らせることが出来るそうですが……。

【答え】 ご多忙に敬意を表しますが、イカ

とくに女の幸福というのはオルガズムの感嘆詞とともに、それがイビキに変わってゆくことだとは、ドイツの性科学者ステーケルやヴァン・デ・ヴェルデのことばに従うまでもないでしょう。

リソウは羊に食べさせると精がつくというので「淫羊カク」とも呼ばれ、昔からよく補精強壯薬として漢方で用いられました。有効成分は配精体で、動物実験では、動物の精液分泌を促す作用がありますが、人間体には、はっきりしません。この種の漢薬に朝鮮ニンジンがあり、やはり配精体が勃起中枢を刺激することによっています。

あなたの場合は、むしろ前問のように催眠剤を頓服してぐっすり眠ってからの方が効果的でしょう。三十分でも一時間でも熟睡すると、あなたのような青年の元気はガール・フレンドと濫費後も回復が早く、それくらい時間、厳格な家庭から脱け出て来た彼女に待ってもらうのは致し方ないでしょう。眠りには、あなた次第で、催

眠剤とは限らず、酒でもいいのです。要はちよつとでも熟睡をとることです。

酒といえば、とくにマムシ酒、ヘビ酒――

温泉マークではいつも早漏

――陶陶酒のような薬酒が向きます。これは多分に心理的で、熟睡と強精という一石二鳥の効果をあげます。

泊まりのときは彼女も満足しますが、シヨート・タイムの温泉マークでの応急作業をうまくやるのに、妙薬はないものでしょうか。

【答え】セックスは、環境に支配されがちで、中には場所が変わると両方ともぜんぜん冷感になる例もかなりあります。あなた

の場合は、そこまで陥らなくても、焦燥感があり、彼女も周囲に気を配るため、冷感的になり、オルガズムも遅れがちになるのです。

このような応急処置には、アメリカで紹介されたエイコック氏軟膏を用い、短時間の射精を、ふだんの時間に戻すようにします。

この軟膏は、亀頭だけにうすく塗布してから一、二時間たってマヒの効果が来るもので、あなたは、愛人と旅館にゆく一時間ほど前に、ひそかに塗布しておくのがよいでしょう。

手術してから駄目になった

【問い】 ぼくも、愛人も、まだ結婚してないので、交わりはいつもホテル、旅館で行なうのですが、経済上からいつも、シヨート・タイムです。そのせいか、時たま温泉宿にゆつくりと泊まったときと違い、必ずといっていいほど早漏で弱っています。

【問い】 小生は三十五歳の商人で、胃潰瘍の手術をうけて半年になりますが、手術前と違い、どうもセックス欲が低下してきました。胃の具合も前よりいいのですが。

【答え】 手術の後や病気の床あげから、疲労だけに悩まされる方は、少なくありません。これは、肝臓が体力に生じる疲労毒素

を完全に解毒できないからです。手術後や病後は、この疲労素が、健康な時より多く生じます。とくに手術後の好転には、胃の結締組織の賦活を促すようにします。これには、肉臓にグルクロン酸素をふやして解毒を促し、毒素のない血液を胃に送り込む必要があります。



十八の乙女を散らした変態性欲

——六畳に、女三人と男二人の、入り乱れ情事——

竹 崎 孝

なまめかしい春の風が、生あったかく、人々に、やっと寒かった冬からの解放を味わわす三月二十日の正午ごろのことだった。東京都台東区浅草山谷の、通称「山谷ドヤ街」で通る簡易旅館「万寿館」の一室で、ときならぬ血しぶきがとんだ。

一階十五号室に宿泊中の無職・江藤アケミさん（一八〇〇〇〇）が、付近の金物屋から買い求めてきた刃渡り十五センチの出刃包丁を、自分の胸に突き立てて自殺を計ったからだ。

慌てて、同宿の者たちが、とめたけれど、すでに遅く、かけつけた救急車で、運ばれる途中、ついにアケミさんは、十八歳の短い生涯を、花ひらくことなく、あっけなくとじてしまった。

最初の男は異常性欲

ところが、この事件を扱った南千住署の調べによると、このアケミさんの自殺のかげには、万寿館の六畳という狭い部屋で、男二人に女三人という若者たちが、日ごと夜ごとの変態愛欲に狂っていたという、とんでもない事実がアカルミに出された。

けっきょく彼女は、この「道ならぬ愛欲」から抜け出そうとしたのか、あるいは、夜ごとのあまりに強烈な刺激が、ついに彼女の自制心まで狂わしてしまったのか……。

話は、昨年の九月にさかのぼる——。

そのアケミさんが、玉の井の映画館で知り合った男、それは露天商の酒井俊夫（三〇）だった。

ただ、なんとなく、都会のはなやかさにあこがれて、故郷の栃木県から東京にさまよい出てきた十七歳の彼女にとって、年の割りには若く見え、そして、キチンとした身なりで、優しい言葉をかけてくる酒井は、まるで夢の中の王子様のようにステキに見えた。

その夜——まったく簡単に、荒川区南千住の簡易旅館「勉強屋」の一室で、彼女は、最初のモノを許してしまった。

ただ、ここで、もし、アケミさんが処女でなかったら、酒井の欲求の異常さに気がついて、こんな道に落ち込まないですんだかも知れないが……。

酒井は、一度その行為がすむと、こんどはアケミさんの身体をヒモで縛ったり、ツネツたりする変態性欲だった。

だが、そんなことすら、なにも知らないアケミさんには、「当然のこと」のように思われていた。

二、三週間はその旅館で、狂ったような愛欲生活が続いたが、破局はすぐやってきた。

酒井もまた、そのころは、ちょっとしたことから、本職の露天商をアブレていたころなので、たちまち二人は生活費に困り、「金の切れ目がエンの切れ目」そのまま、別れてしまうことになった。

酒井のほうは、行きずりの情事と心にもかけずにいたが、アケミさんには初めての男、まして、たまらない「刺激」を教え込まれた逞しい男である。酒井をどうしても忘れられない「心の痛手」を受けたのは当然である。

しかし、その酒井に突き放されれば、たちまち生活に困る彼女のこと、寺島町のあるソバ屋に女中として住み込むことにした。

それから約半年たって、二人が再会したのは、この三月初め、浅草六区の繁華街のことであった。

アケミさんにしてみれば、久しぶりの逢う瀬に、とびつく思い。だが酒井には、その後ろに妖艶な女二人と、酒井によく似た男が一人ついていた。

ことにその中の、彼女と同じ年ごろの女の一人が、酒井と親しそうに連れ添っているのが気になった。

女は敏感な動物だ。果たして彼女が心配した通り、仲よく二組のカップルで浅草を歩いていたこの四人は、男は酒井の実兄(三三)、女たちは、これまた道でフト知り合って、手早い酒井が、自分たちの部屋に連れ込んで、今は夫婦同様に暮らしている高木陽子(一八)小山喜代子(一九)の二人。そして酒井は陽子と、実兄は喜代子と、すでに二組の肉体関係が結ばれていたのだ。

狭い六畳の部屋での二組の情事、それさえ刺激的であるのに、実兄もまた酒井にまけない異常性欲者、まるで、狂ったルツボ……こんな部屋の中へ、こんどはアケミさんが、転げ込んでいった。恋しい男の肌が忘れられずに……。

奇数の悲劇

それからは、男二人に女三人、この複雑な関係がこの部屋で続けられることになった。

とにかく、情事の組合せは偶数でなければ都合が悪い。それなのに、ここでは奇数、だれか一人がハミ出す運命は当然だ。

この場合、一番あとから割り込んだ、アケミさんが、とかく不利な立ち場にまわるのは仕方のない話。しかし彼女は、最初に酒井から異常性欲を仕込まれた女、もうどうしても酒井の行為が忘れられない肉体になってしまっていた。「どうしても酒井を私一人のものにしてみせる」こうした希望が、彼女にとっては、唯一のはげみとなった。

しかし、現実には複雑だ。そこへもってきて酒井という男は、夜のしとねでは、「狂ったような暴君ぶり」を発揮するくせに、昼間はまったく優柔不断、どっちの女が好きなのかちっとも態度に現わさない男だった。

それに、どっちなかというと、アバずれタイプの陽子にはアキがきていたのか、純情で、色白で、ポッチャリとした肉体、しかも夜の床では、彼の好みのおり、どんなポーズでもとってくれるアケミさんにひかれるようなソブリが多かった。

これがかえって、彼女にはツブテとなって返ってきた。

日増しに陽子の風当たりが強くなって、だんだんと陰悪な空気が、この部屋に満ちてくるようになった。

しかし夜になると、そんな感情は忘れたよ

うに、この部屋で、二人の男と三人の女は、あれ狂った痴態を見せるのだった。

酒井とその兄は、陽子、喜代子、アケミの三人の女を、ヒモで縛るのはもとより、あるときは、三人の身体を重ねておいて、二人の男はその上に乗って、踏んだり蹴ったりさえた。

ヒーヒーと泣き叫ぶ女たちの悲鳴が、安普請やすぶしのこの旅館中にひびき渡っても、だれものぞきにくる者もいなかった。酒井兄弟の異常性格が知れ渡っていたからだ。

それが終わると、兄と喜代子はいか抱いて抱擁に移る。それなのに酒井は、なにもしないで布団をかぶって寝るのだが、それで満足する男なのか。

それは、陽子とアケミの目が光って、どっちの肉体も抱けなかったのだ。

——「奇数の悲劇」！

見てはならない秘図

二人の女は、いつまでも暗闇の中で、真剣な火花を散らしている。

酒井が小用に起きる。そうすると、かれの両脇に寝ている二人の女は、ソツと薄目をあ

ける。

「だし抜かれては大変だ」と思うからだ。のたうつ女の嫉妬……片方の隅では、酒井の兄と喜代子が、まだ抱き合っている。

これがまた、たまらない刺激となって、二人の感情を高ぶらせてくる。

たかまつた感情を押えかねて、アケミが、そつと酒井の肉体をまさぐると、酒井のモモにかぶさった陽子の大胆な太モモにつきあたる。といって、彼女は、陽子ほど奔放にふるまえないのだ。酒井の横腹を、ウラミをこめてツネるのが、せいっぱいの気持ちの表現なのだ。

一日二日は、肉体のうずきも我慢できようが、四日五日となると、たまりかねた陽子はいよいよ積極的にからみつく。

この苦しい夜が続いて一週間、ついに運命の破局は訪れた。

この朝、アケミさんは、ついに、見てはならないものを見てしまったのだ。

前の晩もやはり、いつもの緊張が続いて、迎えた朝、彼女がちょっと化粧品を買いに出て帰ったときだった。

部屋には、二人の姿はなく、隣の十四号室のドアが少しあいている。ハッとして、その

部屋の前に立って耳をすます彼女の耳に聞こえてきたのは……セキをはずされてぶつかり合う男女の激情の声だった。

酒井と陽子のソレだ。

「やっぱり。それだから、大急ぎで帰ってきたのに……」

思わずカッとしてドアをあけた彼女、次の瞬間には、彼女はまたピタリとそのドアをしめていた。

見てはならないもの……たしかにそれは、見てはならない秘図だったのだ。

その足で、ふたたび表にとび出したアケミさんの手には、付近の金物屋で買い求めた刃渡り十五センチの出刃包丁が無気味に光っていた。

それから、その十四号室にとって返すと、恋しい人、酒井の目をぐつと見すえて、

「あんた、ほんとに私が好きなの」

こういうアケミさんの顔……青白で、思いつめた緊張にこわばった表情。思わず、ハッと息をのむ酒井。その顔をみながら……彼女は、グサッと、右手で包丁を自分の胸につきたてていた。

変態性欲の犠牲になった十八歳の乙女の最期である。

アブチック

ストーリー

レスボスの日

△ある女精神科医の手記より▽

真崎 伸一

やる気も起こらないんですもの。でも、夫のアシスタントとして、既成知識を利用し、患者さんを診察することだってあるのよ。簡単な病気になるなら、あたしだって診断がつきますわ。

それはともかく、あたし、あなたにおすがりしたいことがありますの。突然で失礼ではございますが、ぜひとも、あなたのお力をお借りしたいことがありますの。手紙でくわしいことまで記すわけにはまいりませんが、一言で申しますと、あたしと夫とのあいだの結婚生活におきまして、人には明かせぬ悶着もんちゃくが起りましたのよ。あたしたちは、開業医として、相当、患者さんたちの信用を得ておりますので、物質的には恵まれておりまして、なんの不自由もございませんから、もちろん、精神的な悶着もんちゃくですの。まあ、漠然と、このように申しておきすわ。ご聡明なあなたのことですから、もう、だいたいのことは、おぼろげにお察しくださることと思います。

お借りしたいのは、あなたの心理学方面における、深い学識なんで

「三月も半ば過ぎますと、冬の名残りの寒気も完全に跡を断ち、めつきりと春めいた暖かい気配に包まれた、過ごしやすい日々が続き、寒さの大嫌いな私も、ホッと安堵あんどの吐息をつきまして、久しぶりに、あなたにお便りをしたためる気になりました。平素のご無沙汰お許しくださいませね。あなたのことで、きつとお元気で、毎日、病院へお勤めのことでしょうね。ひょっとすると、あなたが可愛い顔をしかめて、むずかしい心理学のご本をお読みになっていらっしゃるところへ、この便りが舞い込むようなことになるかもわかりませんわ。

ずっと心理学のご勉強は続けのことと思います。学生時代から、あなたって、素晴らしく頭がよかったですもの。今にきつと、えらい女の学者になれてよ。あたしなんか、もうダメ。仕事と家庭の雑事に追われちゃって、勉強なんてやっているひまもないし、また、全然

「邪魔するヤツは、片っぱじから殺してやるのさ」……冷たいナイフの光がチクリと、むきだしにされたあたしの乳房の頭を刺した——



す。手紙ではわからないでしょうけど事態はとっても切迫しているんですよ。頼みの綱はあなたの心理学的な手腕だけなんです。

病院のお勤めのほうも大へんだろうとお察し致しますが、どうか、近いうちに、あたしの宅へお越し願えませんでしょうか。そして、二、三日のあいだ、泊まってくださいな。そのあいだに、あたしたちの結婚生活をとつくりと、ご観察くださいまし。

こんな恥ずかしいことをお願いするなんて、ずいぶん破廉恥な女だと蔑んでくださっても結構よ。現在の生活のことを思えば、軽蔑されるくらい、なんでもないことなんですもの。しつこいようですけど、たっってお願ひ致します。どうか、どうか、近いうちに、そうね、今度の土曜日にでも、お越しくださいませね。腕によりをかけてご馳走をこしらえて待っておりますわ。

夫に気がねはいりませんわ。夫だって、あたしと同じように、同じく

らい強く悩んでおりますの。ですから、あなたのことを話したら、ぜひともご招待したいと、さっそく賛成してくれましたわ。

ぜひ、ぜひ、ぜひ、いらっしゃってね。今度の土曜日よ。あたし、そうきめちゃってよ。

かしこ

まゆみより

少路美代子様へ」

あたしは金曜日の夜、まゆみからのこの手紙を受け取った。薄暗い電燈の下で読み終わって、チェツと舌うちして、その手紙をテーブルの上に投げ出した。人を馬鹿にしていると思ったの。この前と言っても半年ほど以前になるけど、新婚そうそのまゆみの宅へ遊びに行ったことがあるの。その時のまゆみだったとしても幸福そうだった。旦那さんは、スラリとした長身と、広い額の理知的なマスクを持つ、いかにも立派なお医者さんらしい好男子なので、こんなにステキな方を夫に持ったまゆみを、あたしは、本心から嫉妬したくらいだった。その方、まゆみにももの凄く優しくかったのですもの。すっかりあてられちゃって、グウの音も出なかったことを、あたしは、今でもはっきりと覚えてる。

そりや夫だから優しいのは当然かも知れないけど、あたしの見ている前で、そつと肩に手を触れて、夫婦だけに通じる意味シンの微笑みをかわしたりして、もう二度と来てやるものかと、すねて、ひねくれちゃって、早々に退散しちゃった。

まゆみとは、K医大に入学して以来、ずっと親友だった。まゆみは内科で、あたしは精神神経科の学生だったのだけど、一年生のころ、一般教養科目の生物学の講義の時間、たまたま席が隣り合わせになっ

た時、まゆみが、あたしに話しかけて来たのだったわ。そこで、急速に意気投合しちゃって、下宿まで一緒にすることにきめちゃった。二人で一室借りたほうが安上がりなんですものね。それであたし、荷物をまとめて、まゆみのアパートに移ったの。そのお部屋に、現在もこの通り、一人ぼっちで、あたしが住んでいる。まゆみが結婚してから一年近い月日、置き去りにされてね。でも、四年間も一緒に暮らしたのだから、まだ、まだ懐しいまゆみの甘ずっぱい体臭が、あちこちに残っているような気がするの。

まゆみは四年間、お医者になるつもりで勉強を続けたけども、大学も卒業せず、お見合いをして、そのままさっさと結婚しちゃったと言う次第。どうやら家庭の事情もあったようだけど、勉強に夢中だったあたしは、その深い経緯について尋ねる気もなかった。簡単にお祝いの言葉を述べ、安物のブローチをプレゼントしたただけなの。あたしつて、変わり者なのね。親友が結婚するって言うのに、なんの感慨も湧かず、心理学の専門書と首っぴきだったのですもの。

さしものあたしも、初めてまゆみの新婚の家へ招かれた時は、てんで話にならないくらい、あてられちゃったことは、前に書いた通りだった。だから、あたしは、まゆみが、こんなに変わってこな手紙をよこしたって、別に驚きはしなかったの。大そう深刻そうに精神的な悶着だなんて言ってるけど、どうせ、ちょっとしたことで旦那さんと喧嘩して、機嫌をそこねているくらいのことだろうと、多寡をくくっていたの。

「フン」

あたしは軽く鼻をならして、どさりと無作法にテーブルの前へ腰をおろし、灰皿を引き寄せて煙草に火をつけた。あたしは、そう煙草が

好きでない。だけど、精神科の助手を勤めているので、時たまノイローゼにかかっている患者の診察をすることがあり、そんなさい、女医と見て馬鹿にされているような気がすることもあるので、せいぜい威厳を保つ手段として煙草を吸うことを覚え、冷たく中性的に見せるために、病院では、黒い角縁の眼鏡をかけることにしていた。少しは効果があるようだよ。

紫煙をくゆらしながら、あたしは横目でテーブルの上の手紙を睨んだ。二、三日泊まってくれと書いてあった。また、前のようにさんざんあてつけられるのはいやだけど、行ってみるかな。

実のところ、これから夕食の支度をしなければならなかった。それがとても億劫なの。食事の支度だけが毎日の頭痛の種だった。まゆみと共同生活をしていた時は、もっぱらまゆみが食事の心配をしてくれたので、大助かりだったの。その代わり、試験勉強やレポートはあたしが助けてやっていたから、五分と五分よ。

まゆみの家へ行けば、ご馳走して貰える、すると食事の支度から二、三日間でも解放されるぞ、しめしめ、そうしちゃえ、とあたしは、さもし根性を起こして、舌なめずりをした。まゆみのこしらえたご馳走なら美味しいに違いない。結婚してから料理の腕前も上達しているはずだと思うと、お腹の虫がグウグウと鳴いたので、一人そつと顔を赤らめちゃった。あたしって、絶対にお嫁になる資格も素質もなさそうだよ。

二

「モシモシ、モシモシ……」

あたしは、肌着類の数枚入った小さなポストンバッグ一つを片手に

ぶら下げ、京都駅構内の公衆電話から、病院へ電話をかけていた。何度も呼び出しているのだが、朝の七時と言えはまだ早いので、なかなか誰も出てくれない。

「モシモシ……モシモシ……」

何回目かの呼び出しに、やっと応ずる寝ぼけ声が聞こえた。

「どなたです。急患ですか」

どうやら看護婦ではなく、宿直の医師らしい。

「いいえ、あたし、精神科の助手の少路美代子なんですけど……」

「えっ、美代子さんか。なあーんだい。驚かすない。私だよ。新川大作だよ。こんなに早く、どうしたのだい」

新川大作助教授は、あたしの先輩で、上役でもあるの。どうやら昨夜は宿直だったらしい。

「あたしね。月曜日まで休まさせていただきますから、よろしくね」

「ああ、いいよ。だけど三日間、美代子女史の顔が見られないとは残念だな。だけど君、まさかランデブーじゃなからうね」

「ほっほほ。おあいにくさま。そんなだったらいいのだけど……」

「どこから電話かけてるのだい」

「京都駅からよ」

「旅行かね。行先はどこ？」

「ふっふふ……」

あたしは、笑い声を途中で吹き消すような胸騒ぎを覚えて、しばらく沈黙した。大作助教授の逞しい身体と卓抜な頭脳に対して、淡い思慕をよせているあたしなんだもの。きつと、しばらく彼に会えぬので無意識のうちに寂しさに襲われ、それがいたずらに胸を騒がしたのだと、勝手に解釈したもの、この胸騒ぎは本当のこととなったのだよ。

「行先はね。京都府のお隣の、滋賀県のK市よ。汽車で二十分ぐらいで行けるのよ。その町で開業医をしている田中精吉って人の奥さんがあたしのお友達なの。まゆみって言うのよ。学生時代、あたしとたいてい一緒にいたから、あなたも顔くらいは覚えてるかもしれないわね。そのまゆみさんに招かれたのよ」

「まゆみって人なら知ってるよ。君も美人だが、まゆみさんも一風変わったエキゾチックな美人だね。実はね。田中精吉君と私は、旧来の友人同士なんだ。彼とは同期生なんだよ。ははははは」

「まあ、そうだったの。ちっとも知らなかったわ」

「ゆっくりと静養してきたまえ。ひとこと忠告しとくが、眼鏡だけははずして行きたまえよ。せつかくの美人がだいなしだからな」

「おせっかいやきね。眼鏡のおかげで悪かったわ」

「ははははは」

あたしは、ガチャリと乱暴に受話器を置いて、電話ボックスから外へ出た。何気なく問われるままに、彼に行先を告げたが、これが後になつて、大いに幸いしたのだが、この時は神ならぬ身の知る由もなかった。

駅の構内は、ようやくラッシュアワーの乗降客で混雑を呈し始めていた。あたしは、切符を買い求め、上りの列車に乗り込んだ。この調子なら、八時過ぎにはまゆみに会えそうだった。朝の八時に訪問するなんて悪いような気がするけど、朝食もまゆみのところでよばれちゃえという、よくない魂胆なの。それで、今朝はミルクを一本飲んだだけなんだから、お腹ペコペコで、早く発車しないかなあと、一刻千秋の思いで待ったわ。情けないけど、仕方ないわよ。

K市はわりあい静かな感じのする地方都市。これと言って目立つよ

うな特徴はないけれど、あたしは、なんとなく好きな気がするの。狭いごつごつした道をひよいと曲がると、広い空地がポッカリ飛び出したり、古びた赤レンガの洋館が妙に心を引きつけたり。そんな感じがとっても魅力なの。そりゃ賑やかな繁華街だってあるけれど、全体にどこことなく落ち着いた孤独な陰影のある町だわ。

その中でも、とりわけ閑静な町はずれの、とある神社のかたわらに田中医院のお屋敷が建っていた。由緒ありげな大きい古い造作のお屋敷は、どこことなく陰気でさえあった。丈の高い門柱には、新しい木の看板がかかっていた。

「田中医院、内科、レントゲン科、小児科」

威勢のいい字で、墨黒々ところ大書されてあった。あたしは、門をくぐって玄関に立ち、呼び鈴を押した。間もなく戸が内側から開き、見知らぬ肥ったガッシリした体格の女性があたしを迎え入れた。

「あのう、あたし、少路美代子という者ですけど……」

あたしは、柄にもなくおずおずと切り出した。その女性のギョロリとした射すくめるように鋭い目に、圧倒されちゃったのよ。

「ああ、そうですか。あなた様のことでしたら、奥様から伺っております。さあ、どうぞ、お上がりになってください」

「じゃ、失礼いたします」

あたしは、玄関脇の立派な応接間に通された。各種の家具調度は申し分のないものばかり並んでおり、渋い、どっしりした雰囲気の一部屋であった。フワフワしたクッションに、落ち着かぬお尻をおろした。半年前、このお部屋で、お三時のお茶をいただいていた時、初対面の旦那さんが往診から帰って来て、さんざんあてられたつけ。そんなことを思い出しながら、キョロキョロとぐるりを見回した。

そこへ、まゆみが、スラリとした長身を現わした。濃いグリーンのモダンな和服がしっくりと身に合って、上品で、しとやかな奥様らしい感じをふりまいていた。半年間会わぬ間に、すっかり奥様稼業が板についたよう。あたしなんかよりグッと成長した重みに押されて、あたしはポカンとして、あんななんかに想像もできないくらい気苦労するものよ」

「そう……」

あたしは依然として、まゆみの美貌を見続けた。もう愛くるしいという感じは、全く見られなかった。学生の時や新婚当初は、あたしなんかよりずっとずっと愛らしい感じだったのに、今はどうやら逆らしい。わずか半年間に、こうも女というものに変貌するものかしら。

「いつまであたしの顔を見てるのさ」

「だって、まゆみって、とても変わったのだから。あたし、てんで歯が立ちそうにもないわ」

「ほっほほほ。美代子さんは相変わらずあどけないわね。あたし、あんなの、そんな点が大好きなんだけど。あんなは少しも変わってないわよ」

あたしたちは、挨拶をぬきにして、いきなりこんな会話を取り交わした。親密の情は、長らく離



れていたとはいえ、少しも減っていなかった。

その時、先刻の肥った女性が、熱いお紅茶を運んで来た。その快い香りをかいだとたん、あたしは、緊張して忘れ果てていた空腹を急に思い起こした。

「あのね。あたしね。朝ご飯、まだなのよ。トーストで結構だから、ご馳走してくんない」

あたしは恥ずかしいのをこらえて、頬を赤く染めながら言った。

「あらあら。あんたって、ますます以前のままじゃない。同居してた時、いつもあたしがご飯ごしらえしたのを思い出すわ。よござんす。トーストにハムエッグでもこしらえてあげましょう。ちよつとのあいだ、待っててね」

まゆみは、食事をここへ運ぶように、テーブルのそばに無表情で立っていた肥った女性に命じた。

どうやら女中さんらしい。

「朝のあいだ、あたし、来診の患者さんのお相手しなきゃならないので忙しいのよ。昼からはずっとひまになるから、用件はそのさい、おりをみてお話し致しますわ。気がねなんていらないから、家の中やお庭を見て回るといいわよ。これといって変わったものもないけど、気晴らしにはなるでしょ。じゃ、あたし、これで失礼するわ。お昼の食事はお知らせしますから」

まゆみはこう言い残して、立ち去った。

女中の運んで来てくれた、ほったの落ちそうに美味しいハムエッグとトーストを食べ終わってから、あたしは、持ち前の厚かましさを発揮して、屋敷内を拝見さして貰おうと立ち上がって、応接間を出た。

三

応接間の次の部屋が書斎。しっとりとして静寂な洋室。南側の広い窓の前に、デンと大きなデスクが置かれてあった。

あたしは、遠慮なく、柔らかなクッションの回転椅子に腰をおろして、そのデスクの上に積み重ねられてある書物の背文字に目を走らせた。

あたしの興味をひいたことは、それらの書物がすべて心理学や精神医学、それに精神分析学を論じたものばかりであったことね。あたしの欲しいと思っていた書物も二、三冊見当たった。

あたしもこんなお部屋が欲しいなあ、と思いながら、何気なく手近の一冊を手にとって、ペラペラとページをめくった。その中ほどの数ページが折られてあり、赤鉛筆でグイグイとアンダーラインがければしく引かれているのに気づいて、その部分に目をおとした。それは異常性欲のうちの代表たるサディズムとマゾヒズムに関する定義づけと説明の項であった。

ふーん、まゆみの旦那さんで、このような方面に関心を寄せているのかなあ。

あたしは、もう一冊を引き寄せて、ページをくった。その書物も、異常性欲の項だけ熟読されているらしく、アンダーラインがどこまであった。

あたしの頭にチラリと、ある暗示が閃めいた。手当たりしだいに片っぱしからデスクの上の書物を開いた。予感的中した。どの書物も異常性欲に関する部分しかアンダーラインが引かれていなかったの。まゆみか、それとも、まゆみの旦那さんが、どちらかが異常性欲のこ

とを調べているのは確かだと思つたわ。

あたしだって、一時は、この不可思議な現象に強く興味を覚えて、精細に研究したことがあった。ブラジャーやパンティーが恋人の代わりになったり、死体にしか愛欲を覚えなかったりひどくいじめられて喜んだりすることは、少し考えただけでは不可思議でしょ。人間の心理、とくに性心理って、とっても複雑なもの。何度も何度も迷ったあげく、それでもとうとう一つの結論に到達したつもりよ。学問的な理論をここで述べたって面白くもおかしくもないから、これ以上くわしくは言わないけど、とにかく、あたしは、あたしなりに、異常性欲に対して確固とした見解を抱いているのよ。それは、不可思議でもなんでもない。ほんのちよっぴり正常なレールから脱線しているに過ぎないので、適当な注意を与えれば、すぐ元の通りにもどるものよ。絶対に治療できる精神的な病気の一つよ。

あたしが受けた暗示というのは、これらの書物の内容と、まゆみの手紙の意味を結び付けることだった。手紙には確か、結婚生活における精神的な悶着と記されてあったはずだっけ。精神的なんて臭い言葉でわざわざ断わってあるのが怪しいわ。単純に、性格や趣味の相違くらいに思っていたのだけど、こうなると、その意味するところは全然方向違いで、思ったより深刻な問題を含んでいそう。

あつさり白状しちゃいましょう。あたしは、まゆみか、まゆみの旦那さんの精吉さんか、どちらかが、失礼だけど性倒錯患者かもしれないという疑惑を感じたのよ。夫婦の間で、一方が正常で、他方が異常であるとする、その結婚生活がスムーズに運ばれないことは目に見えているわ。そう考えると、あたしを招いたことも納得できるわけ。あの人たちは、あの人たちなりに、矯正しようと努力した。その努力

の跡が、これらの書物のアンダーラインににじみ出ているわ。だけどついにその努力は成功せず、専門の知識を有するあたしの力を借りる必要に迫られ、あたしを招き寄せたと考えるのはどうかしら？

でも、これはみんなあたしの憶測にすぎない。結局、本当のことは後刻、まゆみの口から知るよりしかたない。

あたしは、ばらばらになった書物を、もとのように積み重ね、この居心地のよい書齋を出た。

廊下を真っ直ぐに進むと、湯殿と台所へ出る。それまでに三ツも部屋があった。奥まった日当たりのよい部屋が座敷であった。

あたしは、座敷へ入らず、台所へ行った。電化の完備したみごとな台所であった。その台所のわきに小部屋があった。ここばかりは赤ちやけた畳の、じめじめしたうす暗い場所であった。きたない机がポツンと一隅にあり、その上に一葉の写真が置き忘れてあった。

どんな写真かしら、とあたしは、その写真を取り上げて、ギョッとした。

全裸の豊満な肉体の女性が、奇妙な姿態でひしひしと荷物のように縛りあげられている、それが責め写真であったんだもの。海老責めともいう縛り方なのかしら。息も詰まりそうに苦しいだろうに、その写真の女性は、ウットリと快感に酔いしれた表情を明白に示していたわ。こんなのをマゾヒストって言うのね。ギョツとするのも無理ないでしょ。だって、同性のこの情けないかつこうを見ることは、なんだか自分がそうされているようで、いやあな寒けがしたのですもの。

あたしはブルブル、とオコリのように震える手で、その写真を机の上にかえた。これで、あたしの憶測に対する証拠があがったことになる。この家には、誰か異常な人がいるのだわ。それでなきゃ、こん

な変てこな写真が、こんな場所にほうり出されているわけがないでしよう。

あたしはそっと一步、後退した。

そのあたしの身体を、ギョッと誰かがいきなり掴んだ。

「あっ」

小さく悲鳴をあげて、あたしはそのガッシリした腕の中で身もたえした。

「その写真、ごらんになりましたね」

太い低い声は、あの肥った女中さんだった。

「ごめん、ごめんね。無断であなたのお部屋へ入り込んだりして……でも、まゆみがいいって言ったのだから、つい図々しくなっちゃって……」

「奥様をまゆみだなんて、えらそうに呼びつけにしたりして。あたしは金輪際、お前さんが好きになれないようだよ。今後、あたしのいる前で、まゆみなんて奥様を呼びつけにしてごらん。足腰立たぬほどひどいめにあわしてやるから」

女中さんは、あたしの細い身体をどんと部屋の中央へ突き放した。あたしは一ぺんに畳の上へ引っくりかえった。その拍子に、ビリッと一張羅のタイトスカートが裂けた。

こうなったらもう冷静な医学士もくそもない。頭へカーッと血がのぼっちゃって、

「お客に対して、女中のぶんざいで、なんて仕打ちよ」

と金切り声で喚いちゃった。

女中さん、こんな女にさんなんてつけることないわ。女中のやつ、無言で、じっとあたしを睨みつけた。その目の色ったら、まるで狂っ

た人のようにうす気味悪く、ギラギラと光っているの。そうね。ちょうど、精神分裂病患者が発作を起こして、吊り上がった目で睨んだ時とそっくり。

あたしは恐ろしさに、喚くのをやめて、じりっと身をずらした。女中はニヤリと笑って、あたしが退いただけ進んだ。

今のあたしには、何がなんだかさっぱりわけがわからなかった。まゆみを呼びつけにしたことや、写真を見たくらいで、このようにひどい目にあうなんて、どう思っても、奇異であった。

だが、理由はともあれ、あたしは本能的な恐怖を感じて、逃げよう逃げようと焦った。女中は、ネズミを追いかつた猫のように、目を細め、一瞬、歓喜の色を閃かして、あたしの身体の上に、重い身体をのしかけて来た。あたしは、いやというほど強く顔を畳でこすられて、思わず呻き声をあげた。

四

深い深い地の底の暗闇の中を、不安と恐怖におののきながら、盲めっぽうに彷徨しているうちに、いきなりパッと地上の白光をあびせられて、くらくらと眩いたとたん、あたしは、意識をとりもどした。

白光は夢の続きではなかった。あたしの瞳光いっぱい射し込んでいた。まぶしくって、反射的に手をあげて顔をおおいかくそうとしたが、肝心の手がぴくりとも動かない。あたしは、ほんの少しのあいだ何がなんだかわからなかった。全身が何かで締めつけられているように息苦しく、身動きもできないことに気がついた。あたしは始めて、縛られている自分を見つけ、呻きながら身をよじった。細引きが肉に食い込んで、骨までぎしぎし鳴るような苦痛を感じ、思わず悲しい叫

びをあげた。

こうしてあたしは、荷物のように荷作りされたまま押入れから転がり出た。

「痛かったでしょ。ごめんね」

優しい声が上のほうでした。聞きなれた女の声であった。

あたしは、おずおずと見上げた。まゆみが複雑な微笑を浮かべて、あたしをじっと見おろしていた。そのまゆみを見ているうちに、あたしは、少しずつ心の平衡をとりもどしていった。

すっかり落ち着きをとりのどすと、あたしは、こうなったら、まゆみだつて容赦するもんかと、唇をとんがらして抗議してやったの。

「こんなひどい目にあったの、生まれて始めてよ。なんだか変な写真を一枚、つい見ちゃったおかえしに、気を失うまで首を締めつけられ、そのうえ、縛りあげて押入れに投げ込むなんて我慢ならないわ。最大の侮辱よ。ニヤニヤ笑って、何がおかしいのさ。さあ、早く縄を

といてちょうだいよ」

「ほほほ、そうやって縛られて転がされている美代子って、案外、チャミングじゃないか。といてやるのがいやになっちゃったな。どう、そのまま辛抱している気がないこと。その代わり、ご褒美をどっさりあげるからさ。あんまり痛そうな顔してないところを見ると、気持ちがいいのじゃないかしら」

「なに言ってるのさ。へんたい！ とかないと、後でひどいから……」

「ふふ。あんたは縛られてるし、あたしはごらんの通り全くの自由。すると、ひどい目にあうのは、まず第一にあんたよ。いつまでも憎まれ口をたたくと、ほんとにといてあげないよ。そうら、縄をといて欲しかったら、泣いてごらんよ。ほろほろと涙をこぼして泣いてごらん

よ。あたしって、美しい女の泣く姿を見るの、とっても好きなのよ。見栄^{みえ}もはりもなく泣いて泣いて涙にまみれて哀願する女が、とっても好きなのよ」

まゆみは、あたしの髪の毛を引っ張りあげて、上半身を抱き起こした。ひいっと、あたしは髪の毛を引っ張られた痛さに悲鳴をあげた。

「大きな声を出すんじゃないよ。このあくたれ娘め」

ぴしぴしと、あたしは、白魚のような手で両頬を張られた。あたしはまた泣き声をあげちゃった。ちかちかと近づけてあたしを覗き込んだまゆみの顔から、先刻までの微笑は完全に消え去っていた。両眼はヒステリックにつりあがって、ギラギラと異様に輝き、唇はグシャリと気味悪くゆがんでいた。美しさは少しもそこなわれてはいないが、この美しさは、悪魔の美しさであった。伝説の中にしか存在しない、妖女か魔女が、この世に姿を現わしたように凄^{おそろ}い形相を示していた。

そんな形相をしてまゆみは、あたしの不自由な上半身を抱きしめて頬ずりしてきた。あたしはゾツとして、悪感^{おかん}におそわれて逃がれようと思ったが、思うだけで、ガツチリと縛りあげられた手足は、ピクピクとわずかに局部的に抵抗しただけであった。

もぞもぞとまゆみの心臓の血のように赤い唇が、あたしの顔中を這いずりまわった。まゆみの手は、あたしの上着のホックをはずして背中を撫でていたが、じりじりと胸のほうへまわってきて、ガブリと乳房をつかんだ。あたしは、ゾクリとした快感を感じて、思わずウツトリと瞳を閉じてしまった。

まゆみの手はコリコリとあたしの乳房を揉んだ。あつ、あつ、あつとあたしは、あたしの意志に反して、快い呻きを洩らしながら、夢心地で甘えかけるように、自分からまゆみの胸の中へ身を投げ出した。

まゆみはしっかりとあたしの身体を抱き止め、とうとうあたしの唇の上に、燃えるような唇を押しつけた。しばらくのあいだ、あたしたちは、忘我の境地をさまよった。

「あたし、まゆみが好きよ。何したっていいのよ。あたし、あんたを憎めない。大好きよ」

あたしは、接吻が終わった後、かすれた声でまゆみの耳に囁いた。「あたしだって、あんたに負けないくらい、あんたが好きなのよ。ずっと以前から、そう、あんたと一緒に暮らしている時から、好きだったの。好きでなかったら、どうして四年間も共同生活ができたでしょうか。でも、あの時は、あたしも純だったの。だから、女が女を愛するなんて、いけないことだと思って、こらえていたのよ。でも、よかったわ。だって、ついに美代子、あんたは、あたしのものになったのですもの。よくって？　もう、あんたを死ぬまで離すものですか」

まゆみは、情欲的な口調で言ってから、あたしの身体を、力を込めて抱き直した。二人は、身も魂も一つに融合したように感じた。全世界があたしたちの愛情の快感の中へするすると吸い込まれていくような気がした。

いつまでも、いつまでも、この快感が続くようにと祈ったわ。だが駄目ね。

やがて、激情は少しずつ去って行った。あたしは、情欲を失い、理性が頭をもたげてくるのを、どうしようもなかった。

苦い苦い思いが、強く激しい罪悪感とともに、あたしの、鈍く痺れた頭脳を、鋭く研ぎ澄まし始めた。あたしは、完全に自己を呼び戻し、本来の冷静な女医に立ちかえった。

「ねえ、もういいでしょう。縄をといてちょうだいな」
あたしは静かに言った。

まゆみも、激しい行為によって欲情を発散さしてしまったので、今度は素直にあたしの手足の縄をといてくれた。手足の縄が、締めつけられていたために、萎えたようになってしまい、足腰に力が入らず、立ち上がったものの、二、三步、歩を進めただけで、よろめいてへなへなとすわり込んだわ。

もう縛られるなんてこりごりよ。手首や足首は紫色に縄目の跡がはつきりと残っているの。あたしは、腑甲斐ないけれど、しばらく動くのはよして、身体が回復するまでこの場にへたり込むことにきめた。「ねえ、あんた。あんたは、確かに、あたしへの手紙の中で、何事か相談したいことがあるって書いていたわね。その相談したいことって一体どんなことなのよ。今したようなことがそうらしいとは思うんだけど……あたし、悪いけど、ご主人の書斎に入った時、デスクの上にあった書物を見ちゃったのよ。驚いたことに、本という本が、全部が性心理を扱ったもので、それに、とくに熟読されている項目が、異常性欲ばかりじゃないの。それで、その時は多分、あんたか、もしくはあんたの旦那さんか、どちらかが変態なのであろうと想像したのだけど、もう今となっては、その想像も確定的な事実となったわけね。変態なのはあんたなんですよ。あんたは同性愛で、サディストなのよ。だから、平常な結婚生活なんて、なんの感激も起こらないのね。恐らくあんたは、冷感症か不感症なのでしょう」
あたしはまゆみのほうへ向き直って、女医としての威厳を込めて話した。まゆみったら、先刻までの気違いじみた態度はみじんも残さずげっそりした顔つきで、あたしの言うことを聞いていたが、変態で不



感症だとあたしに断定された時、悲しみを込めた瞳を向けて、弁解した。

「だけど、あたし、いけないことだと思って、主人にも打ち明けたし、自分でも治そうと何度も試みたの。主人もたいそう心配してくれて、僕の畑ではないが、できるだけやってみようと言って、精神療法の真似事やトランキライザーなどものましてくれたのだけど、どうにもならなかったの。でもあたし、締め切れず、最後の手段として、あんたにすがりついたわけなのよ。あたし、主人を愛しているのよ。だから、だから、あたしの病気を治したいのよ」

まゆみは、さめざめと、すすり泣きを始めた。ここで情にほだされてはならないと思って、あたしは冷たく尋問を続けた。

「あんたは、自分の病気を心底から治したいと思っているの。ちっともそんな気なんかないのでしょ。ただ、口先だけで、そう言っているだけなのよ。自分が真実治りたいと思ったら、そんなの、わりかし容易に自制できるはずよ。なのに、さきほどのあの行為は何よ。サディ的、同性愛的欲求に取りつかれたら、発作的な行動に、なんのためらいもなく出るくせに、欲求が満足した後は、治りたい、治りたいと、むやみに願う。全然身勝手よ。本当に治りたいのだったら、あんな変態女中

などは追い出して、ご主人の愛の胸に思い切って全身を投げ出すことよ。あんたを救うことができるのは、あたしじゃなくて、あんた自身と、あんたの愛しているご主人なのよ。このことをしっかりと覚えておくのよ」

五

今やあたしは、まゆみに対して、従来通りに主導権をふるうことになった。まゆみも、いじらしいほど熱心に、お説教に耳を傾けていた。

まず、あたしは、まゆみの精神分析から治療を始めねばならない。病氣の原因についておおよその見当をつけてくれる治療法としては、精神分析に優るものはほかになかった。

しかし、その前に、絶対に片づけておかねばならぬことがあった。それは、あの、あたしを縛った女中を、この家から追い出すこと。

「あんたと女中との関係については、後からくわしく聞くわ。それより先に、あの女中にひまを出すことが大切よ。きつと、あんたを変な遊びに誘い込んだのは、あの女中に違いないのだから……善は急げよ、あんなのが家にいると、あたしも、おちおちと安心して寝られないわ」「おちおちと安心して寝られないようにしてあげるよ」

突然、背後で太い声がした。あたしは、びっくりして振りかえった。あの女中が、大きな目玉をむいて、あたしを睨んで、狭い入口に立ちはだかっていた。あたしは、本能的に逃げ道を求めた。だが、退路は女中によってふさがれていた。

「さつきは、写真を見たので、その罰にあのような目に合わせてやったのに、まだ性こりもなく、この人を……」
と言って、まゆみを顎で指し示して、

「あたしから奪い取るつもりなんだね。まゆみさんは騙されても、あたしは騙されないよ。なんだかんだと、むずかしいご託を並べてたけど、そうは問屋がおろすものか。さあ覚悟をおし。まゆみさんをあたしから奪い取ろうとする者は、どんな目に会うか思い知らしてやる」
この女と腕力で争っても勝ち目は無い。だと言つて、三十六計も今は不可能。あたしに残された救いの道は悲鳴をあげることしかない、あたしは大声を出そうと構えたたん、まゆみに、ぐいと両手で息が止まるほど強く後ろから口をふさがれた。そして、叫び声をあげるひまもなく、二人がかりで嚴重に猿グツワをはめられ、ぎりぎり縛り上げられてしまった。

まゆみの裏切りによってあたしは、ふたたび自由を失って、畳の上でほぞをかんで呻吟した。女中はあたしの身体を乱暴に抱きあげて、またもや押入れに押し込んだ。

「きょうは往診をすませてから、旦那さんは何か所用があるとかで京都のほうへお出かけになるんですって。二、三日、友人の家に滞在なさるそうで、お帰りは、きょうが土曜日だから、早くて月曜日ということになりますわね。旦那さんがお出かけになりましたら、看護婦さんにも骨休めのため実家へ帰って貰いましょうよ。すると、今夜と明日一日中は、この広いお屋敷にいる人はあたしと、まゆみさん、あんたと、それから、この押入れの中でもだえている、ちよいと愛くるしい顔の、生意気な女医先生の三人だけになりますわね。おあつらえ向きでとこですよ。うんと、あたしや女医さんをオモチャにしてあげる、高慢な鼻をペシャンコに叩き折ってあげましょうよ」

「それはあたしがします。あんたは、美代子に手を出さないでよ。お手伝い程度なら許してあげるけど」

「それで結構ですよ。あたしが責めたら、あの女はきつと死んじまうにきまってます。あたしや殺したいほど憎いんだ」

わざとあたしに聞こえるような声で会話を交わしていたのち、彼女たちは、この部屋から去ったようだ。今、何時ごろなのかしら。四辺のシンと静まりかえっているのが無気味だった。時間は昼前であろうと思う。昼前というものは案外どこでも静かなものだ。

あたしは一体どうなるのかしら。今朝は心はずませ喜び勇んでこの家を訪れたのに、この有様はどうだろう。情けないことになっちゃった。誰がこんな残酷な災難に会うことを予想できたであろうか。

今夜、そうだわ。あの悪女たちは言っていたわ。今夜、あたしを殺すほどこいじてやるんだって。どうしたらいいのかしら。こわい。今夜が来るのがこわい。ああ、誰かあたしを助けてくれないかなあ。

でも、あたしがこの家に来ているのを知っているのは、あの悪女たちだけなのだ。あたしは死ぬほどこいじめられることから逃げられそうにもない。でも、逃げなきゃどんな目に会うか想像もできない。変態の気違い女たちは、あたしを殺しかねないのだ。

逃げよう。でも、逃げるには、この縄をとき、猿グツワをはずさなければならぬ。ああ、神様、この哀れな娘をお助けくださいませ。

あたしは、死もの狂いで縄をはずそうと思って汗まみれになってもがいた。だが、皮肉なことに、もがけばもがくほど、縄はますます身体に食い込み、手足のしびれを早く招いたに過ぎなかった。

結局、一時間とたたぬまに、あたしは、動く気力も体力もなくしてしまった。全身の肉という肉はしびれて感覚を失った。

あたしは、諦めてグッタリとだらしなく伸びた。涙だけが、いつまでも止まることなく頬を濡らした。心細く悲しく、涙がこぼれてこぼ

れてしかたなかった。まゆみという魔性の女に魅入られて戦慄する一匹の小雀のような存在にすぎないあたしだった。

あたしが半分仮死状態で押入れから引きずり出された時、すでに日はとつぷりと暮れ果てているようだった。二十ワットの電球が薄暗くこのきたない部屋を照らしていた。あたしは、足の縄だけとかれて、真っ先に風呂場へつれて行かれ、裸にむかれて、二人の女から、ごしごしと、全身を洗い流された。もうこうなると、羞恥の感情も起こらず、無感覚に近かった。

素肌には薄い浴衣を着せかけられただけで、高手小手にぎっちり縛られ、首縄までかけられて、罪人のような姿になったあたしは、茶の間で、サンドイッチを二片、無理矢理食べさせられ、ビールを一本、鼻をつままれて口中へ流し込まれた。

「主人は午後の往診をすませてから、四時ごろに京都へ出かけ、明後日にならないと帰らないし、看護婦も二人いるけど、それぞれ近くの村の実家へ帰らしたの。だから、この家にいるのはここに居る三人だけなの。心おきなく、いじめてあげるから、覚悟なさいね。泣こうが喚こうが、どこへも聞こえやしないのよ。あんたが今朝言っただけに、あたしは同性愛のサディストなのよ。ここに居るこの女中の梅さんは実はマゾヒストで、ずっと以前から知り合いだったのさ。ある雑誌の読者欄で知り合うようになったのが機縁で交際を始めたの。あんたと同じ部屋で下宿していた時も、月に二、三度は外泊したでしょう。実は、梅さんといろんな遊戯に耽っていたのよ。結婚してからもすぐあたしが、女中という名目でこの家に呼び寄せたの。家庭の事情でやむを得ず主人と結婚したので、ほんとに結婚したかった相手は、梅さんだったの。昨日まではそうだったの。でも、今はあんたよ。美代子。」

あんたなのよ。あたしは、あんたと会った初回から、あんたが好きだったのよ。だけど、あたしは、後ろ暗い劣等感から、その好きな気持ちを無意識に否定していたのだったわ。けども、きょう、あんたに会って、こうしてあんたを身動きできないように縛って抱き締めてみて、ハッと気づいたの。あんたへの愛に目覚めたのよ。断じてあんたは、あたしのものよ。あたしの愛する所有物よ。あたしの可愛いペツトなのよ。梅さん、あんたも、あたしの気持ちをわかってくれるわね」

まゆみは、奇怪な愛の告白を、狂ったような調子で、炎のような息を吐きながら、言い終わった。

あたしは、とつくの昔に、女医としての威信も、冷静な心理判断も心のどこかへ置き忘れ、ボンヤリと空虚な面持ちで、まゆみの告白に聞き惚れていた。まゆみの顔は、お世辞なしに美しかった。濡れた黒

耀石のようにつぶらな瞳が、あたしの心を魅了した。やはり、例の魔女のような、ニンフのような妖しい美しさであったが、あたしは、その美しさに酔いしれちゃって、こんな美女に愛されるなんて、あたしという女は、なんと幸福なんだろうと、倒錯した愛の泉に溺れ込んでしまったの。

その時、考えもしないことが起こった。むっつりと押し黙っていた梅という女が、さっとと剽悍な動作で、まゆみを襲撃し、たちまち彼女を、後ろ手に縛り上げてしまった。

「何をすんのよ。この縄をといてよ。早く。早くとかないと、後でひどい目にあわすから」

「どうぞ、後でゆっくりあたしをひどい目に合わせて可愛がってください。でも、あたしや、あんたに、この生っ白い小娘が可愛がられるのを、黙って見過ごすわけには参

風俗奇譚・総目次 (各号お揃えになると、ちよっとしたコレクションです)

臨時特集号

△二百円▽

(写真) 縄の魅惑・十景
(口絵) 密林の危機・梅の刺青・

白髪鬼・小田利美

特集・これが異常性欲だ

尻を切られて欲情する変態女

妻の柔肌で自分の名を刺青

女の肌をナメる老窃盗犯

妻に鶏姦を求める男色者

変態性欲賛成論

変態性欲図譜

ある変態性欲者の半生

▼秘帳・新はん婦美の葉屋し

明治性的珍聞史

妊娠十カ月の変態見世物

刺青奇譚・太腿に刺青する女

女ばかりの同性愛クラブ

セックスを实地研究する一群

姦通した女にはこんな刑罰

秘具・秘薬あれこれ話

私はムチで打たれると満足

わたしは淫獣の餌食となった

尿道で快感を覚える女

金魚を握り潰し腹を裂く少女

ある輪姦事件

麻薬注射し獣欲を燃やす淫魔

艶妖特集号

△二百円▽

(多色刷) かぎや店先・鈴木春信

(写真) 肌の十字架・九景

(口絵) 梅の木責め・絶望の断崖

・美しき戦利品・小田利美

特集・サディズムの種々相

鞭打症 緊縛症 刺傷症 殺人

淫薬症 食人症 強姦症 死姦

症 童姦症 汚瀆症 獣姦症

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理

現代版・蛇淫の怪

▼刑罰罪人の縄の掛け方

りませんよ。あんた方は若いし、あたしはもう衰え始めましたよ。三十を半ば過ぎちゃ、どうしても、肉体であんた方に太刀打ちできない。だと言って、まゆみさんをほかの女にも男にも奪われたくない。まゆみさんを奪い取るやつは、殺してやる。必ず殺してやるんだ。顔をめっちゃくちやに切り刻み、手足をバラバラにし、二目と見られないようにしてやる。そうすれば、まゆみさんの愛は、あたしに、

▼白人女性を征服した黒人男性
▼愛する女の膚を本の表紙に
▼縄で縛った歓喜の抱擁
▼王妃マユラの虐殺
▼回教残酷譚・種馬にされた男
▼明治性的珍聞史(2)
▼白い肌を焼く燭台の灯
▼犬のオリの中の裸身の美女
▼女の黒髪に埋もれて死にたい
▼妊婦に劣情した強盗強姦事件
▼犬により快楽を求める女

春の増刊号 八二百五十円

(妖異・猟奇・艶笑特選読物25編)

▼(多色口絵)近衛家の老女村岡
▼(写真口絵)捕われの白肌・秘画
▼(二色刷口絵)小田利美責め絵集
▼(グラビア)責められる肌ほか
▼変態性欲考
▼猫の怨霊
▼若い女の生胆をとる老婆
▼獣婚・女と犬
▼会員三百人の男色クラブ
▼魔の十三号室
▼舌を噛み切られた男
▼死体を溶かす
▼女に奪われた「処女」
▼吸血鬼は実際にいた
▼実兄と結婚した女の色ざんげ
▼男女一代・人相ひとり判断

▼男を十字架にかけ鞭うつ女
▼悪魔に肌を許した人妻の話
▼蛇姫ストリップパー
▼大内山淫乱五人の女官
▼とかく女は色好みという話
▼貞操帯のはなし
▼全身に男の紋を入墨したお玉
▼妻の貞操を試験した男の話
▼毛長夫婦

悦虐特集号 八二百円

▼(多色口絵)五彩のサタン
▼(グラビア)美女緊縛ほか
▼(口絵)小田利美責め絵集
▼特集・鞭打の心理と実相
▼鞭打の心理・鞭打の歴史
▼鞭打たれる悪魔のイレズミ
▼鞭打から生まれた愛情
▼焼け火箸の快楽死
▼人間と蛇との交情
▼地獄尼僧院
▼火あぶり台の女
▼縛りあげた女の可愛さ
▼鴉の餌食となった女百六十人
▼明治性的珍聞史(3)
▼変態性欲名画館
▼私は変態的方法で満足する
▼ピストルを持ったサディスト
▼女の死体に憑かれた男
▼性毛に関する四つの不思議
▼情事のサド・マゾ・アベック

▼伯爵夫人の血風呂
▼私は変態なのだろうか
▼皮バンドの苦痛からの愛情
▼男を下僕のように扱う楽しさ

耽美法悦特集号 八二百円

▼(多色口絵)空中人魚
▼(グラビア)艶肌受難・悦虐の夜
▼(口絵)ルーベンスの変態名画
▼特集・同性愛
▼同性愛の種類と実際
▼女性的男子の恋慕手記
▼同性愛少年が殺人を犯すまで
▼白い肌同士の陶酔
▼マゾッホの被虐待契約書
▼女の切腹——その心理の分析
▼野獣の夜
▼マゾヒストの美酒
▼ベルトの魅惑
▼深夜の殺人ショー
▼女だけに加えられる拷問
▼幽霊と恋愛し結婚した人々
▼性的イレズミ考
▼明治性的珍聞史(4)
▼ハレムの残酷物語
▼混線結婚
▼女の肉肉を食べた男
▼女の肌に書いたカミソリ文字
▼サディストの餌食となった女
▼絵姿フェチズム
▼吹上佐太郎の性の異常遍歴

また戻るに違いない。いいかい。
小娘！ 覚悟をおし！ よくも、
よくも……」

梅は、卓上の果物ナイフの先端
を、ピタリと、あたしの胸に押し
あて、この世の人と思えぬ醜怪な
形相で睨んだ。

「やめて、やめてえ！ 梅、お願
いだから、やめてえ。美代子の代
わりに、お前の気がすむなら、あ
たしを殺して。やめて！ ねえ、
お願いだから、助けてやってよ」

「あんたがこの娘をかばえばかば
うほど、あたしやそれだけ憎くな
るのさ。まゆみさん、よく見てお
おき。あたしや、殺されても、あん
たを手離さないからね。だから、
邪魔するやつは、片っぱしから殺
してやるのさ」

身体をぐいと、梅の逞しい腕の
中に引き寄せられ、ナイフの先が
チクリッとあたしの乳房の頭を刺
したとたん、あたしはあまりの恐
怖のために失神してしまった。

右は、本誌の既刊分です。各地で好評を博し、売り切れの書店が多いので、その場合には、
本社へお申し込みください。それも、残部は少ししかありませんゆえ、お早く願います。

ふと気がつく、あたしはフカフカとした、心地のよい夜具に包まれて横たわっていた。あたしの枕もとには、思いがけないことに、新川大作助教授と、田中医師と、まゆみの三人が、沈痛な表情ですわっていた。あたしは、夢魔から覚める思いで、パッチリと目を見開いて三人のほうを上目使いに見やった。

「やあ、気がついたね。よかった、よかった。けれども、動いちゃいけないよ。胸の傷が疼くかも知れないからね」

大作助教授が、優しくいたわりの声をかけた。三人の人々の顔に、ほっと安堵の色が浮かんだ。

「ごめんね。あたしのような変態女は、死んじまえばいいのよ」

まゆみがワッと泣き伏し、田中医師の顔面が深刻に引き締まったわ。田中医師も、夫としての立場上、まゆみの悪癖のことが心配だったので、友人である大作助教授のもとへ相談に出かけたのだった。そこで大作助教授が、あたしが行っているだろうと田中医師に尋ねたのであるが、田中医師は、全然あたしの訪問について知らなかった。こいつは変だということになり、万一を思つて、夕食もそこそこに京都を立ち、夜の八時ごろ、二人して玄關まで来た時に、まゆみの絶叫が聞こえたので、家の中へ飛び込み、危うくあたしは生命を失う寸前に助けられたのだった。傷はたいして深くなかった。これからは一月に一度だけ、まゆみに会つて、可愛がられることをあたしは約束させられちゃった。まゆみの病氣は、どうやら先天的なものらしいので、全治は望めず、あたしを適当に可愛がることで、まあ、言ってみれば、欲情を昇華させるというわけね。

これは、大作助教授の発案なのよ。男って変ですわ。女同士なら抱き合つて寝ようが何をしようがそう気にならないのね。田中医師だっ

て、喜んで同意しているんだから、男の気持ちって、知れやしない。まゆみに思う存分可愛がられるあたしの身にもなつてちょうだいよ。ゾツとしないわね、ほんとに。

それから、梅という、あたしを殺しそこねた気違い女は、精神病院に入院したそうよ。脅迫観念がすごく発達し、悪性化していたのよ。

結局、あたしは、精神科の女医として手腕をふるうどころではなく、むしろ、この事件によつて、女医である前に、生理的にも、心理的にも、か弱い一人の女にすぎない事実を、つくづくと思い知らされちゃったってわけね。

■ 本誌ご購入のしおり ■

一月分 (1冊)	一三〇円 (送共)
三月分 (3冊)	三九〇円 (送共)
六月分 (6冊)	七五〇円 (送共)
一年分 (12冊)	一四〇〇円 (送共)

本誌は、直接郵送による頒布を主としておりますので、購読ご希望の方は、直接発行所までお申し込みください。月極めの場合は、右のとおり割り引きの特典がございます。
なお、ご送金は、現金書留か小為替にしてくださいと、確実で、ご便利でございます。

風俗奇譚 六月号

定価 一三〇円

昭和三十五年五月二十日印刷
昭和三十五年六月一日発行

編集人 高 倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一・六七

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二九一八番